源氏物語「本文と享受」の研究（Ⅱ）

岩下光雄

一、『源氏物語』の世界――公開講座「秋桜セミナー」追考――

一、わたしのうちなる『源氏物語』(1)――折口・武田・三谷学との出会い。何を読もうとしたのか――

二、『源氏物語』をどう読むか――物語の「しくみ」を読む――

三、『源氏物語』はどう読まれてきたか――「読み」のなかに求められてきたもの――

四、わたしのうちなる『源氏物語』(2)――「藤原定家論への序章」。執念の火群のなかで――

五、『源氏物語』にまなぶ――文学の「こころ」にふれつつ――

二、新資料　高森正雄氏蔵『竹取物語』解題

一、形態など書誌学的研究

二、文献学的研究（本文系統論　序説）

一、『源氏物語』の世界――公開講座「秋桜セミナー」追考――

一、わたしたちのうちなる『源氏物語』(1)――折口・武田・三谷学との出会い。何を読もうとしたか――

I

人生のなかで、いい師にめぐりあうということほど、すばらしいことはない。わたしが学んだ頃の国学院大学は、柳田国男、折口信夫、山岸徳平、久松潜一、金田一京助、武田祐吉先生というような斯界の碩学がそろっておられた。雨漏りをバケツで受ける音を聞いての講義であったが、いまのぐうたらな日本の大学とは違っていた。貧しくて、飢えてはいたが、学問を求めてやまない輝くような瞳があった。大学は教学と研究に責任を持たなければならない。そういう人材を後継者として育てていく義務と責任とを忘れてはいけない。

旧制松本第二中学校に入学し、学制改革で新制高校となったので、松本県ヶ丘高校には六年間お世話になった。高等学校三年の時、松井富美先生に国語を教えていただいた。大変ユニークですばらしい先生だった。その頃の松本県ヶ丘高校には、山田石男、塩原松美、吉沢順、石田康弘、川上栄昌先生というような、数え切れないほどの逸材がおられた。折口先生との出会いは、松井先生のおすすめだった。信濃教育会が折口先生を招いて、「第四回　源氏物語研究会」を

催す。塩尻市洗馬の長興寺という所だから、行って聞いてみたら。ということだった。竹の枯葉がさらさらと風に音を立てる小春日和のあたたかい日だった。禅寺の庭園が目にしみた。折口先生の、あのすばらしい独特な読みと現代語訳で、須磨、明石の巻の物語をお聞きし、すっかり感動してしまった。帰りは偶然先生と同じ列車に乗り合わせた。岡野弘彦先生がお伴をしておられた。小野駅で挨拶をして降りたが、人をひきつけてやまない、あの風格に、すっかり惚れ込んでしまった。

その頃のわたしは、次田潤の『通史』を手本に『概説国文学史』という活字の本を作ったり、「浮雲」というような私小説めいたものを「県陵新聞」に書いたり、評論を同人雑誌や、校友会雑誌などにのせたりして、作家か文学者にでもなろうと考えていた。松井先生からは京都をすすめられたが、国漢と社会だけではとても相手にしてくれそうもない。英語と数学がからっきし駄目だった。大学の英語も二部の英語を履習して丸谷才一先生のお情けをいただいた。佐藤先生のお力添えである。折口先生に惚れてしまっていたので、国学院大学しか受験しなかった。

「文学第一研究室」というのが折口先生の研究室で、西鶴の研究会に顔を出した。驚いた。水を運んで来る人、座蒲団を持って来る人、いろんな方々が先生を取り囲んでいて、入っていく余地がない。近寄り難い威圧感を感じて、図書館に逃げ込んでしまった。先生の『古代研究』を読んで、またまた感激した。ほとんど毎日、閉館まで勉強していた。本が買えない時代で、本を読んではノートに写すようなことをしていた。図書館にはMさんという司書がいて、今どき勉強するなんて変った奴だ、そんなに勉強したいのなら、「文学第三研究室」に行ってみろ。助手のY氏に招介してやるから。というわけで、二年の時から武田先生の研究室にもぐりこむことができた。これが同じ大学かと思うようなリベラルな雰囲気だった。ただ、佐藤先生は癖の強い方であった。研究室で『源氏』のゼミをお聞きしたが、残念ながら学問のある方だとは思えなかった。武田先生からは研究室で『万葉』のゼミと大学院博士課程の一対一の『伊勢』の講

義を横から、これも一人で盗み聞きした。盗み聞きといえば、柳田先生の民俗学もそうだった。小柄な先生は、いつも和服姿で講義されていた。和服のよく似合う先生で、すばらしい内容の講義をされていたが、盗み聞きする学部の学生が他にもいて「お達し」が出されて、大学院以外の学生はいけないということになった。武田先生だけは「構いませんよ」ということでにこにこと笑って許してくださった。先生は学問的に非常に厳しい方であったが、洒脱で飄逸な面を持っておられた。人として非常に魅力のある方だった。宣長は『古事記伝』を書く時、自分で作った索引を使っていたと聞いたことがあるが、武田先生には驚いた。国歌大観の番号と『万葉』の全歌を暗記してしまっておられた。「総索引」で学生たちがまごまごしていると、その歌は、何番のこういう歌です、と言われる。私は動転した。恐ろしくなってしまった。『万葉』の碩学とは、かくまで至り尽し、きわめて尽された方なのであった。

三谷先生は、わたしの学生時代、甲府の県立図書館長から、実践女子大学に移られていた。武田先生の紹介状をいただき、小田原の高等学校に赴任したわたしは、そこで六年間お世話になって長野県に帰った。木曽東高校で教鞭を執っていたが、反面教師であったように思う。山田石男校長のご指示で、創立何十周年記念講演会に三谷先生をお招きできたのが機縁で、諏訪国文学会の創立記念講演会にもおいでいただいた。武田先生は下戸で「さんぼん堂」の和菓子を大変愛されていた。三谷先生は上戸で談論風発とどまるところを知らないという趣のなかで、必ず山葵のきいた結末がついているお話を好まれた。わたしは、三谷先生から民俗学、文献学を学んだばかりか、今日のわたしを育てていただいた。この短大に入ったのも先生の強力なうしろ立てがあったからである。

折口、武田、三谷学との出合いは、わたしを研究者、教員として大きく育てていただくことになった。「松阪の一夜」のごとく、すぐれた師との出合いは、人の人生を変えていく決定的な瞬間、機縁となるものだと思う。ぬるま湯にどっぷりつかって、鞄持ちのようなことをしてごますったり、ハングリーを知らぬような輩は、ぐうたらな研究者にもなれ

ない。大学のために不幸なことだと考えている。研究者はいつも危険な刃物を持ち、自分を切り苛んでいる。それは、作家精神というか、野武士というか、そんな異端の徒というような一面を持ち合わせていなければならないと思う。資料を読み、論理を組み立てていく創造的な仕事は、そういうものと裏腹になっている。物書きや物よみを常人の判断で論じようとしてもだめだ。破滅的な生き方が、私小説作家だけではなく、作物をつくるという営みのなかには、残念ながらつきまとっているように思う。わたしは、いつもそんな風に思っている。私は執念の火群(ほむら)のなかで、「すき者」の生き方に徹しようとした。だが木に登ろうとして落ちてしまった。世に「岩下源氏」というようなものがあるとすれば、その世界は「すき人」の執念、「釈秋翠艶笑院源氏亭」という戒名めいたものにつながっていく、危険をはらんだ破滅的世界と隣り合わせになっている危ない代物なのだろう、と思う。首を縮め、肩を窄めて生きている。その割りには、蛙のつらに水をかけたように、厚かましく、大きい面(つら)をしている。たいした面魂だなんて悪く言う方もおられる。

II

杉本苑子氏の『散華　紫式部の生涯』(上・(下)が、中公文庫に入って読み易くなった。「あとがき」に、

摂関体制下の閉塞状況を、受領層の娘として、妻として、また『源氏物語』の書き手として、紫式部がどう見、どう感じ、どう生きたか、その「生」の軌跡を追ってみたいとは、以前から私が胸中に抱いていた願望だった。(下486頁)

と書いている。だがそれは、「雅な遊びや恋に明けくれる人々」ではなく、「われわれと同じ生理を持ち、喜怒哀楽、同じ感情に支配されつつ、おのおのの運命を闘いぬいた」「本質的には現代人と変わらぬ生き身の人間として、登場人物

を描く」ことだと言われる。

磯貝勝太郎氏は、「解説」の最後で、

特に印象に残ることは、『源氏物語』を書き終えて、憂き世に永らえる憂き身の実感を深めつつある紫式部が、死を恐れないで、むしろ本来の無に還りたいという思いを強めてゆくくだりの描写だ。この紫式部のある種の虚無感は、杉本苑子自身の生得的な虚無感にほかならないのである。杉本は歴史小説とは、歴史上の人物と現代に生きる書き手との間に、火花の散るような接点があって初めて成立するものだ、という小説観を持つ歴史作家だ。『散華　紫式部の生涯』は作者の小説観が最も顕著にあらわれている長編歴史小説の傑作である。（下　498頁）

と、指摘する。『源氏』を書き終えて、憂き世に永らえる憂き身を見つめ、死を恐れず、無に還りたいという思いにかられていく。そうした、ある種の虚無感は、杉本苑子自身の生得的な虚無感だという。

「作物」を創るという営みは、孤独な自我に問いかけ語り続けることだと思う。『万葉』の歌人人麿が、

もののふの　八十宇治川の　網代木に　いさよふ波の　行くへ知らずも（巻　第三　二六四）

近江の海　夕波千鳥　汝が鳴けば　心もしのに　古思ほゆ（同　二六六）（小学館『新編　全集』本）

と詠んだ歌の世界には、古代伝承のなかに深く息づきながら、歴史的現実を見つめる詠嘆が秘められている。おそらく若き人麿は、天武方の舎人として壬申の乱に加わったのであろう。天智の大津宮が戦乱にまきこまれ衰退、滅亡していく現実を凝視し、無常の思い、憂き世の思いに述懐の念、たえ難いものがあったのではないか。「古」の頭註に「ここは近江朝時代を懐かしんでいう」（巻第一　180頁）とあるが「夕波千鳥汝が鳴けば」という呼びかけの中には、「懐かし」む心というより、歴史的現実を痛切にいとおしみ、かなしむ孤独な人麿の自我が、重く、深く息づき、詠嘆されているように思えてならない。それは、やはりある種の虚無感であり、無常の想念を秘めているように思われる。二六四番歌

で、「いさよふ波の　行くへ知らずも」という時、そこにはもはや虚無を超えて無限に広がる空間と時間の想念の世界がある。それは、仏教的無常観とか、あるいはきわめてそれに近い無常感のようなものであると思う。長明が『方丈記』の冒頭を書く時、人麿の歌は、仏教的な無常観を詠出したものと捉えられていたに違いない。一見、高い格調のなかに消失してしまっているかのように見える人麿の孤独と無常とは、人麿の歌の正面に、もっとはっきりと据えなおしてみなければならないものだと思う。

瀬戸内寂聴氏（『源氏物語』　古典の旅　④　講談社一九九〇年二月二〇日）は、「宇治川」について次のように書いている。

私も夏のある夕べ、鵜飼見物の屋形船を借りきり、宇治川を渡って見た。川面は涼しく、その日も月明の夜で、鵜飼舟のかがり火の炎が川面に映り、水音だけしか聞こえず別世界にいるようであった。中の島のあたりも漕ぎ、宇治上神社の下あたりに舟をつけてもらった。

紫式部もおそらく夫の宣孝か道長につれられて、宇治に泊り、川に舟遊びをした経験があったのではないだろうか。宇治十帖の中でも「浮舟」の巻が圧巻である。二人の男に愛されはじめてから、苦悩が浮舟を女として心身共に成熟させていく過程と、愛に於ける精神と肉体の乖離が実に鮮やかに描かれている。近代小説を読むような心理描写が精細に活写されていて息もつがせぬ面白さがある。（237頁）

「八瀬」のなかで、「物語」の結末を、

未完のような気さえする唐突な終りようは、現代小説の終り方では珍しくない。人生のすべては未来は不可知なものだし、現実の生活も人間の思惑では計り知れない未知の予兆をはらんでいるものだ。

紫式部は浮舟の運命の未来を読者の一人一人の胸に問いかけて擱筆したのではないだろうか。

すばらしい終り方だと私は思う。（242頁）

と書いている。紫式部は、「宇治川」の流水の中に、その「網代木」の荒涼とした寂しい描写の中に、人麿の歌の世界を借景に用いていたのではないだろうか。二人の――万葉の歌人と物語作者とに、共通する造語能力のすばらしさ、紫式部は人麿の歌の世界を深く読み解いていたように思う。源順らによる万葉集の古点研究に次いで、時代を画する万葉古点の研究が、他ならぬ道長の時代になされていたことの意味は、やはりもっと正面に据えなおして考えてみなければならないことのように思う。

虚無と無常の想念は、また「つれづれ」の世界と深く関わる。このことについては既に別に論述した。（『四、「つれづれ」の語をめぐる論』『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院）所収（177頁～186頁））浮舟の巻に、

つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて（小学館『全集』153頁）

とある歌について、次のように述べた。

浮舟の巻の「つれづれと」の歌は『伊勢』と『大和』の、二つの異なる類型的発想を融合し、浮舟の死への思いを暗示させ、あい寄ることのできない孤独な魂のさすらいを、逆説的に詠いあげていったのである。そういう意味では、やはり浮舟の巻の「つれづれと」の歌の造形は、実にみごとであるといわざるを得ない。「つれづれ」の語のもつ和歌が、このような深い意味をその中に秘めてきたのは、それが文学作品や芸術作品の創造や享受の場と深く関わる意識を持っていたからである。（185頁）

杉本氏は、『散華』で、「宇治十帖」の執筆について、次のように書いている。

『源氏物語』にしても、読み手は各自、身に引きつけて味わう。自分の経験、自分の思いを重ね合せながら涙し、怒り、笑う。それはすでに、小市の――紫式部の『源氏物語』ではなく、その読み手自身の『源氏物語』なのであ

る。

「おもしろさとは何か？」

この問いかけの答えも、ここに至ればおのずから、引き出されてくる。数知れぬ読者の、主観や個性に合せ、その側におりて行って多様な注文に応じきることなど、しょせん一人の書き手にできることではない。することでもない。

では、どうすればよいか。答えはただ一つ、作者は自分のためにのみ書き、自分の好みにのみ、合せるほかないのだ。すべての読者が、おもしろくないと横を向いてしまっても仕方がない。自分が「よし」と思うその気持ちに合せて書く以外に、拠りどころはない。それで読者が一人もいなくなったなら、これもまた、やむをえぬ。もともと自分が、自分の生き身の証を求めて、自分に課した「書く」という孤独な作業に、賞讃なり誹謗なり、他の声を期待するのがまちがいなのだ。自分の内面とだけ向かい合って、生みの苦しみに喘ぐ作者の姿勢に、もし、共感する人がいたら、その人は黙ってついて来てくれるだろうと、小市は思う。たとえ一人でも二人でもいい。そういう読者の無言の励ましを支えにしつつ書きぬくほかないと決意して、『宇治十帖』の執筆にとりかかったのである。（下　417頁）

自分からの生命の根元、その内奥を燃焼させ、身を焼く炎を消そうとしない、その中から生まれてくる文学は、いわば作家魂の激しい、厳しい禊を通して、その誇り高い生き方の中から創り出されてくる。そこには、不幸と誇り高い幸福とを同時にないまぜ、潮騒のように磯をとどろかせてもいる。「何者もそれは犯せない。権力さえも……。」（下　477頁）

文学作品は、読み手が各自の身に引きつけて味わう。自分の体験、自分の思いを重ね合せながら享受する。――涙し、怒り、笑うのだ。外在的に自分の人生の経験の中でよんでいく。しかし、また、作家の心の中に生き続けている創作意識や意図を内在的に読み取ってもいかなければならない。『源氏』と古（昔）物語とを区別するもの、それは「草

子地」の存在である。うつくしい、またある時は鋭い針をもった物語の「ことば」を、重ねながら読む、その重ねのうつくしさの中に、物語が見えてくる。作者が語りかけ、語り尽くそうとする「草子地」を読み解きながら、自らの『源氏』を読んでいかなければならない。物語を「読む」という営みの中に、今日の自分より明日の自分の生き方がどうあればよいのかを考え、自らを創造し、自分の人生を育んでいく。それが、「自分が自分の生き身の証を求めて、自分に課した「書く」という孤独な作業」によって、紡ぎ出された『源氏』を、読むということになるのだと思う。

『源氏』には、桐壺、朱雀、冷泉、今上の四帝。光源氏と匂宮、薫君という一門七十余年に亘る物語が語られている。だが、広がりをもつ作品というより、三重に深く重ねられている物語である。『源氏』は三部から構成されていると見るのが、その主題を考える上で最も適切である。漱石の『明暗』も、一週間そこそこの事件を重ねながら掘り下げていく。

杉本氏は、第二部の物語について、次のように書いている。

前半が源氏の栄光の軌跡とすれば、後半はその凋落の物語である。主人公、副主人公らの老いと死を扱っている以上、全体に悲愁の調子をおびるのは当然かもしれないが、けっしてそれだけではなかった。作品を紡ぎ出すという営為……。それへの小市の、気構えと姿勢が、根底から変わったために、物語の色調も変ったのだ。ひと口にいえば衣裳の絢爛さからその下にひそむ生き身の実態へ、人間の心理の奥底へと、筆が掘り下がられていった結果、必然的に生じた変化といってよい。(下　403頁)

第二部は、若菜上の巻から幻の巻までの七帖、三十九歳から五十二歳までの十三年間、結末の読み方によっては少し年立を加算することができるように書いている。この年立は、桐壺の巻に対偶する。光源氏誕生から十三歳までの十三年間、結末の読み方によっては、やはり少し年立を加算することができるように書いている。このように桐壺の巻と第

二部の物語とが、年立の上で対偶的な構造をもっていることは、無意識的、機械的に偶然一致したのだとは考えにくいということである。第二部の物語は、桐壺の巻の年立を意識のなかに置いて書かれた。作品を紡ぎ出すという営みに対する作者の気構えと姿勢とが根底から変り、物語の色調も変った。生き身の実体へ、人間の心理の奥底へと、筆が掘りさげられていった。そういう第二部の主題と深く関わる対偶、対応なのであった。さらに杉本氏は、『源氏』の結末を次のように書いている。

「誠実、かならずしも報われず、愛情、かならずしも心の渇きを癒さぬ」

とする暗い主題が、暗いなりに全編を貫いている。それは雨じめりの夜空を截って流れている一筋の銀河に似て、淡く、幽かでいながら、見上げる目を捉えて離さぬ微細な光体の帯とも、読み手には受けとれた。

作品の舞台も都から、寂しい宇治の山里に移る。主人公の薫は、女三宮が柏木との過失によって生み落としたあの、罪の子である。その宿業の重みは、薫に強い厭世観を抱かせ、彼を内向的な、考えぶかい若者に生い立たせた。

薫の心を占めるのは、欣求浄土、厭離穢土の思想だが、その思索をさらに深めるべく彼が通ったのは、京を逐われ、宇治の山荘に隠栖して、半僧反俗のわびしい生活を送る八宮の住居であった。

この老皇族の長女大君に、いつとはなく薫は恋し、誠心誠意、彼女を求めつづけるけれども、大君は応じない。薫を嫌っているのではなく、愛しているがゆえに、年若な妹の中君にこの恋を譲って、妹を仕合せにしてやりたいと大君は望む。彼女もまた、どちらかといえば現世での快楽よりも、仏国での心の平安を願う気質のもちぬしだったのである。

薫は悩む。大君の気持ちを自分に向けさせるべく腐心し、友人であり仮の父光源氏の孫である匂宮を、それとなく中君に近付けるが、この工作はかえって逆効果を招き、大君の態度を硬化させてしまう。彼女は匂宮の情の薄さを見

ぬき、中君の行く末を危惧したまま病に冒されて世を去った。

深刻な悔いに、薫はさいなまれる。匂宮の浮気に苦しめられながら不安な日々を送る中君に、せめて亡き大君の面影を見いだし、寂寥をまぎらすうちに、同情は恋に変る。

中君も薫を慕っている。でも、満たされぬ結婚ではあっても今は匂宮という夫を持つ身だ。薫の一途な恋情を躱そうとして、中君は異母妹の浮舟という娘を彼に引き合せる。

匂宮がこのことを知り、薫に擬態して一夜、浮舟の私室へ忍びこむ。薫を愛しながら、匂宮の魅力にも妖しく惹かれる自分を、浮舟は持て余す。浅ましさ、苦しさに絶え切れず、彼女は家をさまよい出る。

投身しようと近づいた宇治川べりで、傷心の浮舟を救ったのは、通り合せた横川僧都の母親だった。浮舟は僧都の庵室にともなわれ、心身の恢復を待って髪をおろす。（下　410頁）

瀬戸内寂聴氏は、『女人源氏物語（五）』（小学館　一九八九年八月一〇日）の結末を次のように書いている。

薫君さまのお手紙に対してどうしても、一言のお返事ができなかったのはなぜなのか、わたくしにはわかりません。けれども心が少しでも落ちついた今になって想い返せば、お返事をしないよう、何かがわたくしを制してくれたのではないでしょうか。そのほうがよかったのか、悪かったのか、わたくしにはわかりません。

けれども、すべてをみ仏にゆだねた今のわたくしは、自分の心に正直に従うことが、み仏の心に従っていると思われるのです。もしかしたら、あれもひとつの浮橋だったのではないでしょうか。男と女の間の恋もはかない浮橋なら、み仏に近づく橋も危うい浮橋で、油断したらいつふり落とされるかわからない細い橋なのかもしれません。

長い長い今日の一日も過ぎていきました。終日興奮していた尼たちも、いつもより疲れたのか、ようやく寝静まっております。奥の部屋から、老尼のいびきが聞き苦しいふいごのうなるようにもれています。

小君のむなしい報告を受けてあの方はどんなお顔をなさったことやら。案外、量見のせまい所もあるお方なので、妙に気を廻して、こうまでかたくななのは、わたくしにかくし男でもあって、こっそりかくされているのではないかぐらいの想像をしていらっしゃらないともかぎりません。

あの方もこの方も、誰もすべてはみな、川の向こうの世界に住むはるかな昔の夢の中の人たちにすぎません。

これまで見えていたものが少しずつ見えなくなっていくにつれ、これまで見えなかったものが、ほのかにほのかに見えてくるような気もしてまいります。次第に光を増すはるかな夜空の星のように。（279頁）

この二人の作家の作品は、「歴史小説」と「女人源氏」という異なる方法からの『源氏』へのアプローチである。瀬戸内氏は、巻末の「寂庵対談」で丸谷才一氏と対談される。宇治十帖は、紫式部が出家して相当晩年になって書いたことを指摘されている。「出家する場面の描写が、浮舟のところだけリアリティがあるんです。髪を切るところが。」（296頁）と、自分の経験から、実感としてわかる、紫式部も自分の剃髪の経験によるのだ、と言われる。小説は「俗」で、「末期の眼」になったら書くことがなくなってしまう。紫式部はたいへんな不良だともいう。道長から傷つけられたが、得るものも多かった。わたくしが傍線をつけた部分を読んでいくと、出家した浮舟が仏門に入って救済された、幸せなんだ、という瀬戸内氏の考えがよく出ている。秋山虔氏は、女三宮や浮舟の出家に、自立的・主体的な自覚による生き方の確立を見ようとされた。「女人源氏」の世界は、浮舟の出家を、救済、幸福という視座に立って見ようとしているのである。発表年代を辿っていくと、杉本氏の「歴史小説」は、「女人源氏」を意識において執筆したことになろうか。あるいはこの二つの作品は無関係であったのかも知れないが、やはり対峙する世界が描かれていることが注意される。杉本氏は、薫を愛しながら、匂宮の魅力にも妖しく惹かれる浮舟を描く。浮舟は自分を持て余し、浅ましさ、苦しさに耐え切れず、家をさまよい出る。傷心の浮舟は救われたのだろうか。やはり書いていないように思う。『伊勢』狩使本

の成立を道長の所為に帰すあたりは創作として面白く、見事である。そして、彰子大后と道長との対立、反道長派の領袖といわれる実資との関係、紫式部がそれに果たした役割、道長による事実上の解雇、それが「たった一度だが書庫の暗がりで、愉悦の時間を共有した過去」（下　470頁）と深く関わっていく女人の執念。出家することもなく、清水寺で伊勢大輔と邂逅する。結核とおぼしき多量の喀血で、やがて、周防、賢子、定暹の三人に見看られながら、静かに、ひっそりとした終焉を迎える。爲時の末路もわからぬ最後、うす紅の、煙のようなその花は、さかりを過ぎたのか、風もないのに道に散り敷く。消えてゆく人にふさわしい「散華」であった。二人の作家の描く『源氏』の世界、紫式部像の相違、それらは対峙する異なる世界を描いている。『源氏』のなかに何を読みとろうとするのか、そういう謎をつねに問いかけているのは「作家」であり、読者なのであった。『源氏』の読みは「解釈」にはじまり、「解釈」に終る。俵万智氏（小学館『新編　全集』出版案内）の指摘されるような、スタートラインの一線に並んだ現代語訳などは、いずれの「解釈」にも入らぬ一つの目安に過ぎない。

二、『源氏物語』をどう読むか ――物語の「しくみ」を読む――

I

吉田賢抗氏（新釈漢文大系38『史記　一　（本紀）』明治書院　昭48年2月25日）は、『史記』の「三皇本紀」と「孝武本紀」を除いた「本紀十一編」は、司馬遷の筆に成るといわれる。それは黄帝から漢の武帝に至る古代中国の編年史である。「三十世家」は、「本紀」に書かれた帝王をとり巻く王侯の家の歴史。「七十列伝」は「本紀」と「世家」に関わり、栄枯盛衰の世相を織りなして活躍した臣下の事跡を並べて書いたもの。司馬遷は、「紀伝体」という新しいスタイルの歴史書を創始した。

定子や彰子の主上であった一条天皇は、『史記』を愛読されていた。清少納言が『枕』を書いた料紙は中宮からいただいたもの。『史記』（しき）に対して「枕にこそ侍らめ」の応答を褒められてのことであった。紫式部の出仕後の『源氏』の料紙も、やはり道長から出ていると見てよい。料紙は貴重で、なかなか手に入らなかった。小学館の『日本国語大辞典』で「たとうがみ」の項の前半を引く。

①檀紙、鳥の子紙などの紙を二つに折りさらに上下から三つに折ったもの。懐中して鼻紙また歌の詠草にも用いる。ふところがみ。懐紙。

この後に、宇津保、源氏、平家、以下の作品を出典としてあげている。『源氏』須磨の巻に「鼻を忍びやかにかみわたす」（小学館『全集』191頁）ということばがある。現代語訳は、「鼻をそっとかんでいる」とする。この部分は、諸注

皆そういうことになっている。貴重な紙を鼻紙や落し紙などに使うはずがない。ここは「すすり泣いている」と現代語訳しなければならないところ。同じ語形で言い換えてはいけない。古語にはこういう語彙がある。鼻は「ひる」もの、「すするもの」で、紙などで「かむ」ものではなかった。芥川の小説に『好色』という、本院の侍従と平中との物語がある。平中のたくらみをよんでいた女は、桶洗童に持たせた御虎子に、えも言えぬ清水をはって香木さえ浮かばせていた。女の欠けたところを見て恋心を捨てようとした平中は、かえって悩殺された。あの香木は、ほかならぬ古代の落し紙に代る代物だったとしたら、どうだろう。昭和二十年代の後半、わたしは木曽の蘭小学校に教員をしていた姉の所に、木炭車に乗ってお米を届けに行った。そこでは、未使用と使用ずみの檜の篦を別々のびくに入れて使い分けていた。芥川は、なかなかの洒落をきかせてユーモラスにアイロニカルに書いた。紙は貴重な代物であった。この時代には、辞典類にあるようなそういう使われ方はしなかったはずだ。

さて、一条朝は醍醐朝などと同じように聖代とも見られていた。漢才(からざえ)が重んじられた時代でもあった。清少納言は、『枕』第八六段「頭中将のそぞろなるそらごと」(小学館『全集』172頁)で、男性貴族と『白氏文集』をめぐる応酬で「草の庵」と言われるようになった仕儀を語っている。この話には少し尾鰭がつく。

翌朝、自分の局に下っていると、源中将の声で、「草の庵やある。草の庵やある」と、「おどろおどろしう」たずねる。清少納言は、「などてか、さ人げなきものはあらむ。『玉のうてな』もとめたまはましかば、いらへ聞こへまし」と答える。「草の庵」なんて「いとわろき名の、末まであらむこそくちをしかるべけれ」と言うのだが、殿上の男性貴族が、この句を扇に書いて持っている、絶賛していることを、帝が定子に語り、定子が話してくださった。「あさましう、何の言はせたる事にかとおぼえしか。」(小学館『全集』175頁)という顛末だった。「玉の台」だったらいい、「草の庵」では「いとわろき名」だという。この部分は、「粗末で劣った名前」(『全集』173頁)「あまりの騒ぎに清少納言が驚い

ている」（新潮『集成』上　167頁）「「草の庵」なんていやな名が。ただし悪い気はしなかったであろう。」（岩波『新大系』92頁）などとなっている。三巻本「何のいはせけるにかと」、能因本「何のいはせたる事にかと」となっていて、「何者が私にあの句を思いつかせたのかしらと」、「何がそんなふうに吹聴させている事なのだろうかと」と、解釈が分かれてくる。

『紫式部日記』には、次のように見えている。

うちのうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたまふべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つつみはべるものを、さるところにて才さかしいではべらむよ。（『全集』144頁）

一条天皇は、『源氏』は『日本紀』をよく読んでいる人が書いたもの、「才」ある人だと褒めている。紫式部をあまりよく思わなかった女房が、「才がる」人だと言いふらして「日本紀の局」と陰口を言った。清少納言は、「いとわろき名の、末まであらむこそくちをしかるべけれ」と言い、紫式部は「いとをかしくぞはべる」と言う。このことばの裏には、『日本紀』が「玉の台」に相当するという、皮肉で逆説的な論理が「とげ」として隠されていたのではないか。『枕』と『日記』との表現が、条件設定や場面構成の面で非常によく似ていて、あまりにも対偶的であることに注意していく必要がある。頭中将と左衛門の内侍が、ともに『白氏文集』と『日本紀』、それに対する当事者の想念、ともに尾鰭がついていく結末、やはり紫式部は「草の庵」を意識に置いて「日本紀の局」を捉えていた。螢の巻の物語論で、

骨なくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にある事を記しおきけるなり。日本紀などはただかたそばぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ。（『全集』204頁）

と論評する。萩谷朴氏（『紫式部日記全注釈』下巻　角川書店　昭58年10月10日　八版）は、「日本紀などはただかたそばぞかし」というこの揚言は、「むしろ左衛門内侍の蔭口に対する反駁」（298頁）だとされる。『日記』には、この後に惟規より漢籍を理解することが早かったこと、『白氏文集』の「楽府」（巻三・四）を彰子に講じたことなどのエピソードが続いて語られる。漢詩文、漢学に対する学識の深さ、自負が語られている。そして、最後に、

まことにかう読ませたまひなどすること、はた、かのものいひの内侍は、え聞かざるべし、知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中ことわざしげく憂きものにはべりけり。（『全集』246頁）

とある。「憂きもの」とは言いながら、彰子もまた、漢詩文、漢学については同罪だと言わんばかりの居直りと強さを見せてもいる。物語は、『日本紀』のように事実を記しとどめた史書を越えて、人間の生きる攝理と真実とが描かれているのだという。虚構によるリアリティの表現の論理が、既に明確に示されているのである。「陰口に対する反駁」を含みながらも、それにとどまらない、むしろもっと高い次元を止揚する発言であることに注意していく必要がある。

『日本紀』とは何を指していたか。藤井高尚の「日本紀の御局考」以前の古注などには、『日本書紀』のことだと解している。例えば『河海抄』（玉上琢弥編『紫明抄　河海抄』角川書店）には、「日本紀卅巻　舎人親王撰」（408頁）などと見え、『花鳥余情』なども同じ。高尚の説は物語中の帝の準拠にもとづく推論で、あまり正鵠を射たものとは言えない。岩橋小弥太博士は「紫式部の史学思想」（「国史学」創立五十周年記念特集号　昭・三十五年三月）のなかで、藤原範兼の『和歌童蒙抄』の「委見『日本紀』」とあるのは、『続日本紀』天平十九年五月の条の記事を指すこと、顕昭の『古今集註』巻二十に「日本紀二八」とあるのを『続日本紀』に照合して引証していること『叡岳要記　上巻』「大鏡裏書」などが『続日本紀』『続日本後記』などを『日本紀』と言っていることを指摘される。そして、

源氏物語にいう日本紀もまたひろく歴史の書物という程の意味に解してよろしかろうと存じます。或は其の頃の歴

史の書物はまだ国史だけしか出来ていませんから、高尚のいうように六国史を斥したものかも知れません。（7頁）と指摘されている。だいたいこういう説が、『日本紀』についての定説になっている。ただ、新潮『古典集成』の頭注、岩波『広辞苑』第三版までの注記だけは、いわゆる狭義の『日本紀』に解している。『広辞苑』も、一九九一年一一月一五日刊『第四版』では「通説」を広義の「日本紀」の意味として採択した。しかし、こういう解釈には、にわかに従い難いように思う。

II

前田惟義氏編『紫式部日記古注集成』（桜楓社　平成三年五月二五日）754頁に、おおよそ、次のような記述が見える。秋山虔氏が、竹内美智子氏の「和語の性格と特色」（『講座、日本語の語彙』2　昭・57）について述べられたもので「学士会報」（昭59・7）の「紫式部についてのノートから」を「補説」としてあげたものである。

竹内氏は、『源氏物語』に用いられる動詞の様態、性格を克明に調査し、かつ、この物語の特別の用語であるおびただしい数の複合動詞（動詞＋動詞に限る）に注目されたのである。それは「接頭語的動詞＋実質動詞」あるいは「実質動詞＋補助動詞」という形式をとるのが普通だが、このような性質の複合動詞はほとんどすべて『日本書紀』の和訓語なのであった。竹内氏によれば「ということは、漢語、漢文を背景としての和語という特殊な状況のもとに作られた語であると考えざるをえない」ということになるが、この判断は大いに私の関心をそそるのである。「あがめかしづく」〈崇傳〉「あだえかくす」〈戯隠〉「あつかひおこなふ」〈扱行〉「あはせいとなむ」〈合営〉「あらがひかくす」〈争隠〉「あらためかはる」〈改変〉等、このような『源氏物語』独特の用語である複合動詞は、まさに漢文の読

みによって培われた紫式部の造語能力にもとづくものであった。一条天皇が「この人は日本紀をこそ……」といわれたのは、『源氏』の音読を耳にして、この日常には用いられることのない異様なことばが立ちまじることに、感銘を受けたからではなかったのだろうか。一条天皇は、醍醐、村上の両帝に比すべき好学の帝とされる。その御集は残念ながら今に伝わらないけれども『本朝麗藻』の詩人として時代の文運を隆盛に導いた指導者であった。『日本紀』や漢籍の類になじみ深い天皇は、音読される『源氏物語』の独特のしたたかなことばの響きに触発されて、その世界に引き寄せられていったのではなかったろうか、などという私の空想は独断に過ぎるであろうか。竹内氏は「漢文の素養を露わに表に出した枕草子の作者の語彙に、この種の複合動詞があまり含まれていないのは、皮肉な現象といえる」と付言しておられる。

秋山氏は、『源氏』独特の用語である複合動詞は、「漢文の読みによって培われた紫式部の造語能力にもとづくもの」で、一条天皇が、「この人は日本紀をこそ……」といわれたのは、「この日常には用いられることのない異様なことばが立ちまじることに、感銘を受けたからではなかった」だろうかと指摘される。竹内氏によれば、漢文の素養を露わに表に出した『枕』の清少納言の語彙には、この種の複合動詞はあまり含まれていない、皮肉な現象だといわれる。わたしは、玉鬘系物語後記挿入説にからんで、帚木、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋の巻について、その巻にのみ用いられている特殊な用語、その巻の他玉鬘の巻とその並、匂宮の巻とその並、宇治十帖のいずれかに用いられている特殊な用語に類別して、形容詞、形容動詞、名詞、動詞について調査したことがある。(『源氏物語とその周辺』 伊那毎日新聞社 昭54・12・21 86頁～88頁) それは、漢語を用いた形容詞を中心に、名詞、動詞に亘っての特殊な語彙であるが、男性側の用語に関わる位相性をもつ用語という論点から再検討を加える必要がある。竹内氏やそれによられた秋山氏の論も、わたしの論点と関わる問題もあるように思われるが、やはり注意しなければならない指摘である。特殊な語彙が、

『日本書紀』を出典とするものであり、『日本書紀』の和訓語であり、漢文の読みによって培われた紫式部の造語能力にもとづくものであったという点に注意していくと、『源氏』や『日記』の『日本紀』を六国史や史伝の類に拡大解釈してきた従来の定説の是非が問われなければならないのではないか。確かに、『日本書紀』という書名には、指摘されてきたように問題がある。しかし、六国史の書名を並べていくと、『日本書紀』は『日本紀』でなければならないはずだ。こういう問題にからんで、広義の『日本紀』の意味が、すりかえられてしまったように思う。螢の巻の「神代より」の語は、藤井高尚以来、考察の埒外に置かれてしまったが、六国史の最初の作品というだけでなく、やはり、もっと中心に置いて考えなければならない問題だと思う。古注が、『日本書紀』と注記してきたのは、誤りではなかったと考えざるを得ないのである。

『万葉』の歌人人麿の造語と、紫式部の造語との問題を、天才的能力を持つ二人の、関わりのない次元の問題として、従来のわたしは捉えてきた。道長時代と『万葉』訓点の研究、「宇治」をつなげていくと、紫式部は、人麿を意識の中に置いていた。平安貴族の別荘が営まれた土地であったというだけではなく、そういう伝承や現実の中から『源氏』が紡ぎ出されてきた、というわたしの論点が、何か説得力を持つもののように浮上してくるという論述は、行き過ぎた臆測に過ぎないだろうか。瀬戸内寂聴氏（『歩く源氏物語』講談社　1994年9月29日）は、「全く小説家的無責任な空想を許されたら、晩年彼女は出家して、死ぬまで宇治で隠棲したとは考えられないだろうか」（192頁）とされる。浮舟の出家得度の反照の世界を、そこに見ようとされるのである。さすがに、橋姫の巻に「網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて」などとあるのを引かれるのに、人麿の「近江の湖夕浪千鳥汝が鳴けば」「もののふのやそ宇治川の網代木に」など、一連の『万葉』の歌を重ねて読もうとはされていない。だが、道長の荘園が宇治川の対岸一帯のほとんどを占め、初瀬や観音詣での旅の都度、宇治に宿ったと想像されたり、道長や宣孝に伴われた旅があったろうと想像され

たりしている。『万葉』の歌枕、人麿の造語と『源氏』の宇治川、網代、紫式部の造語とを結びつけていくわたしは、もっと無責任で愚かな空想をしているのかも知れない。だが、歌枕への思いを秘めた歌人紫式部の意識が、歌枕をぬって展開する旅のなかにはたらいていたと考えた方が、自然なのかも知れないとさえ考えている。ともかく、秋山氏が指摘されるように、一条天皇は、醍醐・村上の両朝に比すべき好学の帝とされる、聖代意識の中に捉えられてきた王朝であった。しかし、神武・天武帝を正系とするのが『記紀』であり『紀』が『史記』に対するものとして成書化されたものであったことは事実である。平安王朝の祖は壬申の乱に敗北した天智系であった。王朝文学の総集としての「百人一首」は、天智帝の歌を巻頭に捉えていることなどを考慮しても、なお、『日本書紀』が『史記』に対偶し、対応する史書として、紫式部の史眠に深く関わるものであったことも動かし難い。『源氏』『日記』の『日本紀』は、やはり『日本書紀』そのものであったと解さねばならぬ。日本の『史記』が、他ならぬ『日本書紀』すなわち『日本紀』だったのである。

紫式部は、一条朝におけるそういう文化的状況を肌身を通して熟知していたに違いない。『枕』の跋文で、一条帝が『史記』を書写され愛読されているのを中宮から聞いた清少納言が、「枕にこそは侍らめ」と答えて、『枕』の料紙をいただいた、というような視点とは桁外れの高い次元で、紫式部はそれを受けとめていたに違いない。それは何であったか。ほかならぬ『史記』の「本紀」と「列伝」とを骨格にして『源氏』をつくるのであった。『日本紀』などは「ただかたそばぞかし」として、虚構を通してリアリティを表現する物語文学を紡ぎ出そうとすることであったのではないか。それは、『史記』を借景に一方では、人麿の方法を意識して『日本書紀』を訓み直す営みでもあった。それは、紫式部の造語能力と深く関わる営みでもあった。

『源氏』の成立過程をめぐる論議のなかで、はなやかに問題となった注釈書の類に注記されている「並の巻」につい

ては、現在ではほとんどかえり見られなくなってしまっている。いまさら「並の巻」論でもあるまいと思う方も多いとは思うが、私は大真面目で、この問題に再検討を加えたいのである。並の巻について『源氏物語とその周辺』（伊那毎日新聞社　昭・54・12・21）で、わたしは次のように述べたことがある。

並巻が、一纒めに発表されたもの、或は発表されたと伝えられていたものであるとか、後から挿入並置されたものであるとかいう考えは、玉上（「源氏物語成立攷」『源氏物語構造論』所収）、風巻（「源氏物語の成立に関する試論」国語国文20巻4号）、武田（『源氏物語の研究』岩波書店）氏らによって指摘され、成立事情にかかわるものと考えられてきた。これに対して、岡博士は、並巻が創作当時から存在したものではなく、院政期にはじまるものと推測され、「構想論上から出て、傍系の巻々を本系の巻に摂することだが、本系の筋が発展し、主筋と副筋とにわかれ、副筋が主筋を圧すると、その部分だけは副筋の巻が却って本巻となり主筋の巻として摂することもある」（『源氏物語の基礎的研究』東京堂　558頁）とされ、帖数の多いこの物語を、制本の便宜から合冊した際に、構想論上の考慮から、併せたものと考えられている。並巻の存在を証する古い文献は『源氏釈』『白造紙』であるが、これらは、いずれもその伝来に問題がある。『源氏釈』の原本は、池田博士の指摘されるように、現存する前田家本、書陵部本のいずれよりも「内容の豊富なものであったと考へられる。またその形態も、現在見るやうに一帖の冊子本ではなく、源氏物語各巻の本文に頭註、あるひは附箋として施されてゐた註記であった」（『大成』研究資料篇　42頁）と考えられる。そして、現存諸本の書写が、いずれも鎌倉時代を遡るものではないことは、伊行の時代に既に並巻の数え方が確立していたのかをも疑わしめるものである。けれども、定家の『奥入』が、伊行の註に定家が自注を書き加えたものであり、並巻についての考証がなされていることを考えれば、伊行の時代には、既に確立していたものと推定される。『源氏釈』は、最古の注釈的研究として重要な意味をもつものであるが、『白造紙』の「源シモクロク」も平安末期から鎌

倉初期の源氏物語の形態を伝える重要な資料である。これについては、橋本進吉博士の紹介と解説がある。(「簾中鈔の一異本白造紙について」「国語と国文学」昭和6年5月号)それによれば『白造紙』の資料的価値は、雲隠巻が存在すること、並巻の存在を認めていること、宇治十帖を「ウチノミヤ」として別にし、それがない本もあること、桜人、狭席、単守を後人の作り加えたものとしていることなどがあげられる。「源シモクロク」は『白造紙』のみにあって流布本にはないので、『廉中鈔』の原本にはなく、後の増補によるものであるが、その時期は、遅くも鎌倉初期、多分建久を去ること遠からぬ時代、或は『白造紙』の原本が出来て、余り年月を経ない時期に増補されたものと推測されている。

「前田家本源氏釈」と「源シモクロク」との並巻についての註記の違いは『源氏釈』が椎本の並に総角をおくことで、帚木と若紫の並は同じ。澪標の並が蓬生、関屋、玉鬘の並が初音から槇柱までの九帖、横笛の並が鈴虫、匂宮の並が紅梅、竹河の諸巻であることは、その記述に多少の問題があるが、一致していて異同がない。「源シモクロク」で注意すべきは、玉鬘とその並九帖について、「委ク不和」として、「コレハ十七ノタンノクワクノヤウナリ」と註記していることである。武田祐吉博士のご教示によれば、「タン」は「段」の意で、並を摂して一段の物語と考えていたことを示すものとされた。この語の意味は、芸能の方面に見える「段」と深い関わりをもつものであったと考えられる。舞踊では、正式な伝統的な踊り、小唄に対する長篇音曲そのものを、謡曲では、その詞章の眠目となるところを、浄瑠璃では、一段の聴きどころとなっている面白い部分を、それぞれ「段物」とよんでいる。「クワク」について、武田博士は最初「画」の字を当てられたが、その後「拡」とすべきことを教示された。

「源シモクロク」の註記を、武田博士の説かれるところによって解すると「玉鬘巻を主要な中心として、それを拡張し、発展させたのが並巻の物語」であったことになるが、それが、構想論的な「クワク」であったのか、成立事情に

かかわる「クワク」であったのかは、にわかに断定できない。けれども、「源シモクロク」には、物語の構想的な発展を捉えようとする態度が強い。それは、宇治十帖を「ウシノミヤ」として独立させ、一つの纏った物語と考えているところに端的にあらわれている。『河海抄』には、宇治宮についての註記はないが、『無名草子』は「宇治のゆかり」としてやはり一纏りの物語としているし、『花鳥余情』も、橋姫巻を「橋姫宇治」としている。宇治十帖の物語は、玉鬘巻とその並十帖の物語と対応的に構成されたものではなかったか。岡博士は宇治十帖三部説に立たれ、橋姫から早蕨までの四帖、宿木から蜻蛉までの四帖、手習、夢浮橋の二帖に分けられ、「第二部の浮舟は、玉鬘的境遇から夕顔的悲劇に転じたが、第三部では空蟬的な境涯が示唆されてゐる。従って物語としても、「源氏物語」のいわゆる玉鬘系の巻々を溯上って、「帚木」の巻に達した」(『源氏物語の基礎的研究』543頁)と指摘されている。浮舟に、玉鬘、夕顔、空蟬の境涯の投影を暗示的に読みとられたのは、宇治十帖結末説にかかわるものであったとはいえ、卓見であった。そして、そのことは、玉鬘巻とその並十帖の主題をさらに深め、追求していったのが、宇治十帖第二部、第三部の主題であったことを示している。『更級日記』の作者が「物語にある光る源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はせ奉りて、浮舟の女君のやうに、山里に隠しすゑられて」(岩波大系 53頁)「殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まづ思ひ出らる」(同 523頁)と浮舟への憧れに生きながら、「光る源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」(同 493頁)と、願った少女時代の浪漫的な心情は、こうした物語の構成と主題を適切に読みとっていったものと考えられる。寺本直彦氏は、「源氏物語目録をめぐって」(「文学・語学」(五三年六月 第82号)で、拙論に触れられ「玉鬘のナラビの巻々は、十七の段、玉鬘に対して、他とくぎられてひとまとまりになっているようなものだ。ただしナラビについてはくわしいことは知らない」と解され、示唆にとむ論証を加えられている。

『河海抄』空蟬巻「并巻事」に、

うつほの物語云第三の並春日祭又第五ふきあけの巻の並祭の使菊宴などとてあり又浜松の物語といふものにも並一帖あり是等例なり凡此物語の並様一偏に同時の事とも見えす横竪ある歟同つつきの事を分てると見ゆる巻もあり是を竪の並といふへきにやいま空蟬巻これなり……うつほの物語のならひも横とみえたり浜松の並も唐と日本との事を同時にならへてかけり是も横也凡ならひの本意は義たるへきなり奥入も猶横の義を存する歟

とある。『紫明抄』巻第二空蟬の註記には、

問云並の巻先例ありや

答云うつほのとしかげといふ物語あり源順作云々

とある。これによれば、並巻には、同じ続きの物語を分けた竪の並、物語を同時に並べて書いた横の並があるが、並巻の本意は横の並にある。並巻の先例には『宇津保物語』があるとする。『宇津保物語』に並巻が存することを証する文献は、『河海抄』以下の源氏物語の註釈書であるが、『原中最秘抄』は、親行の原著をその孫行阿に至るまで代々増補したもの。『紫明抄』『原中最秘抄』が『宇津保物語』の並巻について、「先例」としていることをもって『源氏』以前に既に『宇津保』に並巻が存在していたことを証するものと考えることはできない。

『宇津保物語』の伝来については問題があり、その巻序についても種々の疑問が存するが『源氏物語』の注釈書によってその巻序を決定するがごときは、無謀な業というべきである。

並巻が、成立事情にかかわるものであるとしながら、偶然に発表されたものとか、伝説的に伝えられた成立事情を、後代の鑑賞者、研究者がつけたものとかいう、偶発的な理由によって説明されてきたのは、横笛の並鈴虫巻である。岡博士は、並巻を構想論的立場から考えられ、鈴虫巻は、本来主筋に属すべきだが、そうすると、若菜巻から発展し

てきた柏木の物語が、横笛巻で中断されるので、これを後者に合わせ、夕霧巻への接続を自然にするために、並巻が発生したとされる。鈴虫巻は、女三宮の持仏開眼供養と、鈴虫の宴を中心とする物語で、源氏と秋好中宮とが、世を厭い、出家のことを語りながら御息所の冥福を祈って法華八講を行う物語で終る。それは、柏木の物語と、そこから発展する落葉宮と夕霧の物語を主筋として、それに必然的にからんでくる雲井雁、薫、匂宮の物語を副筋とする若菜、柏木、横笛及び夕霧巻の物語とは構成的に同じではない。柏木巻で、女三宮に憑いた物怪は、六条御息所の死霊であった。御息所の霊を慰め、来世往生の願いをこめた供養をしなければならないが、物語の主題は、柏木、夕霧の物語へと発展し、その物語を挿入することができない。鈴虫巻は、女三宮の持仏開眼供養、鈴虫の宴から御八講の物語で終り、構成的に一つの纒りをもちながら、隣接諸巻の物語からはいささか遊離した位置に立つ。けれども、こうした物語の構成上の問題から並巻が考えられたとすれば、花散里をはじめ、多くの巻も並巻といわれなければならないものが存するはずである。『花鳥余情』鈴虫巻に、「以詞并歌為巻名源氏君五十歳横笛の次のとしなり竪の並也」とあり、『湖月抄』はこれをうけて「鈴虫竪並」とする。けれども、竪並とは「同つつきの事を分てると見ゆる並」であり、横笛と鈴虫巻との間には、帚木と空蟬巻の間に見られるごとき竪並の関係は存在しない。ところで、注意すべきは源氏物語年立の問題であり、成立論にからんで旧年立が批判訂正されてきた。しかし、その年立が、作者によって手控えられていたもの、そのものでなければ、如何に合理的に解釈され作られようと成立論の根拠とすることはできないはずである。定家には、年立の上から並巻を考勘したのではないかと推定される註記がある。『奥入』横笛巻に「柏木の後の事也」とあり、鈴虫巻に「横笛同年夏秋也」、夕霧巻に「今案比巻猶横笛鈴虫之同秋事歟」とある。定家の考勘によれば、横笛、鈴虫巻の年立は、帚木・空蟬巻との関係と同じであり、竪並と考えていたことが明らかである。これは、定家の説とも見られるが、構想論や、形態論が、著しく遅れていた註釈研究の段階では、付会の説であると

はにわかに断定できない。むしろ、並巻の発生は、こうした段階での構成論として出発していったものと臆測すべきではないか。『前田家本源氏釈』が、総角を椎本の並巻としているその伝来の過程と理由は明らかでない。これを異説とするか、誤伝とするかは問題であるが、並巻の巻序についても問題が存することは注意すべきであり、この二つの間には、相関関係が存在したものと推定される。山脇毅氏が指摘されるように、『墨水遺稿』が引く「安居院聖覚法印源氏供養諷誦文之記」と、それによる「源氏物語願文」、謡曲「源氏供養」及び『源氏小鏡』などには、関屋と蓬生巻、竹河と紅梅巻との巻序が、現在の巻序と入れかわっている。これらは、いずれも集成的性格の強い文献ではあるが、『河海抄』にも、行成本が、関屋巻を並一としていたことが註記されている。山脇氏は、主として年立関係を考慮して現在諸本の巻序によるべきことを指摘された。(「源氏物語匂宮、紅梅、竹河について」『源氏物語構想論』所収)けれども並巻や巻序に定着性がなく、巻名にも異説を生じていることは、『源氏物語』が、現存諸本の形態に定着する以前に、既に相当の整理が加えられてきたこと示すものである。巻名に異説を存することは、既に指摘したごとく、それが原作者によってのみ与えられたものではなく、後人の手によってもなされてきたことを証するものであろう。山岸徳平氏は、

既に出来ている本筋の巻々の間に、後から挿入する巻もあろう。本筋の巻に連続して書くこともあろう。逆に、側道の巻の後にでも、本筋の巻を補足することは可能であろう。とにかく、内容が本筋から多少とも側道にそれていった巻々を、並巻という。それは既に平安末期頃からか、もしくはそれ以前から存在したようである。恐らく、著者以外の人が、後に言い出した名称であろうと思う。(『源氏物語』岩波大系　13頁)

と指摘されている。並巻が、院政期まで遡り得ることは、岡博士も指摘されているが、『源氏釈』「源シモクロク」などによってもほぼ認められる。そして、その一部が、「著者以外の人が後に言い出した名称」であったとする推定も

事実に近いものと思われる。院政期は、一面では王朝文学の集成がなされた時代であり、説話文学や歴史物語の集成も行なわれたが、この時代は『源氏物語』初期の註釈研究が営まれた時代でもあった。物語のすべてに巻名が与えられ、整理と結集がなされたのは『更級日記』成立前後で、『栄花物語』以前であったろう。『栄花物語』はその巻名を『源氏』の影響によってつけたものであったが『更級日記』には、「源氏の五十余巻」「源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ」（『大系』492頁）などとあり、巻名を意識しない記述が見られる部分も存する。このことは、こうした推定の傍証となろう。今井卓爾氏は、『更級日記』の批評史的な意味について、

「源氏物語」が創作せられた当時は、「源氏物語」は存在の必要性なり可能性なりが現実的にあった物語で、従ってかういふ見方をも生ずるほどの迫力をもったものであったらう。然し、この時代には已にこの評者が経験した様な現実的破綻を余儀なくされる程、必然性又は可能性が欠けて来てゐたと思はれる。（『源氏物語批評史の研究』鮎沢書店　17頁）

と述べられているが、それは、『源氏物語』が女房階級によって音読されていた享受の形態を離れていった時代であり、既に「現実的破綻を余儀なくされる程、必然性又は可能性が欠けて来ていた」時代であった。『源氏物語』は、「はしる〳〵、わづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、木ちゃうの内にうち臥してひき出でつつ見る」（『大系』493頁）という享受の形態がとられた時、読者の手によって大がかりな整理が加えられていく必要があった。それは、『源氏物語』を統一ある一篇の長篇物語として読んでいくことでもあった。並巻は、初期の註釈的研究と前後して、こうした大がかりな結集、整理を経て、物語の構成にからんで発生したものであったろう。（118頁）〈引用に当って記号および一、二の語句を訂正した。〉

並の巻は、初期の註釈的研究と前後して、『源氏』の大がかりな結集、整理が行なわれた過程のなかで、物語の構成

にからんで発生したものと考えたのであった。しかし、初期の註釈的研究の段階で、既に存在する並巻について論述、説明を加えようとしているのであるから、これと同時であったとは考えにくい。そして、紫式部が直接関与したとは考えにくい点もまた存在する。だが、その発生が、かなり早い段階であったこともまた事実であった。わたしは、並巻の発生は『史記』の「本紀」と「列伝」との関係から、物語の構成、構造論的立場に立って編成されたものがその中心を成しているのではないかと考える。竪の並といわれるものが「本紀」であり、横の並といわれるものが「列伝」の叙述なのであった。『源氏』は『史記』『日本書紀』をその構成、構造の骨格として紡ぎ出されたものであったことを、読み解いた人々の所為であったのではないか。それは、あるいは、紫式部周辺の人々をも既に含んでいたのかもしれない。

三、『源氏物語』はどう読まれてきたか――「読み」のなかに求められてきたもの――

I

『源氏』は、日本の古典文学がそうであるように、やはり「型」の文学であるから、その「しくみ」を読み解いていかなければならない。それは発想の原像とか、民俗信仰とか話型とか、そういう視座に立って、物語の内部に秘められている「型」を指して言うことばである。それは、また、物語をその背後から規制する機縁となるものである。だが、ここで言う「しくみ」とは、『日本紀』と『史記』の本紀と列伝という物語的構成が、物語の外枠となっていること、それが外枠だけでなく、物語の内枠として紫式部の作家精神と深く関わる必然性を持っているという事実を指していうのである。それは、一条朝という時代にもてはやされ、栄えた漢詩文、漢学など、『史記』や『白氏文集』を軸とする「漢才（からざえ）」の受容と深く関わっていた。『枕草子』や『紫式部日記』などに見られるように、帝を中心とする宮廷男性貴族との深い関係のなかで受容されていたことを除外してしまって、『源氏』を読むことは、片手落ちになってしまう。従来の「源氏読み」は、女性の手になる女性のための文学という面を、「攝関政治」「後宮社会」という視点から、あまりにも強調し過ぎていた。中世の「隠者階級の文学」「草庵の文学」に対して、「女房階級の文学」という点をあまりにも正面に据え過ぎて、大切なものを捨象してしまっていた、という批判を免れることが出来ないように思う。

野口元大氏は、「同時代の読者と受容」（『源氏物語の本文と受容　源氏物語講座　8』勉誠社　平四年十二月十五日）

のなかで、「作者自身をも含めた身近な読者たちの経験に基づいた願望や期待を織り込み、従来とは違って男性たちの眼をも意識しながら、段階的に形成されていたものと考えられる。」（277頁）と指摘されているが、帝をはじめ、宮廷男性貴族のより積極的な参画を考えなければならない。

『日本書紀』は、『史記』を意識して作られたばかりか、日本の「史記」としての意味をもっていた。『日本書紀』の世界は『史記』を「借景」とする、『史記』と重なる世界であった。そのように意識されていたのだと読むことが大切である。最近出された河北騰博士の『歴史物語の世界』（風間書房　平・4年9月25日）の第三章は、この書のために新たに書き下ろされたもの。そこにも、

「日本紀」とは単に日本書紀の意ではなく、広く日本の歴史書一般という意味。従って、具体的には六国史の名で代表されるような正史、他にはもろもろの外史をも含めて、歴史の書物全般と考えると良いだろう。（36頁）

と指摘されている。『日本紀』はいよいよ拡大解釈されていく。螢巻の虚構による真実の表現という方法が、『栄花』の「史実を虚構という手段で、典型的に表わ」そうとする赤染衛門に、根本的な意味における影響として受け継がれていった、とする見方には従うことが出来る。最初の論点は既に定説になってしまっているだけに、それを訂正することはむつかしい。だがやはりそれは誤りである。再検討を加えなければならないと思う。

今井卓爾氏は、「源氏物語批評史」（『源氏物語の本文と受容　源氏物語講座　8』勉誠社　平・四年十二月十五日）のなかで次のように指摘されている。

帝にとってこの物語は耳ざわりよく聞くことができる、一種の編年体の天皇紀、仮名の実録物語であったのであろう。「源氏物語」は事実めかしており、物語中に実在の人物なども配しているので、作物語ではあっても実録物語の体をなしている。天皇数代にわたる物語である。一条帝は、「源氏物語」とその形態、内容から実録的な作物語とみ

なしたことが「日本紀」云々のことから推察できるわけである。（255頁）

『源氏』を「形態、内容から実録的な作物語とみなしたことが「日本紀」云々のことから推察できる」と言われるが、はたしてそれだけであっただろうか。『史記』と『日本書紀』とを対偶的に並べ、『史記』の本紀と列伝を『源氏』の物語的構造のなかに引き込んで考えていくと、もっと新しい一条朝の意味と歴史の真実とが見えてくるように思う。

『源氏』を紡ぎ出してくる大切な糸のなかに「歌物語」があった。「帚木・空蟬」の巻の物語と「若紫」の巻の物語のなかで、作者は「歌物語」論と実作とを展開し披露しているのではないか。わたしは『源氏』のこの二つの発端ともいうべきこれらの物語を、そんな風に読んでいくことができるのではないかと考えている。従来、帚木巻の雨夜の品定めは、稲賀敬二氏が、「品定めと帚木後記説」（『源氏物語古注釈の世界』汲古書院　平成六年三月三十一日）などで指摘されるように、「段」に分けたり、あるいは、それとは別に「談義」の形式に準じたりして論述されてきた。しかし、総論から各論へ、つまり具体的な体験談へと移っていくなかで、物語は生彩を帯びてくる。左の馬頭の指喰いの女、木枯の女の物語、頭中将の撫子の女の物語、式部の丞の蒜の女の物語、それらは、歌が作られた事情、経由を語りながら、女性論を展開している。歌語り的評論なのである。それはまた、四編の歌物語とも言うべき構造を持っている。指喰いの女の物語で「手を折りて」の歌が『伊勢』の歌を引くのも、やはり種子明かしであり、「右」をひねって「左」の馬頭としたのではないか。これについては、既に別稿「夕顔の巻疏注」（『源氏物語の本文と享受』23頁～26頁　和泉書院　昭・六十一年一〇月二〇日）「夕顔の巻疏注」・補遺」（『源氏物語「本文と享受」の方法』126頁～127頁　和泉書院　一九九二年一二月二五日）などで述べたので繰り返さない。だが、「品定めの翌日、源氏、左大臣邸へ退出」の条、「からうじて、今日は日のけしきも直れり」から続く、帚木の巻の空蟬物語の部分に注意する必要がある。

灯ともしたる透影、障子の上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、見ゆやと思せど隙もなければ、しばし聞きた

まふに、この近き母屋に集ひゐたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし。女「いといたまうまめだちて、まだきにやむごとなきよすが定まりたまへるこそ、さうざうしかむめれ」女「されどさるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ」など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時など、おぼえたまふ。

ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬ゆがめて語るも聞こゆ。くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなんかしと、思す。(『集成』171頁)

これは「歌語り」の具体的な場面である。歌物語が形成されていく具体的場面を出している。紀伊守邸へ方違えに出掛けていっての「垣間見」である。雨夜の品定めの談義を歌語り風に構成して、四編の歌物語として仕立てあげてから、こういう形で歌物語の成立を語ってみせる。歌物語の発生の歴史を語る論議なのだ。女性論にことよせて、文学史論を展開していく。和歌の詞書きをいくら拡幅してみても、歌物語にはならない。文体が違う。いまだに歌物語は、和歌の詞書きから出ているなどという論議があるなかで、紫式部は、文学史論を明確に述べている。こういう論点は、従来の「源氏読み」では全く注意されて来なかったが、やはり、どう読まれてきたか、という論点から、据え直してみなければならない問題のように思われる。

若紫の巻の物語は、玉上琢弥博士(『源氏物語評釈』第二巻　角川書店　昭・四〇年一月三十一日)が指摘されるように、「巻全体が『伊勢物語』の第一段による構想」(48頁)であるが、「垣間見」を発端とする歌物語の「かたち」をとっている。新しい歌物語である「若草の物語」「初草の物語」をそこに創始し、作って見せようとしているのである。

『源氏物語絵巻』(『日本絵巻物全集　2』角川書店　昭・50年6月30日)の「原色版　20　東屋　(一)」に宇治の中君が浮舟に絵物語を見せ、右近が物語を読んでいる所がある。物語享受の形態を示したものと考えられてきた。従来、

テキストを通して読むという物語の享受は『更級日記』あたりから始まった新しい方法だと考えられてきた。螢巻に、

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々絵物語などのすさびにて明かし暮らしたまふ。

明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方に奉りたまふ。(『全集』 202頁)

とあり、さらに、「このごろ幼き人の、女房などに時々読まするを立ち聞けば」(同 203頁) とある。この明石の姫君の読み方は、『絵巻』「東屋 (一)」のような読み方であっただろう。現代風にいうと、八宮に娘として認知もされずに、母親について常陸の国までさすらった浮舟は、東屋の巻で田舎育ちの粗忽さをきわ立つように描かれている。「幼さ」という点では、明石の姫君と共通している。しかし、かなりの教養を身につけて成人した玉鬘の読み方は違っていたように思う。

西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読み、営みおはす。つきなからぬ若人あまたあり。(『全集』 202頁)

玉鬘が「書き読み、営む」のに協力し、手助けするのにふさわしい、有能な若い女房がたくさんいたというのである。「絵物語」は、小学館の『全集』が指摘するように、「絵や物語」なのか、「絵のある物語」なのか、解釈が分かれている。『紫式部日記』草子作りの段に、

御前には、御冊子つくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りととのへて、物語の本どもそへつつ、ところどころにふみ書きくばる。かつは綴ぢあつめしたたむるを役にて、明かし暮らす。「なぞのこもちか、つめたきに、かかるわざはせさせたまふ」と、聞こえたまふものから、よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、とらせたまへるを、借しみののしりて、「もののくにて、むかひさぶらひて、かかるわざしいづ」とさいなむ。されど、よきつぎ、墨、筆など、たまはせたり。(『全集』

205頁）

とある。料紙に書き本を添えてあちらこちらに淨書を依頼していること、紫式部が編集、製本を仕事としていること、などが見えている。中野幸一氏は、頭注で「惜しみののしりて」を「女房達が」と注記するが、「現代語訳」では「殿は大げさに惜しみ騒いで「……」とおとがめになる」と主語を道長とする。敬語表現を道長から削除する理由がないから、現代語訳は誤りである。萩谷朴氏の『紫式部日記全注釈』（角川書店　昭58年5月15日八版）も諸説を検討し、「現代語釈」と同じ解釈を示されている（同書上巻　494～499頁）が、従い難い。「まづむかひさぶらひて」と会話文中の「むかひさぶらひて」は、紫式部が中宮のお前にさし向かい伺候していること、で同じ場面、女房達がその親密ぶりをとがめたのである。前の場面は「編集、製本」、後の場面で「よき薄様」や「筆」などは何のために使ったのか。当時の人々は、これだけ書いてあるだけで何をしたのか理解できたはずである。だが、残念ながら現代のわれわれにはそれがわからない。しかし、編集・製本という同じ次元の場であることを考えると、内題のようなものでも書いたとしかとりようがないのではないか。螢巻に「明け暮れ書き読み、営みおはす」、『日記』に「御冊子つくりいとなませたまふとて」とあるのは、やはり草子作りだったのではないか。「書き読む」営みという意味だけではなかったのではないか。二つの作品のこの場面は、やはり二重写しなのだと考えるべきものではないだろうか。従来の「源氏読み」のなかでは、書き本を見て物語を淨書するぐらいにしか考えていなかった。しかし、六条院の花形として西の対の主人公の一人でもあるに玉鬘が、若人達と同じように、物語を書写していたとは考えにくい。やはり当時の人々は「書き読み、営み」で、何を書いたのか、何をしたのか、理解することが出来たのである。「絵物語などのすさび」のなかで、それとは視座を変えても、玉鬘が書いたのは、他の女房達とは違って内題のようなものでも書くとか、物語の絵などを「かく」ことであったと思う。ただ、「絵や物語」なのか、「絵のある物語」なのか、いずれとも決定できないにしても、「読む」とい

う営みのなかで、「絵」を伴って物語が享受されていたという事実だけは共通している。それは、動かし難い事実である。そして「読む」ということ、読ませるのではなく、自ら物語を読むという自律的主体的な読み方が、既に物語の享受の方法としてとられていたことを、見せている。『更級』の時代にはじめて創始されたのではなく、成人の姫君が読む物語の方法として、そういう読まれ方に向って慣れていったのである。『源氏』の時代は、こういう二つの物語の享受が重なり合い、せめぎ合っている時代だった。そういう読まれ方と深く関わり合いながら、物語が作られていった時代だった。しかし、『源氏』は、やはり絵を伴って享受されるという伝統的な読まれ方に、強く傾いて作られていた。物語のなかに、そういう読まれ方を作者自身が求めている場面がいくつかある。『源氏』の名文と賞賛されてきた桐壺の巻の「野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靫負命婦といふを遣はす。」（阿部秋生校訂『完本　源氏物語』小学館16頁）、須磨の巻の「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波」（同　295頁）、橋姫の巻の「入りもてゆくままに霧ふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ」（同　1030頁）などに始まるこれらの物語は、やはり絵とともに享受されることが求められているように思う。格調の高いリズミカルな抒情性を秘めたこれらの名文は、時空を超えたひと時の愁いと輝きのなかに、永遠の情趣の世界を漂わせている。限りなく広がる「雅」の趣きを揺曳する世界でもある。

II

『源氏』を書いた紫式部は地獄に落ちてしまった。救わなければならない。「源氏供養」や「源氏表白」の世界であ

る。誨淫の書として良家の子女が読むものではない。中世、近世を通じて、『源氏』はそのような仏教的立場や儒教的立場にとらわれて、功利的に読まれてきた。『源氏』が文学作品として、自立的、主体的な意味を回復して、人間中心的な立場から読まれるようになったのは、宣長（享保15年（一七三〇年）～享和元年（一八〇一年））の出現を見てからであった。しかし、宣長の思想的立場は、主観的で非合理的な色彩が強く、その古道論は、神話、伝説を事実だとする立場から、神の意志を絶対化するきわめて危険な本性を内包するものだった。だが、その国学の方法は、主観を排した極めて実証的な方法を確立していった。『石上私淑言』に見られる「物のあはれ」論、『源氏物語玉の小櫛』、『古事記伝』などは、高い次元の学問的到達点を示している。芭蕉、西鶴、近松という元禄期のいわば人間中心的なものの考え方、江戸時代の小さな一つの文芸復興ともいうべきものの胎動は、宣長の手を経て、また、新たな見直しの時代を迎えようとしていたのであった。しかし、それは、やはり一つの時代的制約、限界ともいうべきものを露呈している。

『源氏』の流伝は、まず紫式部、道長など、作者とその周辺の血筋の家々に伝えられ、やがて書家、歌道の家々にもたらされた。さらに公卿、貴族など殿上人達の手に、またさらに、連歌師、俳諧師など、地下文化を担う人々の手によって流伝されてきた。そして写本から版本の流布によって飛躍的に広範囲な読者層を確保することが出来た。慶安本、万治本、首書本、湖月抄本など、江戸初期に至までの『源氏』版本の流布には、目を見張るものがある。版本によるテキストの量産の結果、書き込みが、異本との校合や注釈的注記など、多角的に比較的自由になされるようになった。本文研究がそれほど重視されていなかった時代のことで、底本に何を使うかという、著作権に関わるような意識も、あまり自覚されていなかった。既に指摘した（『源氏物語「本文と享受」の方法』和泉書院　一九九二年一二月二五日　81～98頁）ように、国立国会図書館蔵『源氏物語慶安本』玉鬘の巻の書き入れは、「その本文校訂の実態や註釈書引用の態度から、三条西家の源氏学を享受しようとする立場」からなされたものであり、『岷江入楚』の注記を中心にした注釈

書の書き入れであった。『慶安本』による物語享受の実態は、写本についても言うことができる。それほど大量な注記があるわけではないが、古代学協会藏、大島本『源氏物語』夕顔巻についても言える。ここに見える本文の見せ消ちや加筆訂正が本文の書写と同次元で、同筆でなされたものかどうかを判定することは至難である。注記についても同様である。これらの集成された姿を、大島本の最終的なものと判定すべきか、享受の一つの到達点を示すものと判定すべきかは、問題がある。だが、写本もやはり版本と同じように、物語享受史の一つの到達点を示していると解した方がよいように思う。『竹取物語』なども、やはり版本への書き入れが、異本となったり、注釈書となったりして一書を成立させ、独立させていくようなものも存在する。これが一般的なのであった。

『首書源氏物語』の本文は、今泉忠義博士によって、青表紙本系版本としての純粋性が主張され、それに従う向きが多かった。『源氏物語　下』（今泉忠義・岡崎正継・森昇一編　桜楓社　昭・62年10月重版）の「凡例」、それを紹介する『1994　図書目録　おうふう』も「青表紙系の版本中最善本」と言われるが、従い難い。これについては、『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院）第一章・第二章で論証し、本「紀要」第十号にその「解題・論文要旨」を論述したので、繰り返さない。引用は省略する。『首書本』の跋文には「寛永十七庚辰年六月中旬洛北山　下　一竿斎」の識語がある。草庵の主人「一竿斎」が誰であるかは明らかにし得ない。しかし「諸注集成」という、長い源氏学の伝統と異なる「諸注抄出」という新しい注釈史への転換、展開がなされていることの意味は重視しなければならない。『首書本』玉鬘の巻の頭注に引かれた諸注の頻出数を集計すると、次のようになる。

(1)細流抄・192　(2)万水一路・133　(3)或抄・130　(4)花鳥余情・116　(5)河海抄・50　(6)紹巴抄・39　(7)寿花抄・35
(8)孟津抄・20

わたしは編著『首書源氏物語　玉鬘』（和泉書院）の「解説」で次のように述べている。

これらの頻出数は、やはり源氏学の学統に深くかかわるものであるが、物語の内容に対応して、微妙に註釈書の引用に変化があらわれること、引用の方法がほぼ群を形成していることなどが注意される。細流抄を軸にして、万水一露、或抄の側に引用の比重がかけられてくると、河海抄、花鳥余情の側の引用が減少していく。紹巴抄、孟津抄が同一頁に重複して引用されているのは五例に過ぎず、あい補う形態で、しかも群を構成して引用されている。これは物理的に限られた紙面に注記を収めなければならないという事情以外に、別の意識が働いていたからだと思われる。片桐洋一氏は、このシリーズの総論・桐壺の解説で、他注よりも「或抄」が最も多く引用されているのは、「作品の文学的鑑賞を何よりも重視する「首書源氏」の姿勢と一致する」と指摘されているが、註釈書の選択、注記のなかにも、やはりそういう姿勢や意図を読みとることができるように思う。出典考証という面から、そうした面をからませながら、文意文脈を理解しようとする面から、というように諸注の個性を生かしながら、わかりやすさを中心にして適宜、簡潔に引いていく。そこには、湖月抄のように、諸注の簡略化と集大成という方向とは、また別の読みが見られるのではないだろうか。きわめてストレートに、よりわかりやすく、直接的に問いかけてくる源氏物語の読みである。

玉鬘を「さすらい」、流離譚として捉える見方は、折口・高崎・三谷博士らの業績をはじめ、長谷川政春（有斐閣『講座　源氏物語の世界』）、小林茂美（桜楓社『源氏物語論序説』）氏など多くの人々によって、民俗学的研究の成果として問われてきたし、阿部秋生（東京大学出版会『源氏物語研究序説』）、藤井貞和氏らの発言も見られる。源氏物語の作者は、そういう物語の話型をふまえながら、玉鬘の物語をつむぎ出し、近江の君の物語を対偶的に構成する。更に浮舟物語を同じ話型のなかに創造していく。そういう営みのなかに如何なる世界、如何なる人間の生き方を探り出し、求めようとしたのか。そのような問題を問いつめていくなかで、源氏物語は、常に新たな意味をもって蘇るし、語りかけてもくる。（129頁）

一竿斎が『首書源氏』というこれほどの版本を上梓しながらその経歴を明らかにし得ないこと、引用注釈書の二位に『万水一路』が見えていること、この意味はもっと考えてみなければならないことのように思う。伊井春樹博士は、『万水一露』に付した貞徳の跋文に、「源氏物語を理解する必須の注釈書として、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』を記し、これらは一部が欠けても不都合だ。」（『万水一路　第五巻』　桜楓社　平成四年二月二五日）という説を紹介している。『首書本』の跋文にも「河海のふかきところ花鳥の色をも音をも」と、『河海』と『花鳥』とを並列的にあげている。宗祇以後の註釈研究は、実隆、公条、実枝と続く三条西家の源氏学に受け継がれ、それが主流をなしたが、連歌師達に継承されていった宗祇、宗碩、永閑らの学統も傍流とはいえ無視できない。地下階級による『源氏』の物語享受であった。伊井氏が指摘されるように、『万水一露』は能登永閑の手に成る注釈書ではあるが、宗碩の説が全体を覆っている。永閑は宗碩の異母弟とも、宗牧の妹婿ともいわれ、『実隆公記』に、実隆邸に宗牧などと出入りしているのは宗碩の紹介によるのだろうといわれる。諸注を集成して一書にまとめる必要性を痛感し、『万水』の述作を思い立つにいたったとされる。宗碩は実隆邸に出入りし、『花鳥』の不審をただすなど、三条西家の源氏学をも吸収し、連歌師であるとともに、独自の説をもつ『源氏』の講釈師としての立場を確立した。宗祇没後の源氏学は、実隆と宗碩との二流を派生し、前者は公卿、大名に、後者は地下の連歌師たちに承け継がれた。このことは、既に指摘したごとくである。『万水』は、後者、宗碩の流派にたつ註釈書である。『源氏』の物語享受の具体的な事例については、伊井氏の「六　師説と当流意識」（575頁）に詳しい。『首書本』は、『万水』を主要な註釈書として頭注に引用しながら、「古注集成」という従来の源氏学の正統を越え、新しい注釈方法を確立した。その「跋文」で、

わつかにひさをいるゝはかりのいほりには数かすの抄ををかんも所せけれはおほむねその詞を所々にかきて、我青氈とするものなり

と述べているように「集成」ではなく、「古注抄出」という新しい源氏学の方法を創出した注釈史上の意味は、きわめて重要なものとして位置づけていかなければならない。このことについては、『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院）で既に論述したごとくである。それが、伊井氏の指摘されるように、三条西家の源氏学を吸収しながら、独自の源氏学を確立した連歌師、『源氏』講釈師達の学統から生み出されていったこと、『首書本』の一竿斎もそういう階層に属する人であったことは、ほぼ間違いないであろう。新しい『源氏』学、「読み」のなかに求められてきたものを、そういう視座から据え直してみることも大切なのである。ただ『万水一露』は、伊井氏（『万水一露』『源氏物語の本文と受容　源氏物語講座　8』（勉誠社）所収）も指摘されるように、「諸注集成によって成り立っており、あわせて本文も読んでいけるという、後世の『湖月抄』を先取りした体裁であった」（169頁）。宗碩とか永閑の学説には「堂上たちとは異なる新鮮さ」（176頁）があり、そのことが貞徳をして江戸期になって『万水』を出版に踏み切らせたのではないかと指摘されているが、『万水』の古注を集成し、師説と自説とをさらに加え、総集した「諸注集成」に、一竿斎は、新しい注釈史の動向を見抜いていたのではなかっただろうか。そこに「当流」をも吸収していく立場にあった一竿斎の史眼が輝いていたように思われる。そして、こういう立場に立つ『首書本』が、本文系統論上、青表紙本として純粋であることは、またあり得ないことでもあった。

四、わたしのうちなる『源氏物語』(2)——「藤原定家論」への序章。

執念の火群のなかで——

I

『源氏』の本文の流伝・定家の「青表紙本」をめぐって、わたしは次のように述べたことがある。

初期『源氏物語』の流伝は、上東門院彰子を中心とする後宮と紫式部の婚戚関係によっていち早くなされ、更に行成や、具平親王のごとく学芸の家の手を経て——書道の家が物語の書写にあずかり伝来に果した役割は大きかった——流布していったと見られるが、その本文系統が別本系統に属するものであったこと、中世以来、二条、冷泉、京極家の伝来において『源氏物語』の証本として尊重されてきた青表紙本の校訂者定家は、世尊寺伊行が『源氏釈』をあらわし、伊勢物語の研究にたずさわったことに批判的であったこと、『源氏釈』の本文の系統もその根幹は別本系統であったこと、これらの事実は、平安時代に於ける源氏物語の本文の流伝が、別本系統の諸本を中心としてなされていたことを示すものである。そして『絵巻』の中心をなす柏木巻から御法巻に至る一群が、国冬本と緊密な親近関係にあり、しかも麗子本と同一系統に属する事実は定家本『伊勢物語』の非難めいた識語とともに注意されなければならない。定家の批判には、伊行の主知的態度への非難とだけでは考えられないものがあるようである。『伊勢物語』の研究において、伊行の主知的態度を奇怪狼籍なるものとして非難した定家は、『源氏物語』の研究に至ってその態度を改めざるを得なかった。定家自筆本『奥入』の識語によれば『源氏物語』の古写本や古註を博捜、集成する

意志を持ちながら、容易に完成し得なかったこと、伊行をはじめ、先学の業績を包容せざるを得なかったことが明らかであるが、こうした定家の理知的態度は、池田博士が高く評価される如く、その謙虚な真摯な心情に支えられた反主知的態度による本文への対決であり、伝来のままを尊重する古典愛護の考証的態度のみとはにわかに即断出来ないものがある。古写本、古註を博捜、集成しようとした定家の努力にもかかわらず、報いられるところは少なかった。『源氏物語』の研究に至ってその態度を改めざるを得なかった事情は、その辺に存在しているのではないか。『新古今集』の選者として後鳥羽院の親撰化に反応した微妙な定家の心は『明月記』に明かであるが、定家が「理知的態度」を確立するに至った経路には複雑なものがあったと考えられる。

池田博士は「俊成、光行、定家らの所持本は校訂の加はらない本文であり、それらの諸本の間には相互の異同は少なかったといふことである。この事実はそれら家々の証本が比較的純粋に保持されて、他本との混成を生じてゐなかったことを示すものであり、その根本に俊成以下の人々の敬虔にして謙虚な古典愛護の精神が動いてゐたからであらう。彼等に至る前、各々の家本の伝来途上において幾たび校合や校訂が行はれたか、もとより知る由もないが少くとも彼等の関知し得る限りにおいて、それらの家の証本は純粋な系統線上にあるものと考へざるを得ない。」といわれるが、古写本の奥書きや旧註の識語から帰納されるこれらの結論には、また問題が存するといわなければならない。青表紙本はともかく、河内本に至っては、同一系統内における本文系譜の再建もきわめて困難な段階にあり、書陵部蔵河内本の存在によって僅かに不可能をまぬがれてもいるようである。俊成本、定家本、青表紙本との関係、光行本、親行本、河内本との関係などに至っては池田博士の研究によって僅かにその系統論的一断面を知るにすぎない。『原中最秘鈔』の聖覚（源親行の子）の識語によれば、「京極中納言家証本大略相同家本」とあり、定家証本は光行本との間に大差が見られなかったことが明らかである。これらの事実は、池田博士の指摘されるごとく、光行本が親行らの校

訂した河内本とは同一でなかったことを示すものではあるが、定家本、光行本の諸本間に、相互の異同が少なかったことは、これらが家の証本として純粋な系統線上にあることを示すものであっただろうか。池田博士は初期『源氏物語』の伝来関係について「これらの諸本の源流は理論的には行成本に統一せられ得べく、その内容はさして異同の多いものではなかった筈であるが、現存諸本の本文研究の結果よりすれば、かなりの相違を示してゐると言はざるを得ない。行成の浄書後において、作者または他の第三者によって、少なからぬ修正加除がなされたであらう」といわれ、「後世の諸本として重きをなすやうな伝本は、ある限られた家々に伝へられた由緒のある本」であり、初期『源氏物語』の流伝が「今日考へられるやうな意味のものではなかったことを立証する」ものだとされる。池田博士は定家証本たる青表紙本と光行本とが、ともに諸本間に相互の異同が少なく、純粋な系統線上にある由緒ある本であるといわれるが、平安中期から末期にかけての本文資料は、いずれも別本系統の側にその正統性を認めているのである。それらの事実は伝来上における偶然の一致とは考え難い。池田博士は、「定家の学風が父俊成と同様、一々煩瑣な異文にこだはらなかったことを示す」ものだとされるが、こうした考証的、理知的態度への矛盾をあえておかさざるを得なかったこと、伊行本や『源氏釈』への批判と共にまたそれへの傾斜と同化とに向わざるを得なかったこと、これらの事情は、定家自筆本『奥入』の識語によってその原形となった定家本が、校訂にかかわるものであることを示している事実と共に、青表紙本の系統論的純粋性を主張される池田博士の研究にきわめて不利な反証を与えるものといわざるを得ない。(『源氏物語とその周辺』 伊那毎日新聞社　昭・54・12・21　28頁)

この論文を口頭発表したのは昭和三十四年十一月の国学院大学国文学会で、私家版としての刊行を経て、伊那毎日新聞社から出版したのは、昭和五十四年である。既に三十年近い歳月が流れている。その間、諸家の貴重な研究も発表されているが、最近、管見に入った主要な論文のなかから問題点を整理してみたい。

『源氏釈』の本文資料的研究に業績をあげられている渋谷栄一氏は、定家と『源氏』の本文校訂について、見るべき論文を発表された。『阿部正路博士還暦記念論文集、日本文学の伝統と創造』教育出版センター（一九九三年六月二六日）、国学院大学国文学会　第五十一冊、「中古文学」第五十一号（平・五・五・二十二）などの諸論であるが「藤原定家と『源氏物語』校訂ー定家本「花散里」「柏木」「早蕨」・付「行幸」における本文校訂ー」に、次のように論述されている。（『論集　源氏物語とその前後　4』王朝物語研究会　新典社　一九九三年五月二十日）

定家自筆本「奥入」所載「源氏物語」本文の定家校訂以前の元の本文は、いわば別本ともいうべき性格をもった本文で、そこにおける訂正が定家本「柏木」「早蕨」そして大島本等に概ね継承されている。（220頁）

定家本「柏木」の訂正以前の本文の性格と系統を考えた場合、別本の御物本、保坂本、国冬本等と共通異文をもつということ。その訂正後の本文は言うまでもなく青表紙本本文であるが、また一方で、その訂正以前の本文の形が、鎌倉期書写の青表紙本グループと共通する例があること。そのことは、定家本の成立をめぐって、自筆本「奥入」付載「源氏物語」残存本文と鎌倉期書写の「源氏物語」本文とが共通本文を持っていたことと関係して、今後の興味深い問題である。（238頁）

「早蕨」における訂正以前の本文の性格と系統を考えると、「柏木」と同様に別本と共通異文をもつ例もあるが、しかし、ここでの大きな特徴は、鎌倉期書写の青表紙本グループの御物本、横山本、池田本等と共通異文をもつことである。

結局、「柏木」「早蕨」における定家の校訂以前の本文の性格と系統を総合して考えると、別本と共通異文を持つ〈鎌倉期書写の青表紙本グループと共通異文をもつ〉定家本「柏木」「早蕨」というような図式で考えられそうである。（240頁）

わたしは、「源氏物語絵詞の本文資料的価値」（『源氏物語とその周辺』所収）で、次のように述べた。

もとより『絵巻』の詞書のたて方については、既に中村義雄氏が指摘されているように「原典の或る部分を殆どそのまま抄出したと見られるもの」「或る部分を抄出、更に途中を適当に省略し、その前後を続けたと見られるもの」のほか「詞書の拠ったテキスト独自の本文か『絵巻』制作時の省略か断定できぬものがいくつかあり、しかも短い省略は現在判断し得ない。又大胆な変改が行なはれてゐるとみられる箇所を含むもの」（『源氏物語の絵巻の詞書について』「美術研究」第百七十四号　七十四頁）などがあり、やや統一を欠いている。それに、池田博士の立てられた本文系統論にも多くの問題があり、はたしてそれらの諸本をその系統に所属させることが妥当であるかについても疑問がある。更に絵詞の原拠となった本文の性格を、現在諸本の系統に求めようとする方法自体のなかにもいくつかの矛盾を指摘することができよう。しかし『絵巻』の制作に当ってその絵詞の原拠となった物語の完本、またはこれに準ずべきものが存在していたことは、もはや動かすことのできない事実であり、これらの絵詞の多くが、別本系統の諸本と密接なかかわりをもち、平安末期の『源氏物語』本文の流伝の様相を示していることを否定することはできない。

このように、少なくとも平安時代の有力な一伝本が、青表紙本ではなく別本の側に存在していたという事実は、『伊勢物語』の流伝における定家本と非定家本との関係にきわめて類似するもので、定家の学問的立場とその方法の真価にかかわる重要な問題を示唆するもののように考えられる。『源氏物語』絵詞の本文資料的価値は、きわめて高いものがあるが、こうした物語の享受の実態を、現存諸本を通して追跡し得る意味を過小に評価すべきではないと考えている。（17頁）

「絵詞」が、青表紙本として考えられていた三十年余り以前に、こういう説を発表し、山岸徳平博士からおほめの私信をいただいたりしたが、渋谷氏の調査も定家本校訂以前の本文は、やはり別本系統であるが、系統論的に不整な部分

を混在させていると言われる。このことは、わたしの前田家本『源氏釈』の調査（22頁～28頁）からも明らかであるが「絵詞」の本文系統論的位置は、また「西行筆切れ」の本文調査からも裏付けられる。渋谷氏は「鎌倉期書写の青表紙本グループと共通異文をもつ」と言われるが、わたしは桐壺の巻の本文を調査、研究して、次のように述べたことがある。

以上の結果からすれば、国冬本、御物本などに混成、混態の現象が見られることは動かし難い事実であり、特に国冬本には独自異文も多く、四百十例、異文率も三八・三％に達すること、解釈的本文の存在することを考慮して従来の文献学的方法によるとすれば、かなり後代の手が加わった不純、不整な本文であると推定することが順当のように思われる。しかし「源氏物語絵詞」、『源氏釈』抄出本文、、『古系図』裏書の本文などの校合を通して、院政時代から鎌倉時代にかけての本文的性格をある程度追求してきた立場からすれば、『源氏物語』の本文研究は一帖単位でなされるべきであるが、そのあるものは数帖単位の一つの物語群というような形で本文の特性を伝えているものもあるし、系統論的に循環論的矛盾に逢着せざるをえないという陥穽におちいりがちでもあった。しかし「伝津守国冬筆本源氏物語の周辺」（『源氏物語とその周辺』伊那毎日新聞社）で桐壺巻に「草たかくなり野わきに所〳〵あれたる心地して月のかけはかりそやえむくらにもさはらす」とある『源氏釈』抄出本文を対校し、

これによれば、桐壺巻では源氏釈の抄出本文は別本系統の陽明文庫本、国冬本、御物本などに最も親近性を示し、殊に陽明文庫本と国冬本に最も近いことは、「ところ〳〵」「侍る」などの異文によって明らかである。これらの事実は『源氏釈』の原形をなす本文と「絵詞」の本文とが別本系統の陽明文庫本、国冬本などと同一系統内に属する本文によっていることを示している（『源氏物語とその周辺』24頁）

だが、『源氏釈』全体の本文証跡としては、別本系周辺の諸本とともに系統論的には不整な本文形態であることをも

示している。『源氏物語の本文と享受』でわたしは次のように述べた。

中村義雄氏（『絵巻物詞書の研究』角川書店）の「源氏物語絵巻詞書についての基礎的考察」補記から引用させていただく。

詞書の本文系統については、別に岩下光雄氏が詳細に調査検討されている。即ち「源氏物語絵詞の本文資料的価値」（昭・34・1　自家版、後に『源氏物語論』昭・42・10　佐紀社に収録、更に『源氏物語とその周辺』昭・54・12　伊那毎日新聞社に収録）において、絵詞本文が別本系諸本、中でも陽明文庫本、国冬本、保坂本、西行筆文、横山本、御物本などと親近性を示し、密接な系統的関係を有することを明らかにされ、国冬本については「玉上琢弥氏は、敬語の用法について論じられ、『特に従うべき価値ある本文でもない』と国冬本の用例を避けられているが、にはかに従へない」といい「国冬本が絵詞の本文系統と深い関係を有することは明らかである」とされている。岩下氏の一連の調査結果は、筆者のそれと殆ど一致しており、計らずも互に証明し合う格好となっている。氏は更に「伝津守国冬筆本源氏物語の周辺」（昭34・12　自家版後に上掲書に収録）において、絵詞の本文が従一位麗子本と近い関係にあるのではないか、また花園左大臣源有仁本もこの系統に属するものではなかったかとする筆者の推測（本書第二章及び同章註五の稲賀敬二氏論文参照）にも触れ、『源氏物語絵巻』の本文資料的価値は極めて重要なことを指摘、「従来の源氏物語系統論は、その根底から検討を加えられる必要性に迫られる」と述べておられる。（36頁）

少し長い引用になったが、中村氏からご指摘いただいた一連の研究は、昭和三十年代の発表で既に二十余年の歳月が経過し、その間多くの方々から直接に、間接に何かとご教示、ご批判をいただくことが多かった。だが、大筋において現在でもこの考えを修正する必要はないと考えている。

伊井春樹氏（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）は『源氏釈』と『奥入』の空白期を埋める本文資料であることを

指摘されている。（98頁）また阿部秋生氏（陽明叢書国書篇『源氏物語　一』　思文閣出版）は、

陽明文庫本の本文は、青表紙本、河内本の本文をどのようにとりあわせても出て来ないものである。両本の混淆から生じた別本ではない。逆に部分的には、河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないかと思われるところがあった。とすると、陽明文庫本の本文は、河内本成立以後の本文ではないように思われる。（119頁）

と指摘されている。阿部氏の部分的な調査にもとずく推測が本文の実態を捉えたものではないことは「源氏物語　夕顔巻疏注」（『紀要』　創刊号）で指摘されたところであるが、箇々の問題点については論証には及ばなかった。「未完」としたゆえんでもあるが、吉岡氏、阿部氏が指摘されるように、本文を「とりあわせる」という現存諸本の操作からは、陽明文庫本や国冬本の本文は絶対に出て来ない。このことは、陽明文庫本や国冬本を、麦生本などとは別系統の本文と考えるべきことを示しているのであろうか。それとも阿部氏の指摘されるように、「逆に部分的には、河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないか」と考えるべきであろうか。問題はなかなか単純には割り切れない錯綜した事情をかかえこんでいるように思われるが、その点への決着が実はかなり重要な分岐点となるように考えている。（227頁）

吉岡曠氏は、既に発表された論攷に手を加えられたり、新たに執筆されたものを加えられたりして『源氏物語の本文批判』（笠間書院　1994年6月1日）を著わされた。氏は、「一般の人々にわかりやすい本文をというのが河内本の基本的校訂態度であり、その校訂態度は首巻の桐壺巻で特に強く意識されていたのではないかと思われる。」（59頁）と指摘され、麦生本の祖本を想定、祖本の異文一六〇～一七〇箇所を「他本によって修訂することによって、河内本桐壺巻は成立した」（103頁）と言われる。さらに、「河内本が、義理を通すことを旨として諸種の本文を取捨選択した合成本文で

あるという、池田氏以来の、あるいは三条西家以来の定説はまずゆるがないと見てよいであろう。」（112頁）とされ、石田穣二、阿部秋生、池田亀鑑、片桐洋一氏の本文研究を批判される。そして桐壺以下採りあげた十帖について、「各帖とも書写過程に生じた異同とは考えられない異文の対立が認められること、その対立がオリジナルなものであるか否かを識別することもほぼ可能であること」「巻によって、二系統ないしは三系統のオリジナルな本文対立が認められた」（173頁）と結語されている。さらに、青表紙本諸本の性格を追求され、「青表紙本の本文整定試案」を試みられている。阿部秋生氏の立論をはじめ、これらの問題については、『源氏物語の本文と享受』180頁～262頁で既に述べているのでくり返さない。

池田利夫氏は「源氏物語所詠歌本文異同とその計数処理」（『源氏物語の文献学的研究序説』　笠間書院　昭63年12月10日）で

青表紙本のゆれが別本に傾いているとは言え、傾斜はいささかのもので、しかも、それは青表紙本自体のゆれた説明をしているのにとどまっている。つまり、無理に一括しているものの、ゆれの巨大な別本は本文が河内本に傾き、ゆれの乏しい河内本は別本に傾いて相当部分が重なり合っている。この重なり部分がそれぞれの総量に占める比率が河内本では大きく、別本では、その三分の一にも達していないのである。この原因の多くは、別本が他の二群と異なって、一つの系統をなしていない点に根ざしていようか、別本が河内本と親近性を表すという見かけの傾向以上に、両者の基軸が隔っていることを現しているのかも知れない。ただ、そうした解釈は、まだ軽々にすべき段階ではなく、ここでは、現象自体を客観的にとらえ、将来の分析に備えておくのが良いであろう。（211頁）

と指摘されている。池田氏の後半の捉え方はいかがなものであろうか。相対的な論理としてはともかく、従い難い立論への見通し、展望であるように思われる。阿部秋生氏は『源氏物語の本文』（岩波書店　一九八六年六月二〇日）で、

「青表紙本と河内本とを比べてみても、それほど大きく違っているわけではない。」（31頁）「現存諸本の系統をたてる時、青表紙本、河内本を分類の項目に用いることは避けるべきであったのではないか」（98頁）「青表紙本、河内本の成立以前には、物語本の書写について、きびしい態度が求められることはなかった」（121頁）「紫式部が書いた草稿本と清書本とが共に世に出て書写されて流布したためとすべきなのか。それとも書写する時の書写者が自由・気ままに物語本として書写することを重ねたためとすべきなのか。」（125頁）と、指摘されている。『大成』の根幹に関わる問題であるが、基幹的な部分で、既に混成、混態を経ている『源氏』の本文の文献学的分類、系統論の樹立は、確かに阿部氏の指摘されるごとくなのである。野村精一氏も「伝明融筆源氏物語の本文について（三）－本文史の動態の再現は可能か－（『実践国文学』第三十七号　平・2・3・10）で「大成校異篇の本文批評論のために資料的価値は目下のところ問い直される必要がある」（60頁）と指摘されている。氏は「同論（一）」（第三十五号）できわめて貴重な注目すべき問題提起と論証を試みられている。だが伊藤鉄也氏が『源氏物語受容論序説－別本・古注釈・折口信夫－』（桜楓社　平成2年10月）で述べられているように、

五島和代は、「河内本源氏物語と国冬本－常夏巻の場合－」（『北九州大学文学部紀要　第三六号　昭和六一）で「国冬本が河内本の根幹本文となっているということは、国冬本が河内本成立時に存在していたということである。」（40頁）と言われる。現在確認しうる「常夏」の本文資料からの検討結果から、そのような結論に至ることには賛同する。しかし、こうした別本本文の考察は、多面的な視点から少しずつ解きほぐして行かなければならない。また、岩下光雄氏は「帚木の巻の本文と享受」（『源氏物語の本文と享受』昭和六一　和泉書院）で「河内本と国冬本、あるいは陽明文庫本が、同一祖本の接触の時期があったとか、同一群類の諸本を共有する時期があったとかいう享受の相を推測させるものである」（三五六頁）と言われる。少しずつ別本本文が読まれていたことに意を強くするのが、

まだまだ本文検討の積み重ねが大切であり、にわかに五島・岩下両氏の結論に依りかかることには慎重でありたいと思っている。「桐壺」の詳細な異同の検討を通して、吉岡曠氏は、「陽・国二本（正確にいえば陽・国二本の祖本）と河内本との関係はきわめて稀薄だといってもよいであろう。」（「河内本『桐壺』巻の校訂過程（上）」「文学」昭和五九　三八頁）と言われた。別本として一括された写本群は、巻毎に異同傾向を異にするのが常である。そして現在は、まだまだ細部の基本的な検討の継続が、別本研究の現状となっている。別本の位相を探求する上での方法論の未熟さと、本文資料の整理が正確になされていないことによる論理の空転を、今は痛感している。（109頁）

というのでは、各論は前進しない。学問は、また、仮設の上に成立するものであるという、厳然たる事実に視座を向けていく必要があろう。「別本集成」のある種の挫折は、野村精一氏が指摘されるごとく、明確な事実なのである。

平安末期から鎌倉初期の『源氏』の本文資料の証跡を伝えるかと思われる「絵詞」や「伝西行筆切れ」などは別本系に近く、前田家本『源氏釈』や定家自筆本『奥入』などは、別本系に親近性を示しながらも、なお青表紙本系統の諸本との混態を生じ、系統論的に不整である。これら前群と後群の資料では、資料そのもの、あるいは資料校訂以前のテキストが、そうした二つの本文的性格をもつものを混在させていたと考えなければならないように思われる。渋谷氏の『源氏釈』の本文資料的研究に期待しながらも、やはりその本文系統論の樹立には困難な越え難い問題が存在している。平安時代における『源氏』本文の流伝の実態は、別本系と、それと混成、混態する青表紙本成立以前の同一群類の不整である本文系統との対立、混在として捉え直すか、池田亀鑑博士の立てられた本文系統論を根底から見直すか、という論点に立たなければならないところに来ていると考えるべきであろう。

確かに『源氏』は、『枕』などに比較すると、諸本間の異文は少ない。だが、微妙な物語の陰影を、異文が示している場合も多い。さらに、紫式部は、「ことば」を操る用語意識が、極限に近いまでに自覚していた作家であった。既に

別に指摘してきたように、和泉式部などを遥かに超えようとする歌人としての誇りが、そこに存在していたように思われる。玉髪の巻々末の歌論は、そういう視点から捉え直し、再検討が加えられなければならないことも指摘したごとくである。「異本文学論」への試みは、そうした用語意識との関わりのなかに捉えなければならない。既に本学「紀要」第十号に、拙著『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院　1992年12月25日）の「解題・論文要旨」を執筆したので繰り返し述べない。それらで論述したごとく、「「面影」の語誌と物語の享受」、「「おのがいとめでたしと」再論」、「「つれづれ」の語をめぐる論」、「「心ときめき」「顕証」などの語をめぐる論」（「宿木の巻疏注」）「『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受」などは、そういう視点に立つ新しい試みであり、本文と享受についての業績として、研究史の一角に残り得るささやかな一領域を拓き得たことは、やはり望外のよろこびであった。

II

「藤原定家論」のなかで、わたしが興味深く思うのは、後鳥羽上皇と定家、定家と『百人一首』をめぐる問題である。わたしはわたし自身の前半生をかえり見ながら、研究と創作との狭間のなかで、いささか、私小説めいた論述を試みることにする。

『明月記』嘉禎元年（一二三五）五月二十七日の条に見える「嵯峨の中院の障子の色紙形」の記事が、『百人一首』を指すのか『百人秀歌』を指すのか、「古来人歌各一首」としてそれら以外のものを指すのか、種々の論議があって問題の存するところである。主要な論の一つに、為家の岳父、宇都宮入道頼綱の嵯峨中院小倉山荘の障子に張る色紙形として、定家がつくった最初のものは『秀歌』だったとする石田吉貞氏（『定家復原　百人一首』桜楓社　昭・60・11・

25ほか）らと、『一首』が『秀歌』をもとにしながらも、色紙形の最初のものだったと見る樋口芳麻呂氏らの見解がある。それは、『秀歌』が『一首』の草稿本的なものとして、もとを成しているとする見方は共通するが、「色紙形」の成立という点からは見解を異にしている。樋口氏は、『日本古典文学大辞典　第一巻』（岩波書店　1993・10・20）「小倉百人一首」の項で、自説を定説化して展開されているが、『辞典』の記述としてはいかがなものであろうか。これらの見解とは別に、上条彰次氏（「『百人一首』追考――『明月記』関連記事の周辺など、――松蔭女子学院大学「文林」第二十七号　1993・3）らのように、『原百人秀歌』的なるものの存在を想定される立論もある。『明月記』文暦二年五月二十七日（同年九月　嘉禎）の条を歌仙秀歌撰的作品に当てると、「自天智天皇以来及家隆・雅経」の記述を合理化する一つの見解である。もちろんそれは、『一首』を「対後鳥羽院応答意識と王朝文化顕揚意識という主題意識が有機的に結びつき、より高次の統一的主題意識」のなかに捉えようとされる作品論と深く関わる見解でもある。さらに、織田正吉氏（『謎の歌集　百人一首　その構造と成立』筑摩書房　1989・1・30）は、「『明月記』にいう色紙和歌は『百人秀歌』『百人一首』とは別の、それらとよく似た別の歌集であること、『百人秀歌』と『百人一首』の関係については、成立に前後関係はなく、『百人秀歌』は『百人一首』の語句を補い、たがいに並立する歌集であること、このことは、『百人一首』および『百人秀歌』の歌そのものの観察から実証することができる。」（45頁）と指摘される。そして、

後鳥羽院に対する鎮魂の思いを托し、その呪詛を隠岐から運ぶ風を鎮める願いをこめて、定家は『百人一首』を撰歌したのである。定家は撰歌を終えると、その意図を隠すため、配列を歌人の時代順に組み替え、伝承がいうように小倉山荘にその色紙を貼りめぐらせ、心の平安を求めたのであろう。（271頁）

といわれる。定家の山荘に貼られた色紙和歌の趣向に惹れた頼綱が、定家の真意を知らずに同じものの染筆を懇望し、制作されたのが『明月記』にいう色紙形だと織田氏は推定されている。これらの論議は、『明月記』をどう読むかに関

わる問題であるが、成立論的には定家自撰説、宇都宮入道頼綱撰歌説、定家撰後人補訂説、宗祇偽撰説などの説が見られる。だが、辻勝美氏（「『小倉百人一首』の成立」風間書房　和歌文学論集　9『百人一首と秀歌撰』所収　平成6・1・31）が指摘されるように、「現存本の成立が定家没後であることは確実で、嫡男為家らの後人による補訂を考えなければならないという問題」（117頁）が存する。

『明月記』をどう読むか、という問題は、それがどのように成立したか、という問題と深く関わる。『明月記』が、定家の日録的日記として、年次を追って記録されていったままであるとする記録の読み方は、やはり誤りであり、そういう読み方では事実を読めないのではないか、という問題が『明月記』自体のなかにあるように思われる。辻彦三郎氏（『藤原定家明月記の研究』吉川弘文館　昭・52年5月10日）は、

藤原定家自筆明月記治承四五年記一巻が実際には当時の執筆ではなく、定家七十歳前後の筆跡であることを明らかにし得たと称してよいのである。（99頁）

と指摘されている。「紅旗」の語などをめぐり、さらに筆勢や補筆などの事実から論証される氏の立論には、また従うべき点も多いように思う。朝日新聞社版『冷泉家時雨亭叢書　明月記　一』（1993年12月1日）「解題」にも次のように論述されている。

ところで、影印を見るとただちにわかることであるが、定家自筆原本とはいえ、さまざまな書風が存している。これは、定家が毎日のように書きつけた日記を、後に浄書した際の、定家の年齢による書風の変化によると考えられる場合もあれば、明らかに他筆とみられるものがあって、さらに一巻のなかに複数の書風が存している場合もある。その大きな理由として、定家が家司など側近の者たちを指揮監督して浄書せしめたことが考えられる。定家の側近には、定家そっくりの書風を身につけていた者もいたようで、一見したところ定家筆と見られる書風のなかにも、そうした

者の筆になる部分がある可能性も考えられよう。定家の筆跡の全貌の研究は、時雨亭文庫蔵『明月記』全巻の影印刊行と、本叢書中の歌集などの定家自筆本の影印刊行とあいまって、今後の重要な課題となるであろう。また、そのことは、『明月記』の浄書がどのようになされたかという、『明月記』成立の研究とも不可分であることはいうまでもない。

しかしながら、他筆を用いていても、その書写は定家の指揮監督下になされたものであろうから――そうした部分にも定家筆による抹消・訂正・追記などが存している――広義の「定家自筆」といって差し支えないし、もちろん資料的価値においてなんら劣るものでないことを強調しておきたい。（8頁）

『明月記』を「広義の「定家自筆」」として捉えることは、現在の段階としては問題を残しながらも首肯し得ることだとは思う。だが、日録的記録のままではないと考えなければならない記事も混在していることも、また事実なのである。『明月記』を同次元のなかに、一括して捉えることは、問題と困難とを伴うことのように思う。

『明月記』嘉禎元年五月二十七日の条によれば、「嵯峨の中院の障子の色紙形」の撰歌は、天智天皇以来、家隆、雅経に及ぶものであった。現存『秀歌』と『一首』の巻頭十首と巻末九十一番歌以後の歌の配列を、角川『新編　国歌大観』本で示すと次のごとくである。

百人秀歌　　天智天皇御製

一　あきのたのかりほのいほのとまをあらみわがころもでは露にぬれつつ　　持統天皇御製

二 はるすぎてなつきにけらし白妙のころもほすてふあまのかぐやま

柿本人麿

三 あしびきのやまどりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねん

山辺赤人

四 たごのうらにうちいでてみれば白妙のふじのたかねに雪はふりつつ

中納言家持

五 かささぎのわたせるはしにおくしものしろきをみればよぞ更けにける

安倍仲丸

六 あまのはらふりさけみればかすがなるみかさのやまにいでし月かも

参議篁

七 わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟

猿丸大夫

八 おく山にもみぢふみわけなくしかのこゑきくときぞ秋はかなしき

中納言行平

九 たちわかれいなばのやまのみねにおふるまつとしきかばいまかへりこん

在原業平朝臣

一〇 ちはやぶる神よもきかずたつた川からくれなゐにみづくくるとは

殷富門院大輔

九一 みせばやなをじまのあまのそでだにもぬれにぞぬれしいろはかはらず

式子内親王

九二 たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする

寂蓮法師

九三 むらさめのつゆもまだひぬ槙のはにきりたちのぼる秋のゆふぐれ

二条院讃岐

九四 わが袖はしほひにみえぬおきのいしの人こそしらねかわくまもなし

後京極摂政前太政大臣

九五 きりぎりすなくやしもよのさむしろにころもかたしきひとりかもねん

前大僧正慈円

九六 おほけなくうきよのたみにおほふかな我がたつそまにすみぞめのそで

参議雅経

九七 みよし野のやまの秋かぜ小夜更けてふるさとさむくころも打つなり

鎌倉右大臣

九八 世のなかはつねにもがもななぎさこぐあまのをぶねのつなでかなしも

正三位家隆

九九 かぜそよぐならの小川のゆふぐれはみそぎぞなつのしるしなりける

権中納言定家

一〇〇 こぬ人をまつほのうらのゆふなぎにやくやもしほの身もこがれつつ

入道前太政大臣

一〇一 はなさそふあらしのにはのゆきならでふりゆくものは我が身なりけり

百人一首

天智天皇

一 秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ

持統天皇

二 春すぎて夏きにけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山

柿本人麿

三 あし曳きの山どりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねん

山辺赤人

四 たごのうらにうち出でてみればしろたへのふじのたかねに雪はふりつつ

猿丸大夫

五 おく山にもみぢふみわけ鳴くしかのこゑきく時ぞあきはかなしき

中納言家持

六 かささぎのわたせるはしにおく霜のしろきをみれば夜ぞふけにける

安倍仲麿

七 あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

喜撰法師

八 我がいほは宮このたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり

小野小町

九 はなの色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに

蝉丸

一〇 これやこの行くもかへるも別れてはしるもしらぬもあふさかの関

後京極摂政太政大臣

九一 きりぎりす鳴くや霜よのさむしろに衣かたしきひとりかもねん

二条院讃岐

九二 わが袖はしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかわくまもなし

鎌倉右大臣

九三 よの中はつねにもがもなぎさこぐあまのを舟のつなでかなしも

参議雅経

九四 みよしのの山のあきかぜさ夜ふけて故郷さむくころもうつなり

前大僧正慈円

九五 おほけなくうき世の民におほふかな我がたつそまにすみぞめのそで
入道前太政大臣

九六 花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆく物は我が身なりけり
権中納言定家

九七 こぬ人をまつほのうらの夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ
従二位家隆

九八 風そよぐならのを川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける
後鳥羽院御製

九九 人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにものおもふ身は
順徳院御製

一〇〇 ももしきやふるき軒ばのしのぶにもなほあまりあるむかしなりけり

『明月記』に「自天智天皇以来及家隆雅経」とあるのを、漠然と時代を指しているとは読み難い。「撰集」の歌の配列を意識したものだと解すべきであろう。巻末歌が、現存『秀歌』、『一首』に合わないことは一見するごとく明かである。諸説は、この事実からも種々の論議に展開していく。『秀歌』、『一首』の「原形」ともいうべきものと解するか、それらとは全く無関係の撰歌と解するか、『秀歌』を『一首』の原形と解し、伝来する過程で定家自身または為家ら別人の手が加わったと解するか、『一首』そのものが原形であったと解するか、論議の結着はなかなか困難で、いずれを定説とするかは、にわかに決し難いことのように思われる。これに対して、巻頭歌は天智天皇の歌にはじまる。そこに、

王朝文化への定家の愛惜、憧憬、思慕の情や創造への意識を読みとろうとする立場は、ほぼ共通するものとなっている。家隆は、承久の変以後も、後鳥羽院歌壇ともいうべきものを、守り支える有力な歌人であった。そこに、定家との微妙な立場の相違が存在していた。『国史大辞典』（吉川弘文館）から引用する。

鎌倉時代前期の歌人。保元三年（一一五八）の誕生。父は権中納言光隆、母は太皇太后宮亮藤原実兼女。若いころから藤原俊成に和歌を学び、俊成の息定家らとともに詠歌に励んで、新進歌人として知られ、正治二年（一二〇〇）後鳥羽上皇が詠進させた『正治二年院初度百首和歌』にも加えられ、建仁元年（一二〇一）には和歌所寄人、ついで『新古今和歌集』撰者の一人とされ、いわゆる新古今歌壇において重きをなし、順徳天皇の時代には定家と双璧のごとく見なされていた。官途には恵まれず、侍従・上総介・宮内卿などを歴任、建保四年（一二二六）正月五日宮内卿のまま従三位に叙せられた。後鳥羽上皇の信望篤かっただけに、承久の乱以後は不遇であったが、晩年に至るまで作歌意欲は衰えなかった。嘉禎元年（一二三五）九月十日従二位に叙せられたが、翌年十二月二十三日病により出家、法名を仏性といった。晩年は摂津国天王寺に下り、嘉禎三年四月九日酉の刻、八十歳で同地に没した。大阪市天王寺区夕陽丘に塚がある。（第二巻　181頁）

家隆は、後鳥羽上皇の信望が厚かっただけに、承久の乱以後は不遇であったこと、むしろ、そういう生き方を選択せざるを得なかったこと、晩年に至るまで作歌意欲が衰えなかったこと、そういう生き方のなかには、やはり、後鳥羽上皇の厚い信望に応えようとする情念のほむらが「対後鳥羽院応答意識」となって存在していたのだと見なければならない。それに対して雅経はいったいどうであったろうか。貴重な研究文献『新古今和歌集の研究――基盤と構成――』（有吉保）を披見していないが、やはり『大辞典』はそれを踏まえての記述であろう。次のように記述されている。

鎌倉時代前期の公卿。歌鞠に秀で、飛鳥井と号した。飛鳥井流蹴鞠の祖。嘉応二年（一一七〇）、刑部卿藤原頼経

の次男として生まれた。母は大納言源顕雅女。侍従・左中将・右兵衛督などを経て、建保六年（一二一八）正月非参議従三位。父頼経は源義経に同心の科で文治五年（一一八九）伊豆に配流され、兄宗長も解官されたが、雅経は鎌倉に在って、蹴鞠を好んだ源頼家のもとで厚遇され、大江広元の女を妻とした。建久八年（一一九七）後鳥羽上皇の命によって上洛、建仁元年（一二〇一）新設された和歌所の寄人となり、元久二年（一二〇五）藤原定家や同家隆らと『新古今和歌集』を撰進した。その後も関東に下向して歌鞠の指導をした。建暦元年（一二一一）鴨長明を将軍実朝に吹挙して下向させ対面の機会をつくったのはこの雅経である。（『吾妻鏡』）。その歌才は寂蓮や定家らと並び称され、「雅経は、ことに案じかへりて歌よみしものなり、いたくたけある歌などは、むねとおほくはみえさりしかとも、手たりと見えき」（『後鳥羽院御口伝』と評された。都鄙にわたる活躍によって、飛鳥井一流が後代に歌鞠の師範家として重用される基礎を確立した。（第一巻　198頁）

雅経の立場は、歴史的に家隆ほど鮮明に記述されてはいない。しかしその閨閥、父や兄の生き方とは異なる境涯、歌鞠の師範家飛鳥井一流として重用される基礎を確立していった業績、などからすれば、家隆とは違った親幕的な生き方を、許容するものではなかったかと推定することの方が順当のように思われる。家隆、雅経は、「定家と双璧のごとく見なされていた」、「歌才は寂蓮や定家らと並び称され」、と言われているが、ただ当代を代表する二人の一流歌人という存在を超えて、公武を同列に重視しようとするある種のバランス感覚、そういう意識が、その根底に厳然として存在していたのだと見なければならないのではないか。わたしは、『明月記』の記述のなかに、そういう慎重な定家のある配慮を、読みとらなければならないだろうと考える。雅経には『明日香井和歌集』（群書類従　第一四輯）があり、「鳥羽百首」以下「後鳥羽院第二度百首」など七種に及ぶ「百首歌」、三種の「五十首歌」その他歌合の歌など多くの題詠歌が見られるが、管見に入った歌で承久三年以後の消息を伝える歌はなかった。雅経の孫に『源氏』学者としても著名

な飛鳥井雅有がある。浜口博章氏は『飛鳥井雅有日記注釈』（桜楓社　平成二年十月十日）の「解説」で、次のように記述されている。

飛鳥井雅有は『新古今和歌集』撰者のひとり藤原雅経の孫、正三位教定の息。母は越後守北条実時の女、祖母は大江広元の女である。また姉は二条為氏の室で、為世の母、雅有女は為世の息為道（為通）に嫁し、為親・為定の母となった。仁治二年（一二四一）年に生れ、正安三年（一三〇一）正月十一日、六十一歳で没した。（187頁）

雅有は持明院統の伏見院に仕えて信任厚く、一方、大覚寺統の後宇多天皇方にも女の宰相典侍が出仕しており、関東祗候として朝幕の間を連絡し、歌壇においては二条・京極両家とも親密である等、めまぐるしく変わる世相の中に、常に均衡を保つべく心掛けたようである。また、鞠の家業を継承して、仙洞、内裏、東宮に仕え、蹴鞠の書『内外三時抄』を著しているが、一方祖父雅経の家集『明日香井集』の編纂をなし、家集『隣女和歌集』『飛鳥井雅有集』（天理図書館蔵）を遺し、数多くの古典籍を書写している。鞠の道を継承し、歌人・古典研究者かつ政治家である等、まさに多芸多能の才子で、このような性格が雅有の文芸活動を実り多いものにしたと思われる。（188頁）

雅有は、祖父雅経の家集『明日香井集』を編纂するなど、その関係は、祖父と孫との関係を超えたきわめて親密なものがあった。雅有の乱世に生きるしたたかな生き方は、また祖父から学び得たものであり、そこには生きる姿として同質なる世界が存在していたようにさえ思われもする。父や兄の生き方とは違った雅経の生き方は、また、孫雅有の生き方に重なり、その反照として見ることができるのである。『明月記』の「及家隆雅経」という記事は、家隆・雅経の生き方をこのように読んでくると、従来はあまり考えられてこなかった、きわめて新しい、別の意味が定家の裏側に存在していたのではないのか、と思われてくる。『国史大辞典』（吉川弘文館）「飛鳥井雅経」の項に引く『後鳥羽院御口伝』も、従来は、承久の乱以後の成立と見る立場が定説化され、そういう考え方が比較的強く、支配的でさえあった。『日

本古典文学大辞典』（岩波書店）の岩松研吉郎氏執筆の項にも、「成立年未詳。奥書には隠岐へ遷って後に記された旨があり、本文での諸歌人への記述の様相・時相から、嘉禄（一二二五－一二二七）頃の成立かと推定される。」（第二巻643頁）と見える。承久の乱以後の成立と見る考えである。しかし、目崎徳衛氏（『百人一首の作者たち　王朝文化論への試み』角川選書　昭・62・5・20　四版）が、

院の歌論『後鳥羽院御口伝』は一名『遠島御抄』などと呼ばれ、隠岐へ随行したある上人の所持本が院の崩後に流布したという奥書もあって、従来隠岐での著作と見られていたが、近年の研究によって、むしろ承久の乱より数年前の著作とするのが有力となった（田中裕「後鳥羽院御口伝の執筆時期」）。院はこの書で定家に対して、ほとんど筆誅ともいえるほど痛烈な批判をあえてした。（243頁）

と指摘されているのに従うべきだと考える。田中裕氏は、「和泉書院研究叢書」として『後鳥羽院と定家研究』（1994・6「和泉書院　総合図書目録」27頁）を出版の予定で年内刊行の準備を進められている。

村山修一氏（人物叢書『藤原定家』吉川弘文館　平成元・十・一　新装版）は、「院政は僧界・俗界を通じ、幇間的・迎合的権勢者を多数生み出すことによって、自ら崩壊すべき素地を作りつつあった」（166頁）と捉え、「定家は権勢者をあるいは賞揚し、あるいは非難しながら、自らも渡世にはあらゆる手段を講ずるのを辞さなかった」（166頁）とされる。そして、承久の乱後の世相に生きる定家像を、「時代の反抗児であり不平家である」（246頁）と解し、「現実のきびしい世相は彼の観念的世界をいよいよとぎすましたものにした」（275頁）とする。さらに、「新勅撰前後」、定家の妖艶美は官能的なものから有心的・抒情的なものへと変わっていき、心の籠った質実な歌へと「転じていった」（324頁）と指摘される。同書は、昭和三十七年九月の第一版刊行であった。定家論としては、積み残した問題点があまりにも多過ぎるようである。しかし、その原点としてやはり再検討を加うべき、注意しなければならないいくつかの問題点も指摘され

ているように思う。谷山茂氏（『中世和歌の想念と表現』思文閣出版　1993年8月5日）は、順徳内裏和歌会（承久二年二月）で定家が詠んだ「野外柳」の題詠家「道のべの」歌が院の逆鱗にふれ、籠居を命ぜられたことについて、

詩人定家がこんな些細なことで閉門の身となるというのも、彼が西園寺公経や九条道家らの親幕派にたまたまゆかりを持っていたからでもあろう。とにかく、こういう院勘の再三の発動の陰には、独裁権力者後鳥羽院のすこしでも我意のままならぬことに対する、神経質な焦燥が感じられる。（290頁）

と指摘されている。そして、「承久の乱の序幕はこうした鎌倉方に対する院の焦燥のなかにおもむろにあげられはじめていた」とする。遠島での最晩年の心境を切々と綴った朱手印を押した『置文』には、「何かすさまじい怨念までも感じさせずにはおかない」（293頁）、院、最後の怨念の表白が見られる。と言われる。氏はさらに、「新儀非拠の達磨歌の急先鋒」が定家その人であったとし、その八十年の生涯の時期区分を五期に分けてその展開をたどられる。「清高風期」の第五期は、『新勅撰集』撰進期である。氏は、

承久の戦後における定家は、関東に深くつながるその外戚西園寺家や主家九条家の推挽によって、幸運すぎるほどの栄進をとげる。そういう定家ではあったが、今は遠い隠岐の小島にある後鳥羽院から、かつて正治・建仁ごろに受けた知遇の数々は、やはり終生忘れえぬ感激であったろう。『明月記』をひもとけば、その昔日に対する懐旧の情の切なるものが随所に見出される。また、貞永元年（一二三二）、後堀河院の命で、『新勅撰集』撰進の大任を背負わされた前後の定家の苦衷も『明月記』につぶさに書きつけられている。

『明月記』の寛喜二年（一二三〇）七月六日とか文暦元年（一二三四）八月七日の条を見ると、定家はこの勅令を受けて、「勅撰集の撰者になるのは非常にうれしい。しかし、今自分が撰べば、隠岐に流された後鳥羽院、佐渡に流された順徳院、土佐に流されている土御門院の、この三上皇のすぐれた歌はどうしても採らなければならず、採れば

北条氏の忌諱にふれるだろう。また、採らなければ世間の非難をまねく。進退これ極まった」と嘆いている。「いっそのこと自分を撰者にしてほしくなかった」とまで書いているのである。

事実『百錬抄』によると、文暦元年十一月九日に、前関白道家、関白教実の立ち合いのもとで『新勅撰集』から約百首の歌が切り出されている。除去されたのである。私の想像だが、その約百首の中に三上皇の歌があったのではなかろうか。また、俊成卿女（実は俊成の孫で定家の姪）の『越部禅尼消息』にも『新勅撰集』から七十首ほど切り出されたことを書いている。おそらく、定家は初めみずからの意志で『新勅撰集』にも三上皇の歌を相当数採ってはいたのであろう。しかし今はそれも無惨に除去されたのである。摂政・関白たちの権力で……。

晩年の定家は、その幸運な、しかし、きびしい政治的背景のゆえに、家隆らのように隠岐の小島の院との連絡をもつことができず、また『新勅撰集』にも三上皇の歌は一首ものせることが許されなかった。古典の書写とか考勘とかに黙々として沈潜することが、彼にとってのせめてものなぐさめであったろう。と同時に、文学的には、それは定家が壮年時に獲得した古典主義なるものの、相変わらぬ実践とその拡充とであった。（323頁）

と、指摘されている。谷山氏のこれらの立論は、『著作集』「目録」によれば、昭和四十二年から四十四年頃に発表されたものであるが、こういう見方がほぼ定説化した考え方になっている。この基調にあらがい、はみ出すかと思われる論議を発見することは困難であった。確かに、君臣のうるわしい絆を、美化、理想化して、『明月記』の所々を一元化して読んでいくと、こういう優等生の書いた、非のうち所のないような説明になるのだとは思う。そこには、極限にまで理想化された権化としての定家像が描出されている。だが、点と点とをつなげていっても、人間の心を表す線にはならない。――間。血気盛んな田舎者の少年が犯してしまった罪があった。薄汚れた壮年の淫らな性が、飲み屋の仲居さんにからみつくのを見かねて、とある方の名を呼び捨てにしてしまったという、傍若無人の振舞いが逆鱗に触れ、大学

院にも行けずじまいになってしまった青年が、ひたむきにひとを恋する思いをも嘲笑われ、都落ちの烙印を押された時、どんな思いを抱いて情念の火群(ほむら)のなかでその半生を生きてきたか、優等生という類の方々には、わかりにくいことだと思う。だが、四十年近い人生の流れの中でそんな事は風化され、むしろ懐かしい想い出になっていた。そればかりか、大学の学統に対して、ある恩頼さえ感じているのだが、新しく来る人達に、あらぬ情報にほほ笑みながらあらぬ入れ知恵をしているというのなら、許し難いことだと、義憤のようなものさえ感じる。一緒になって烙印を押したような類の方々が、大学の中枢を担う人達であるというのなら、わたしは、救い難い学統の宿業と恥辱のようなものを感じないではいられない。一枚の「請求書」の行方に、学統が犯したかもしれない過去の恥辱のようなものがあるとすればそれを、白日のもとにさらして見るのもよい。そういう衝動にかられないわけでもないが、それも大人げないことだ。疎外をはね退け、「わたしのようなものでも」学問をしてみたい、という思いを秘めて生きるということは、確かに苦しいし、むつかしい。困難なことには違いない。しかし、わたしは、「岩鼻やここにも一人月の客」と名のり出るような「風狂」の輩(やから)が、異端の徒として存在していることも、実は大変面白いことだし、必要なことだとも思っている。温容で飄逸でもあった武田先生から、「小田原は東京にも近いから、頑張ってみなさい」と諭すように言われて、推薦状をいただいた時のことばは、先生の厳格な学問の出発点となられた土地への思いと述懐とが込められていたようにも思う。いまでも消えることなくわたしの胸に燃え続けている。「あなたの大学は面白い大学ですね。私どもは、武田先生に一人だけご推薦をお願いしたのに、後から後から何人も他の先生の推薦状を持って見えられるので、困っていました。」と言われたことばが、何とも印象的だった。ある方が、あの先生がある大学に迎えられたことを、これが学問をなさる方のことばであろうかと耳を疑ったほど口汚く罵られた。わたしは、そのことばを学問をする方々の呪詛のように恐ろしく聞いていた。その時、別のある人を迎えられたことをなぜか興奮して喜ばれてもいた。そんな因縁のある人に、お仕えす

るようなことがもしあったとしたら、人の宿業は、やはり塞翁が馬の現世だと実感することでもあろう。

わたしは、別に事実を自分に都合のいいように、「曲げ物」にして、私小説風に仕立てているわけでもない。月末に締切りが迫ってきた本学「紀要」の原稿にと思って知恵をしぼっている。この第四章「藤原定家論への序章」が最後に残ってしまったので、書いているだけである。実は、ある人の病気見舞いと建都一二〇〇年の時代祭りの見物とをかねてやって来た、京都へのひとり旅の、宿屋の暗い電灯のもとで、この部分を書き綴っている。今度の旅は、それと、小田原時代の教え子で、万福寺の庶務部長を兼務している武内修邦師に会えれば、と思ってやって来た。氏は小田原の長興山紹太寺に帰って留守であったが、黄檗宗務本院主事塩塚浩文師や教学部長中沢元重師をはじめ、事務所の皆さんのご親切なお引き立てを忝うした。感謝の極みであった。わたしが病床を見舞ったある人の縁者である山形武一さん、井上康三さんご夫妻にも温く迎えていただいた。聖護院御殿西門前の、さる「そば処」で歓談の後、井上さんの車で宿屋まで送っていただいた。その途中、冷泉家時雨亭文庫の前を偶然にも通り過ぎることになった。井上さんからそのことを聞き、奇しき縁(えにし)に感慨無量であった。遠い昔のあの方々の怨念や呪詛、そして、わたしの燃えるような鮮烈な執念の火群は折から降りそそぐ夜の雨や定家の秘められた強烈な熱い思いにくゆる靄のなかで、すっかり洗い清められてしまった思いがする。だが、この小説めいた最後の断章のなかにも、所詮はわたくしの側に立った都合のよさ、やはり、理想化や美化がなされてもいる。それが、ないと言えば人の所業として嘘になろう。内在批評・批判、そして客観的、学問をするような心で、丁寧に文学や記録、文献を読んでいくように心懸けてはいても、読む人の人生の中で、その経験を通して読んでしまっているという一面が存在することの宿命から、やはり、人はのがれることはできまいと思う。従来から指摘されてきたような事のほかにも、『明月記』には、いろいろな形での――書かれたり、書かれなかったりした定家の心配り、心遣いが残っているはずである。学統を継承していくというような、冷飯などには無縁であったような

人々は、やはり、そういう点を読み落としたり、論として積み残してしまったりしている、そういう見えない一面があるのではないだろうか、とも思う。「藤原定家論」への序章ではなく、それに本格的に取り組んでみたい、という意地のような思いが痛切にわたしの胸にうずくのを感じる。

頓阿の『井蛙抄』以来、最近の研究業績をも踏まえた『百人一首』の成立論についての研究史的な要約と問題点の指摘は、徳原茂実氏（「百人一首成立論の変遷」和歌文学論集　9　『百人一首と秀歌撰』風間書房　平成6年1月31日所収）によってなされている。その要約と展望とはきわめて適切であり、従うべきものだと考える。『百人一首』の成立を『明月記』の嵯峨中院山荘の色紙形の作成にすべての出発点を置こうとすると、つじつまの合わない矛盾が出て来る。定家の撰んだ秀歌撰を私的な楽しみのためだとする考え方にも矛盾がある。「新勅撰集不本意説」からその成立を考えようとする類も、やはり、氏が言われるように、児戯に類する所業であろう。さりとて、氏が終章で指摘されるように、『百人一首』は「新勅撰集」編纂の指針とすべく作られた」（191頁）、「「新勅撰集」の歌の採否を決定するための一つの試金石でもあった」（192頁）というように捉えてしまっては、これまた、児戯に類する所業と言わざるを得ないのではないか。人文科学という学問の真理は、錯誤に錯誤を重ね、せめぎ会い、研ぎ合いながら何世代にもかけて歴史の篩にかけているうちに、珠玉に輝いて生まれてくるものでもあろう。やはり、錯誤を恐れてはいけないと思う。徳原茂実氏や辻勝美氏が指摘されるように、定家の「秀歌撰」や『新勅撰集』の撰歌意識と『百人一首』の撰歌意識とは、深く関わる世界がある。特に晩年の定家の好みが『新勅撰集』と『一首』とには重なっている、同質の世界となってあらわれている、と見られる。それは、「新勅撰集不本意説」や「新勅撰集撰進指針説」などの論拠となったりしているものではあるが、やはり、従い難い論点だと考える。辻勝美氏は、「場の問題も含めて一首一首の撰定意識を究明して

行くことが、作品としての『百人一首』の成立の問題を考察する上でもなお重要な課題である」（『和歌文学論集　9』142頁）と指摘されている。そして、そういう論点を踏まえた研究も数多く見られる。だが、現存する『秀歌』や『一首』を定家の所為と見るか、定家の意志を踏えた後人の手に成ると見るか、後人の意志にもとずく所為と見るか、というような問題と深く関わる問題でもあるだけに、やはり、複雑な様相をもっている。

現存本『一首』が、後鳥羽、順徳両院の御製の歌を巻末に持っていることと、『新勅撰集』が、両院とその周辺の近侍達の歌を欠く「宇治川集」であることとの間には、形態的には逆の関係が存在している。そして、従来そこに怨霊に対する慰撫鎮魂とか、院への応答意識とか、そういうなかに定家の後鳥羽院に対する思慕、追慕の念を読みとろうとしてきた。だが、「人もをし」「百敷や」の両院の巻末歌は目崎徳衛氏（『百人一首の作者たち』角川書店　昭・62年5月20日）が指摘されるように、「両院の多くの作品のなかでも最も鎌倉幕府を刺戟しそうな、危険な歌意」（248頁）を持っている。それは、きわめて強い政治意識に貫かれた問題歌であって、『一首』の歌群とは非常に異なる撰歌意識を持っている。それが、きわめて強烈な意図的、意識的な所為から成されたものであることはもっと注意されなければならないことである。事はただ、「宇治川集」の恥辱を晴すというような、児戯に等しいような単純明快なものではあるまい。怨霊に対する慰撫鎮魂とか、思慕や追慕の応答とか、そういう類のやさしさ、あるいはなまやさしい思慕の情に根ざすものではなく、それをはるかに超えた、もっとどろっと濁った、どす黒い感情がうず潮となり、潮騒となっているような暗黒さがある。ただ両院の歌を巻末に並置した、というようなものではなかったはずである。

『新勅撰集』撰集の勅を奉じたのは貞永元年（1232年）。同年十月四日譲位、十月二日仮名序代と二十巻部目録奏覧。天福二年（1234年）進覧、八月六日院崩御、翌日草案を焼却、撰集を廃した。『百練抄』には、九条道家が進覧本を探し出し、摂政教実と監臨、百首を切り捨て、新たに若干名の歌を切り入れさせたと記述されている。切り捨てたのは後鳥

羽院をはじめとする宮方関係者の歌。切り入れたのは幕府関係者の歌かと推測される。文暦二年（1235年）三月十二日道家に進入、事業完了。以上は、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）からの摘記である。ところが『百練抄』の編者は未詳。成立にも問題はあるが、亀山天皇在位中とすると1259年から1274年ということになる。『新勅撰集』撰集事業から逆算すると、『百練抄』成立まで最少二十四年、最大三十九年、平均三十一年の歳月の経過が見られる。風雲急な動乱期のなかで、『百練抄』の歴史書としての記述を、従来のように『明月記』と同列に取り扱い資料とすることには、やはり三十年の歳月というのは問題があるのではないか。それを、そのままに信頼することは、『百練抄』の成立上の問題とも関わる複雑な問題が、また存在するように思われる。『新勅撰集』の切り捨て、『一首』の巻末両院御製歌の問題は、定家と後鳥羽院との感情のもつれ、執念、怨念ともいうべきものを直視すると、従来の視点とは、また異なる新たな問題が提起されるように思う。和歌への熱い情熱の衰退と古典籍の書写への情熱とは、もちろん体力の衰え、浪漫的心情の喪失という従来から指摘されてきた問題もあるには違いないが、後鳥羽院をめぐる家隆的世界と雅経的世界の両極のなかで、極限まで苦悩する定家の現実の姿が深く関わっていた、と解さなければならないのである。後鳥羽院を抹消して生きることは、また、自己の抹消をも意味することを、定家自身、みずから痛いほど知り抜いていたのである。それは健康上の理由とか、甘美な浪漫的心情の終焉というような類のものではなかったのである。

五、『源氏物語』にまなぶ――文学の「こころ」にふれつつ――

I

穂積以貫という人がいた。元禄五年（一六九二）―明和六年（一七六九）播州姫路の人。父の死後大阪に出て、伊藤東涯に師事。「韻鏡」算学に精通し、『下学算法』を著わして名をあげた。近松と親交があり『難波土産』第一、発端の近松の芸術論は、以貫が、近松から親しく聞いたもの。「虚実皮膜」の間に芸術の真実があるという虚構（仮構）によるリアリティの表現という、現代風な芸術論を展開している。しかし、紫式部は既に『源氏』の螢の巻で同じように、虚構によるリアリティの表現という物語論を展開していたのである。

文学作品は、実生活では直接的に経験できないことがらを、間接的に経験できるという広い領域を持っている。最近一部の若い人達の間には、直接的に体験したことがらでないと信じないという、ことばや理性を思考からはずしてしまった経験、体験を重視する考え方がある。文学作品は用無しという人達である。それでは困る。文学の持つ浄化作用を通して、常に自分を成長させていかなければならない。それが文学というものだと思う。

文学の一面には「慰み」というものがつきまとっている。特に日本文学にはそういう傾向が強い。歌人吉田兼好が、中世的な自由を求めて机に向った時、そこに「随筆」文学がつくり出された。「つれづれ草」である。「つれづれ」は、文学作品や芸術作品の創造、享受の場と深く関わる意識を持っていた。わたしたちは、次のような記述のなかに、その一端を知ることができると考えている。

(1)つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ、手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまざまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり、(源氏・須磨・小学館『全集』191頁)

(2)この草紙は目に見え心に思ふ事の、よしなくあやしきも、つれづれなるをりに、人やは見むとすると思ひて書きあつめたるを、あいなく人のため便なき言ひ過ごししつべき所々あれば、いとよく隠しおきたりと思ひしを、涙せきあへずこそなりにけれ。(枕草子・小学館『全集』465頁)

(3)もともと心ふかからぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきことも目とどまりて、御返、今日のまの心にかへて思ひやれながめつつのみすぐす心を(和泉式部日記・小学館『全集』87頁)

(4)あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。(更科日記・『全集』283頁)

以下『源氏物語「本文と享受の方法」』(和泉書院一九九二年十二月二十五日)所収「つれづれの語をめぐる論」を再論して語ることにする。

「つれづれと」「つれづれの」の語を句にもつ『古今和歌六帖』(角川書店『新編　国歌大観　第二巻』)の歌には、次の八首がある。

六二　つれづれと花を見つつぞくらしつるけふをし春の限と思へば

四六二　つれづれと袖のみひちて春の日のながめはこひのつまにぞ有りける

一三一〇　つれづれと年ふるやどはむまたまのよもひもながくなりぬべらなり

三五五八　つれづれとながめせしまに夏ぐさのあはれややどにしげりあひにけり

四五八　つれづれのながめにまさる涙河そでのみひちてあふよしもなみ

四六九　つれづれのながめにわれはなりぬめりつれなき空をふる心ちして

八二七　つれづれのはるひにまよふかげろふのかげ見しよりぞ人は恋しき

二〇七八　つれづれのながめにまさるなみだ川そでのみひちてあふよしもなし

「つれづれに」の形で次の一首が見える。

六三三　つれづれになにかなみだのながるらんひとなんわれを思ふともなく

四五八、二〇七八番歌は藤原敏行の歌であるが、第五句に少し本文の異同がある。『古今集』恋歌三に「なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける　としゆきの朝臣」（岩波・大系　224頁）として、下の句が「袖の　みぬれてあふよしもなし」とある。『伊勢物語』第百七段に、

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案をかきて、かかせてやりけり。めでまどひにけり。さて男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ

といへければ、男いといたうめでて、いままで、巻きて文箱に入れてありとなむいふなる。……（小学館・『全集』

244頁）

とある。『古今集』『古今和歌六帖』「なみだがは」（二〇七八）には「あさみこそ」の業平の返歌が『伊勢物語』と同じように続く。『古今和歌六帖』四五八番歌は「あめ」の部に、「としゆき」として出している。このように『古今』『伊勢』『六帖』二〇七八番歌は、一連の贈答歌として扱われている。『伊勢』の百七段は、更に二人が結ばれて後、業平の「かずかずに」の代作歌に感動した敏行が、「みのもかさも取りあへで、しとどにぬれてまどひ来にけり。」と後日譚を語る。それは一段に見られるような「いちはやきみやび」の世界でもあった。いずれにしても、ともに、業平の歌が恋の世界で果たした功徳がどれほど大きかったかを語っている。『伊勢』百七段の前半の贈答歌は「涙川」（「袖」ひつ）を重要語と捉えている。『六帖』が「なみだがは」の部類に入れたのも理解できる。しかし、四五八番歌を「あめ」の部類に入れたのは、掛詞「ながめ・（もの思いにふける）（長雨）」からであり、「つれづれのながめ」の語が、またこの歌の重要な語句であるからにほかならない。業平の秀歌なるものを誘発した敏行の歌も、また秀歌であり、後半の敏行も「いちはやきみやび」の心をもつ、情趣を解する風流人であった。「つれづれと」「つれづれの」の語を句にもつ『六帖』の歌が、八首も見られる事実は、やはりこの語句が詠歌の一つの類型的な発想をつくり出していったからでもある。

これらの語句を和歌にもつものとして管見にはいったものに『大和物語』『蜻蛉日記』がある。それら、日記、物語の類に用いられている用例を少しく検討する。検索は、『国歌大観』第五巻による。

『大和』第六十五段「つひに行く道」に、病もいとおもりて、その日になりにけり。中将のもとより、

つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮らしてむとや

とておこせたり。「よはくなりにたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返りごとなどもせむとするほどに、「死にけ

り」と聞きて、いといみじかりけり。（小学館・『全集』414頁）

とある。清和天皇の御時、帝が出家されてから、弁の御息所のもとに業平が人目を忍んで通っていた。病重く臨終の日に業平が御息所に送った歌で、この歌に続いて「つひにゆく」の辞世の歌を詠んで息絶える。定家本『伊勢』の終章、百二十五段に「むかし、男わずらひて、心地死ぬべくおぼえければ」として、辞世の歌を伝えている。「あなたからのお手紙もいただけず、慰められることもなく、臨終の日を迎えてしまった。しみじみと寂しく時が過ぎていくなかで、ますます心つらく思い、悲しんでいる。」というのであるが、やはり業平の臨終に関わる重要な章段の中で、「つれづれと」の歌が詠まれている。

『伊勢』と『大和』は、確かに歌物語としては、内容的に重要な章段の中で「つれづれ」の語が用いられている。だが、注意すべきことは、それらが表現する世界を異にすることである。『伊勢』は「しとどにぬれてまとひ来にけり。」とある。それは巻頭初冠の段に、「心地まとひ」「狩衣の裾を切りて歌を書きてやる」「いちはやきみやび」にほかならなかった。第百七段は、業平の歌が、恋の世界で果した大いなる功徳を語るとともに、情趣を深く解する風流人の「いちはやきみやび」をも語っていたのである。ところが『大和』は、臨終の日を迎えたつれづれの時の中で詠まれた歌である。病重く、すっかり弱ってしまっているが、弁の御息所への思いを、いよいよつのらせていく。そこには、恋に苦悩する業平像、絶ち難い絆と煩悩とにさすらう、恋に生きる業平像が描かれている。『伊勢』の、あの明るい、はじけるような色調は、そこには見られない。そして、「つれづれ」の語を歌にもつ日記や物語の章段は、それぞれこの二つの異なる世界を惜景に、自らの世界を作り出していったように思われる。

次に『蜻蛉』上巻、応和二年、章明親王との贈答歌に、

六月ばかりかけて、雨いたう降りたるに、たれも降りこめられたるなるべし。こなたには、あやしきところなれば、

漏り濡るる騒ぎをするに、かくのたまへるぞ、いとどものぐるほしき。

つれづれのながめのうちにそそくらむことのすぢこそをかしかりけれ

御返り

いづこにもながめのそそくころなれば世にふる人はのどけからじを（小学館・『全集』159頁）

とある。兼家とともに、醍醐天皇の皇子、兵部卿宮章明親王と風流韻事に耽る交歓の一時は、「明るさが認められる」（市古貞次編『日本文学全史　中古』学燈社　174頁）部分として、この日記の主題や本質とは、かなり違った異質の章段と見られてきた。木村正中氏は、

思うに、明るい素材の残存だとすれば、それは『蜻蛉日記』の作品形成のまさしく苦闘の跡といえるだろう。またこれらの明るい記事が兼家に対する執着を表すならば、それは喪われたものの回復の希求にほかなるまい。あるいは、構造論的に、それ自体としては明るく幸福な記事も、『蜻蛉日記』の中に位置づけられると、逆にその幸福がいかにもろく非恒常的なものであったかが照らし出され、彼女の人生の根底にあるはかなさが立体化されてくる、というふうにも捉えられる（前掲書　175頁）

とされ「いずれにせよ、事実と対決し、事実を純化し、事実を内在化しながら、作品の世界に真実の人生を再現しようとするところに」『蜻蛉』の本質、主題があるとされる。ところが、古賀典子氏（「蜻蛉日記上巻の研究と解釈」有精堂『一冊の講座　蜻蛉日記』）は、「明るく幸福な記事の間合いには、例によって、秋冬はかなう過ぎぬ　と主題に沿って強いて挿入したと思われる文章で軌道修正がなされたり、年かへりてなでふこともなし。人の心のことなるときはよろづおいらかにぞありける。「年が改って特別なこともなく、兼家がいつもと違って優しい時はすべてが平穏でした」だから、この日記の方もついに主題から逸脱してしまいまして、と、弁解している趣きの文が入れられ

たりしていることを忘れてはならないだろう」（62頁）と指摘される。この二つの考えのなかには、事実の認識においてあい入れない面も存在する。軌道修正や弁解の語句に作者の意図をより強く読み取るか、明るく幸福な記述の中に作者の意図をより強く読みとるかという遥れの問題ではあるが、恋の思いを揺曳させる風流韻事に、『古今』六一・七、六一八番歌、『伊勢』百七段、『六帖』二〇七八、一〇七九番歌など、一連の贈答歌をふまえ、それを重ねているように思われる。話型の構想力、主題化というような研究的立場からは見落としがちではあるが、ある類似する語句や語誌を民俗信仰を基層として対偶的に物語を構成、主題化していく物語の方法を読みとることや、作者の意図や謎を読みといていくことも、物語研究の一つの方法であることを知らなければならない。それは、物語の享受の方法であり、物語はそうした享受にたえ得る作品として語られ、書かれてきたからでもあった。『伊勢』百七段を借景に章明親王と『蜻蛉』の作者は風流韻事に耽り、その物語を享受しながら、自らも演技していたのだと考えなければならない。

次に『和泉式部日記』小学館・『全集』「〔十八〕宮邸入り前の期間――愛の情景」を引用する。

心のどかに御物語起き臥し聞こえて、つれづれもまぎるれば、参りなまほしきに、御物忌過ぎぬれば、例の所に帰りて、今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられて、わりなくおぼゆればきこゆ。

女 つれづれと今日数ふれば年月の昨日ぞものは思はざりける

御覧じて、あはれとおぼしめて、宮「ここにも」とて、

宮 思ふことなくて過ぎにし一昨日と昨日と今日になるよしもがな（137頁）

この部分が、「宮邸入り」という和泉式部の決定的な生き方を決意する情景であり、きわめて重要な章段であることは、説明を加えるまでもない。そして『蜻蛉』と同じように、『伊勢』百七段を借景に、恋の情趣の世界にひたり、

物語の女主人公となって、愛の情景に耽溺し、その物語を享受していたのではないかと考えられる。

『源氏物語』には、明石、幻、浮舟の三帖に、これらの語句を和歌にもつ章段が存在する。

入道「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを

まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、推しはからせたまへ」と聞こゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず。源氏「されど浦なれたまへらむ人は」とて、

源氏旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず

とうち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、いふよしなき御けはひなる。（小学館・『全集』明石　237頁）

いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに、ほれぼれしくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。蜩の声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを独りのみ見たまふは、げにぞかひなかりける。

源氏つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな

蛍のいと多う飛びかうも、源氏「夕殿に蛍飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

源氏夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり（小学館・『全集』幻　529頁）

浮舟かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや

まじりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。さりとも、恋しと思ふらむかし、と思しやるにも、もの思ひてゐたらむさまのみ面影に見えたまふ。

まめ人はのどかに見たまひつつ、あはれ、いかにながむらむ、と思ひやりて、いと恋し。

浮舟つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて

とあるを、うちも置かず見たまふ。（小学館・『全集』浮舟　153頁）

明石の巻は、入道の身を捨てての多年の祈願が、実現へと大きく転換していくきわめて重要な章段である。「さいわひ」人といわれる明石の御方の運命は、入道の多年に亘る仏道への帰依と住吉の神の導きとによって開かれていく。光源氏の側からは、貴種流離譚の話型をふまえながら、物語がつむぎ出されていく。「うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず」『全集』は、「やはり品格がにじみ出ている」とする。それは、ある血筋の尊さからくる風格がほのかに見えていた、というのである。入道は、変り者ではあるが、なかなかの風流人であり、琵琶と箏の名手でもあった。『源氏』全歌数七百九十五首のなかに、「つれづれ」の語をもつ歌は三首であるが、明石の巻の章段は、『伊勢』百七段と重ねること、それを借景に読むことによって、明石入道の風流人としての一面をきわ立たせることができる。やはり物語の作者は、この語を通して、『伊勢』を下に敷きながら、入道を風流人として見事に造形していったのだと思われる。

幻の巻は、光源氏五十二歳の正月から十二月まで、現世に生きる最後の姿が描かれている。次に中世以来巻名だけを残す「雲隠」が置かれている。こういう物語の舞台設定は、既に『大和』の、業平臨終の百六十五段を連想させていく。野村精一氏（「源氏物語作中歌論（一）」『源氏物語の思想と表現　研究と資料』古代文学論叢第十一輯　武蔵野書院）は、幻の巻の光源氏の全歌十九首を紫上追慕を主題とする挽歌群として捉え、その構造を、「源氏と紫上の共有した〝時間〟のすべてに立ちあうこと」（261頁）になるものと解された。第九首目の「つれづれと我がなきくらす」姿に、業平臨終の日の歌「つれづれといとど心のわびしきに」を重ね、それを借景に解することによって、亡き紫上

への思いをいよいよつのらせていく。第十首目の、

夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

の歌が詠まれていく心情を、きわめて自然の心の流露として理解することができる。そこには、恋に苦悩する光源氏像――絶ち難い絆と煩悩とにさすらう、恋に生きる光源氏像が、『大和』の業平像に重ねられ、主人公の死を暗示するものとして語られている。物語享受のたのしさを、そういう高い次元の知的な「遊び」、いわば、知的な離れ技を通して読者に読ませていこうとしている。そして、それは『大和』の一つの物語享受の方法でもあった。光源氏の晩年は、『伊勢』や『大和』の業平像の晩年を惜景に、それに重ねながら読まなければならないことを、『源氏』の作者は、「つれづれと」の歌のなかに、謎のように秘め、隠していたのである。そのように解することによって、幻の巻巻末の描写と完全に照応する意味を読んでいくことができる。そういう作者の意図を探りながら物語をよんでいく「たのしさ」は、作家の手を離れた作品が大量に印刷、配布され、一人歩きしてしまう現代のメカニズムの中で育って来た研究者には、享受できにくくなっていることのように思う。物語は、「場」を考えなければ理解できない文学だと思う。それは、「座」とか、「型」とかいうような言葉を連想させていく、そんな意味をもっている。このように考えてくると、幻の巻の光源氏像は、『大和』の業平像を重ねることによって、見事に造形されていることの意味がわかってくる。

明石の巻、幻の巻の「つれづれと」の語をもつ二首の歌のなかに、それぞれ『伊勢』と『大和』の世界を借景とする見事な物語の造形を享受してきたのであるが、三首目の浮舟の巻に至って、その妙なる造形に眩惑される思いがする。光源氏は、事定まれる中にも、何か一筋の風雅の趣を添えることに腐心した。それは、当時の女性たちの教養、学問を超えた有識故実、史書の類にもきわめて造詣の深かった物語作者の、生き方とも深く関わる発想のようにも思

われる。浮舟の巻の歌が、『伊勢』百七段の「つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし」「かづかづに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまさる」の歌を踏えていることは、小学館『全集』一五三頁の頭注を引くまでもない。だが既に「つれづれ」の語をもつ歌を、二つの異なる類型的発想をもつものとして捉え、享受すべきことを論述してきた。『全集』のような注釈書の類に従えば、それは、やはり『伊勢』の世界の伝統を承け継ぐものと解すべきもののように見える。しかし、浮舟物語は、浮舟が既に死を決意する物語へと大きく展開していく。「うちも置かず見たまふ」(153頁)を『全集』頭注は「薫は歌のできばえに満足するが、その苦しい心は察していない」とする。総角の巻の大君臨終の物語でも、やはり薫は大君の心情を理解できず、その真情を垣間見ることさえ出来ないままに、その周縁をさすらう「すき人」に過ぎなかった。浮舟の心情や真情を理解し、愛することにおいてもそれは一般であり、薫は、そういう意味では錯誤の人であった。それは、登場人物の意識の枠外、次元の外でなされている。そして、そこには宗教的な救済の世界を渇仰しながらも、救われ得ない薫像の造形が見られる。そして、それは、八宮に対しても同様であった。それとは対蹠的に、大君の死後の顔の安らぎと美しさ、浮舟の出家後のある一つの主体的、自律的な生き方のなかには、女人であるがゆえの罪障の世界は見られない。

浮舟の巻の「つれづれと」の歌は、『伊勢』と『大和』の、二つの異なる類型的発想を融合し、浮舟の死への思いを暗示させ、あいよることのできない孤独な魂のさすらいを、逆説的に詠いあげていったのである。そういう意味では、やはり浮舟の巻の「つれづれと」の歌による造形は、実にみごとであるといわざるを得ない。

そこには、匂宮も薫も、浮舟の心情をもはや理解することができずに、歌さえ唱和を拒絶する独白歌の世界が展開している。

Ⅱ

紫式部は、歌人として中古三十六歌仙の一人であり、勅撰集に五十八首、家集に百二十三首など多くの歌を残している。和泉式部もやはり中古三十六歌仙の一人であるが、勅撰集には二百三十八首、紫式部の四倍以上の歌が、入集している。特に、『後拾遺集』には六十七首と驚くべき多数の歌が入集しているのに、紫式部は数首に過ぎない。和泉式部は超一流の女流歌人として、第一人者である。紫式部は入集歌数からすればどう見ても二流、三流の歌人に過ぎなかった。だが『紫式部日記』に見える「口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。はづかしげの歌よみやとはおぼえはべらず」（小学館『全集』237頁）という評語はその前に見える「ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそはべらざらめ」と表裏をなしていると考えられる。和泉式部は古歌の知識や歌の理論などから見ると、本格的な歌人とは言えず、口にまかせて詠む即興的な歌に興趣のある歌を作る歌人だという。これについては既に別稿（『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院　111頁～115頁）で指摘したことがある。『日記』に見える「人の詠みたらむ歌、難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ」という和泉式部への評語は、やはり『源氏』の玉鬘の巻に見られる和歌論と深く関わるものであり、それに対応しているものだと考えなければならないのではないか。帚木の巻の女性論と螢の巻の物語論とに隠れてしまって、玉鬘の巻の和歌論は、従来あまり検討が加えられてこなかったように思う。それに、『日記』のこの部分の解釈は、やはり多くの問題を残している。前稿では、この二つの部分が、深く関わり、対応するものだという論点まではよめないでいたが、紫式部一流のアイロニーとパラドックスとが謎のように隠されていたのだ。前稿では、次のように指摘した。

玉鬘の巻末は、未摘花の返歌にからませた光源氏の歌論であるが、こういう視座に立って再検討を加える必要があ

るように思われる。「もとより後れた方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりかかば」（『全集』(3) 132頁）は、『湖月抄』傍注に「源卑下の詞歌の道に不堪のよし也」とある。新典社『影印校注古典叢書　玉鬘　初音』（小山利彦）は、「不得手な和歌の才のことなどで、なおさら堅苦しいと源氏は謙遜している」（126頁）と『湖月抄』をうける。ところが、『全集』は「謙遜というよりは、道化であろう」（132頁）とし、この前後の文意を、「以下、源氏の口をかりて作者の自由な詠歌の心構えが述べられている。形式主義の固陋な作法書やその遵奉者を批判する言葉」（132頁）「ここでの性格づけは、蓬生巻の哀れぶかさ、けなげさは影を消して、未摘花巻と同様の愚かしさが著しい。波乱に富んだこの巻は、こうして喜劇的な幕切れとなる。」（133頁）とその鳥滸ぶりを注記する。『大系』は語釈に徹する。『評釈』（玉上）は、

父宮の書きのこされた歌学書の類を読んで、ひたすらその内容を守ることに終始している。自分の感情を主張しようとするつもりはない。ただ、与えられた条件をそのまま受け入れる、というのがこの方の処世の態度なのである。（第五巻　148頁）

とし「保守的な歌よみをも非難している」と指摘する。この前後の部分には、『玉の小櫛』に、「此所、さだかに聞えぬ語也、うつしあやまりなどあるにや」、「此詞、いかにいへるにか」（『本居宣長全集』第四巻　筑摩書房　433頁）などの注記があるように、確かに文意のとりにくい語句が存在する。一語一語に亘る語釈は省略せざるを得ないが、『全集』のように、徹底的な戯画化、鳥滸物語化と考えていくかどうかは、既に引用した『全集』「(3) 132頁」の本文の解釈に深く関わる問題である。

だが、拾遺和歌集から後拾遺和歌集に至る、ほぼ八十年間に亘る勅撰和歌集空白期のもつ史的意味は、また、きわめて大きいものがあった。『後拾遺』は、平田喜信氏「後拾遺和歌集」（「国文学」62年4月号　学燈社）が指摘され

るように、女流文学の最盛期を掬い取り、三代集における女歌とは異る「ひとへにをかしき風体」という、新しい女歌の世界を拓いたものである。そして、中世和歌へと向う屈折点をなすに至っている。それは、和歌史の転換期に位置するこの集の立場を鮮明にしている。玉鬘巻末の歌論は、こういう風潮のなかでつくりあげられているが、和歌の「髄脳」というような、形式的、保守的な歌学の世界の規制を否定し、それを離れて自由な詠歌の心構えを主張したものだと捉えていくのは、やはり一面的で、片寄り過ぎた理解に過ぎないといえば、言い過ぎになるだろうか。源氏物語の作者は、こういう発想には不慣れであったように思う。だから、

歌に対する知識がいくら豊富でも、歌物語や歌枕のたぐいにいくら精通していても、それによってその人の歌の傾向がそんなに変わるものではない。むしろ髄脳の言う歌の病いなどを避けようとするあまり、いよいよ歌らしさから離れてゆく、というのが源氏の批判の要点である。(第五巻　148頁)

というような『花鳥余情』の説をうける『評釈』の見解にも従い難い。やはり、それらにとらわれ、墨守することへの反語であり、風刺であった。意見や個性を胸奥に秘め、かどかどしからず、おっとりと取りつくろう女性の生き方に、男の理想を夢見る見方は、そういう立場に最も自然につながっていく。歌学書の類にとらわれ、それを墨守するのではなく、そこに新しい酒を盛りこんでいく、主体的な詠歌の営みの必要性を説いているのではないか。紫の上が、「見ぬ人、はた、心ことにこそは遠かりけれ」と巻末で語るのに対して、「姫君の御学問に、いと用なからん」と光源氏が答えているのは、全くそれが不用であると解すべきではないのではないか。かたくなに一つの立場にとらわれ、かえってそれに安住し、主体的で個性的な詠歌の営みを失っていく、そういう類の人間になっていってしまうことへの警鐘としての否定的意味があったのではないだろうか。「言の葉つづき、たよりある心地すべかめり」「詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるべけれ」という光源氏の詞は、やはり逆説なのであった。「よく案内知りたまへる人の口

つきにては、目馴れてこそあれ」は、そういう逆説的世界から領導されていったものと考えることによって、一つの意味をもつものとしてやはり生きてくる。このように、「ひとへにをかしき風体」という、新しい女歌の世界は、「髄脳」的世界に真向から対立し、対決するなかからつくり出されてきたものではなかった。

和泉式部は、家集の中だけでも千五百余首を残す多作の歌人であるが、平田氏によれば、『後拾遺』の入集歌六十七首中、二十首は「百首歌」からの選入であり、それは「現存家集の中でも比較的生活詠の匂いの希薄な、一種題詠的な秀歌が集中している部分」(102頁)であるといわれる。和泉式部の作風といわれているものからは少しはずれる部分もないのではないが、多作の歌群の中には、また、高い次元の美意識によって形象された歌の世界も存在する。だが、平田氏が指摘されるように、「その選歌の方法は、資料により、歌人によりかなり恣意的であった可能性も同時に否定することはできない」(103頁)という点も見られる。玉髪巻末の歌論をこのように読んでくると、和泉式部に対する『紫式部日記』の記述には、一流の歌人に対する分のないあがきとか、歌合の入選に洩れた恨み辛みとかいう面だけでなく、詠歌の方法、態度に対する異質の対立する認識――歌論が介在していたからではなかったか、と思われてくる。女性論と物語論という論議に、そのかげを失ってしまってはいるが、やはり紫式部は、明確な「歌論」をもった歌人として、歌物語的世界に、物語の視座を据え、『源氏物語』を語っていこうともしている。帚木の巻には、歌物り的発想をもとに、つくり出されていった短編的な歌物語的世界の集成、再編成が、既になされている。

(『源氏物語「本文と享受」の方法』　和泉書院　1992・12・25　115頁)

『日記』のなかで、消息文のように見せかけて清少納言とそれに次いで和泉式部とに、集中的に鋭い批判をあびせかけている。そして、「日本紀の局」に対する「草の庵」の女、帚木の巻の「木枯の浮気」の女、というように、清少納言と和泉式部を引き込んだ物語を紡ぎ出していく。紫式部の底知れぬ意地と気迫とが、何か火むらのように、情念となっ

て燃えあがっている姿を、垣間見る思いがする。作家精神を、あれほどまでにつきつめ、追求の手をゆるめようとしなかった、紫式部の情念と孤独とはいったい何であったのか。それを読み解いていくことが『源氏』に「まなぶ」ことになるのだと思う。わたしは、誇り高い「歌人」、「すき者」を装う物語作者の生き方を、そこに見るような思いがする。

「面影」「心ときめき」「顕証」などの語をめぐって、「ことば」を操る術に秀でた紫式部の和歌的修辞、技法は『拾遺』から、『後拾遺』に至るほぼ八十年間に亘る勅撰和歌集空白期の和歌史を見据え、和泉式部的歌風に揺れる時代の風潮に対する紫式部の、確乎たる批評の精神から形成されていったものだと考えられる。

未摘花の歌学は、父常陸親王から学び得た一時代前のもの、六歌仙時代好みの「唐衣」の歌を得意としていた。だが、玉鬘の巻の歌論を、こんな風に読んでくると、和泉式部の歌と両極を成すもので、紫式部の和歌論のありようは、未摘花、和泉式部の両極の間に存在した。あるいは、その両極を超える次元のなかに存在していたと見ることができる。玉鬘の巻で、大夫の監が「和歌」を「詠み」継ぐことができず、娘達に「詠ますれど」「ものもおぼえず」恐れたのも、「言う」歌へのアイロニーなのではなかったか。こう読んでくると、紫式部の野望がいかに遠大であり、したたかであったかがわかる。確かに、山本利達氏（新潮古典集成『紫式部日記　紫式部集』）が指摘されているように「当時は『古今集』以来の知的に趣向をこらした歌が尊ばれていた」、紫式部は「伝統的な歌をよしとする立場から」、和泉式部の「感情を素直に歌う新しい歌風」（89頁）を批評したものであったし、萩谷朴氏（『紫式部日記全注釈　下』角川書店）が指摘されるように、「即興多作の技巧派歌人」（231頁）であることを見抜いていたこと、「後十五番歌合」の入選に洩れて著しくプライドを傷つけられたことなどが、和泉式部に対する批判の基層となっているという点はあろう。だが、最初から負け戦をいどんで、負け犬になることを仕掛けるような愚は、この人に限って間違ってもするはずがない。『後拾遺』入集歌六十七首、娘小式部をめぐる「大江山」の歌の『十訓抄』の説話などからもうかがうことができる和

泉式部は、歌人として何びとの追随をも許さぬ偉大で巨大な存在であったに違いない。しかし、一つの伝統的歌論に立ち、歌語やある種の語彙をしたたかに操る紫式部の歌人としての自負と誇りとが、強烈に全面に押し出されているのではないだろうか。やはり、従来の「読み」は適切ではなかったように思う。紫式部の「ことば」を操る技法は、歌学を基層とする和歌的修辞であり『古今和歌六帖』などに見られる類別、題詠によるアプローチなのである。わたしは、それを「つれづれ」の語のなかに見た。そして、さらに「面影」「心ときめき」「顕証」などの語のなかに見ようとした。『源氏物語「本文と享受」の方法』(和泉書院)第三章、第五章は、そういう新しい「源氏よみ」への試みであった。そしてある程度の成果をあげ得たと考えている。大修館の『日本歌語辞典』などは、こういう研究に新たな一頁を画する一資料となるだろう。

『源氏』は『史記』を「まねび」、虚構による真実性の表現という文学の方法を確立して、「歴史」を超えようとした。『伊勢』を骨格にして、いわば「雨夜の女」歌物語と「初(若)草の女」歌物語という、「列伝」的物語を横に紡ぎ出すように構成されている。そして「長恨歌」を下に敷きながら、「本紀」的物語を縦に紡ぎ出す。光源氏が準太上天皇に任じられた叙述の背景には少なくともその一端に『史記』の「項羽本紀」の扱いや、『北野天神縁起』(岩波書店『思想大系　寺社縁紀』160頁)に見られるような、延喜の聖帝が地獄の鉄窟苦所に落ちた第一、第二の「父」への「最重の犯罪」を準拠として揺曳しながら、意識のなかに存在していたのではなかったか。従来の考証や指摘とともにわたしは、やはり、そのように仏教や漢学との関連のなかに捉え直してみなければならないのではないかと考える。光源氏の運命をひらいていく須磨の巻々末の激烈な雷雨と嵐とは、民俗信仰の話型を踏えながら、それを超えた漢文学の世界が厳然と強固に拓かれている。もちろん、そこには、既にそれを超え、新たな物語的世界の創造がなされてもいる。『源氏』は、女人の手に成る女人の物語という、女房階級の文学という論点から見られることが多かった。もっとも、

従来はほとんど主人公「光源氏」という男性の視点から据えられることが多かった。最近は「女人源氏」という、女性の視点に立つ捉え方もなされている。「源氏物語にまなぶ」という論題も、そういう視点との関わりのなかで考えなければならない。しかし、紫式部が、意識のなかに捉え直したのは、精確で的確な歴史への眼差しであった。そこには「史眼」ともいうべきものが愁い輝いている。姫君が人生を学ぶ――人生の教訓の書であったことはいうまでもない。だが、やはり、『源氏』は「光源氏」の物語であり、「女人源氏」の物語でもあった。宮廷男性貴族、帝をもまき込んでうねりを増す王朝文化の集大成としての意味をもち続けている。『源氏』はただ、女性の手によって書かれた「女人」の物語ではなかった。

『源氏』を仏教的な「因果」という論点から捉えられた今西祐一郎氏（『岩波講座　日本文学と仏教　第二』1994年1月7日）は、「「因果」という語の不在は、このような平安時代仮名文における因果思想の現実的変容を象徴する現象」（61頁）だとされる。「因果」という語を一方に置くと、「宿世」の多様は、「単に仏教思想の浸透というだけではなく、「三世因果」という仏教思想の日本における著しく現世化された受容の跡を示す」（同）ものだとされる。そして「光源氏を見舞った因果応報の劇」は、仏教説話集に見られる、「現報譚」と同じではなく、「智者の「むくい」」であったとされる。それは「精神の劇としての因果応報であり」（74頁）「「心理的かつ主観的」であったことに伴う「安易な利己的解釈」ではなかったであろうか」（75頁）といわれ、「「智者の報い」は、ここに至って、現世ではほとんど不自由なく生まれついた貴人に仏が与えた、この世の無情を悟らせるための方便の一つ」（77頁）だったとされる。今西氏の立論は「貴族仏教」という視座に立てばともかく、妥当な見解のようにも見える。しかし、経典に見える「因果」、「宿世」の語をそういう論点で捉えることが妥当であるかは問題であるし、この世で犯した罪が、この世で報われた、それゆえに来世における償いは必要でなくなった、という論理を見落としてはならないのではないか。それは『北野天神縁

起』に見られる延喜聖帝の物語のような世界と深く関わっている。それはまた、「この世の無常を悟らせるための方便」という論理の裏側に存在する理念ではなかっただろうか。そこには、「貴族仏教」に依拠しながら、その世界を超えようとす浄土往生、念仏宗的、他力本願的な新しい、次代の仏教的世界への萌芽が見られるのではないか。横川の僧都に源信を重ねて読む「源氏読み」は既に古い時代から存在した。『往生要集』は、「法華によって仏の知慧を得、念仏によって往生を期する」（岩波日本思想大系『源信』1976年9月 第三版 428頁）という考えが中心にあり、「念仏結社を結成する支柱」（434頁）になっていた。それは、「浄土往生を願う人たちのなかに新風を送るもの」（436頁）であり、「念仏がたとえ散心のうちになされても、至誠の心をもってするかぎり仏の引摂を蒙ることにかわりはない」（454頁）とする。『横川法語』に「妄念をいとはずして信心のあさきをなげきて、こころざしを深くして常に名号を唱ふべし」とある。石田瑞麻呂氏（岩波思想大系『源信』解説）は「源信の『往生要集』自体が天台的な、余りに天台的なものの克服に向っていた」（462頁）と、源信の思想を天台的教学に、逆説的、二律背反的立場に立って捉えている。

源信の思想的影響は、静照の『極楽遊意』、覚超の『往生極楽問答』、『往生要集』研究の参考資料としての『安養集』、永観の『往生拾因』『往生譜式』、珍海の『決定往生集』、法然の『観経疏』などへと展開していく。そして法然による専修念仏が浄土教の新しい担い手として登場する。法然の念仏の限界を克服したのは親鸞であった。源信、法然、親鸞へと展開する宗教的思想の論述はきわめてむつかしい問題を持っている。わたしは、その用意がない。だが、『源氏』の宗教的思想は、「法華経五の巻をとく習へ」という『更級』の世界と同質のものであったとは考えられない。そこには、既に次代の宗教的世界を見通しているような作者の、孤独な魂が、揺曳しているようにも思われる。若紫の巻に登場する僧都と、某寺に住む行い人「聖」という、対応、対偶する二人の宗教人の存在は、王朝の貴族的仏教と一見何ら異なるものではないように見えながらも、反俗的という言葉に隠されてしまいがちに見えながらも、やはり、それとは

異なる仏教世界の対応、対立を示しているのではないか。それは、教理、教学を超えた二つの異なる宗教的世界の存在を、次代の新しい宗教的世界の到来を見通しながら示しているようにも思う。手習の巻に、「朝廷の召にだに従はず、深く籠りたる山」（『全集』282頁）とある横川の僧都の姿には、やはり、反俗的という語を超えた某寺に住む行い人、「聖」の面影と重なる世界が存在している。このように読んでくると、『源氏』は、また新しい「まなび」の世界をもって、わたしに迫ってくる。

二、新資料　高森正雄氏蔵『竹取物語』解題

一、形態など書誌学的研究

高森正雄氏（長野県上伊那郡箕輪町中箕輪）蔵『竹取物語』は、薄い鳥の子紙に金箔、金泥を散らし、金砂子の葦手絵様の大和絵の下絵を配した料紙を用いている。特に天地の部分に著しく虫損が見られ、金砂子なども落箔、変色し、輝きも失われがちで、あるいは銀箔を含むかとも疑われるほどである。総じて古色蒼然とした写本である。あまり目立たない存在であるが、書写された当初は、やはり、かなり立派な料紙に書かれた見事な風格を有する写本であったと想像される。物語の後半部、結末部に、散逸してしまったと思われる脱文、落丁部分があり、奥書きなどもない零本である。けれども、貴重な写本であることは、一見して疑い難いことのように思われる。以下、これを『高森本　竹取物語』と呼称し、「高森本」と略称する。縦24.2㎝横36.5㎝の料紙を無造作に半分に折り重ねただけで綴られていない。粘葉装や列帖装の痕跡は料紙に直接には残っていないが、折り目に若干粘付けされていたかと思われるような気配がないのでもない。だが、やはり綴じられていない折本として扱うのが適切である「竹とり　三冊」と書かれた本文とは別の薄い料紙で一括、はみだしながらも包まれている「ひと包み」の物語である。「竹とり　上」「たけとり　中」「たけ取　下」に折り分けられているが、この三葉の料紙は本文と同じ絵柄のものが用いられている。本文は同筆で能書。一人の手による書写と考えられる。「竹とり　三冊」と「たけ取り　下」とは筆蹟が近く本文の筆蹟とはやや異るようにも見える。

「上」と「中」とは筆蹟が近く、本文の筆蹟に近いように見える。一面は十行、一行は二十字前後で本文を書写し、和歌は二、三字下げて改行し、二行に分けて書く。二行目はさらに一字程度下げて書いている。上下句別行書きである。本文も数個所、例えば「第一資料」「竹とり　上」の最後に示したように、散らし書きになっている部分もある。本文に校合や書入れ等は一切なく、学術的、研究的立場から用いられたテキストではなかったと思量される。物語の一般的な享受や書家などの用に供せられたものであろうか。遊紙が何葉もあるが、墨付き三十三丁の零本である。本来は完本であったと見られるが、伝来の間に「上」「中」「下」も恣意的に分けられて来たらしく、順序も乱丁、落丁を生じている。現状からは三冊に分ける必然性に乏しく、後人によって整理の手が加えられたり、恣意的に寄せ集められたりしていると思われる。それはまた書写のもとになった書き本の形態を示しているのかも知れない。

写本では例えば五人の貴公子の求婚譚をそれぞれ改行し、別に章立てをするというような書き方は特にしないものが多いからである。さらに、遊紙が何葉も途中に配されていることは、あるいは書き本が既に完本でなかった事実を示しているのかも知れない。

金砂子葦手絵様大和絵の絵柄は、それぞれ料紙の表と裏とでは異なる絵柄が配されている。そして、表裏ともに料紙の真中から折ると、それぞれ左右ほぼ同じ絵柄が相対するように描かれている。相対する絵柄は、およそ次の十一種類に分類することができる。こうした絵柄の形態を注意深く調査すると、この料紙は、袋綴のような形で使用されたものではなかったことが明確である。そして、更に、「一折」が何葉ほどで形成されていた可能性が強いか、その相対的な絵柄の形態からあるいは推測することができるかも知れない。しかし、料紙の使用に当って、それほどきちんとした配分の意識はなく、もっと無造作であったのかも知れない。以下、「高森本」の形態と料紙の絵柄についてとの、二種類の資料を示すことにする。第一種から第十一種におよぶ絵柄の中には、例えば第一種のごときは、既に文様化している

かと思われるようなものも存在する。これは水流を表すものであろうか、川の流れと水草とを表しているかと思われる。「奈良絵本絵巻物」の集成というようなものではないが、桜楓社の平成六年版浮世絵カレンダーを資料にする。三、四月は泉市版歌麿筆の美人画であるが、この川の流れに非常によく似ている。歌麿のものは、やや具象的であり、流動感が強く表現されているのに対して、これは、文様化され、古風な趣を加えて雅である。第二種から第四種までは、やはり川の流れと深く関わる絵柄で、蓮や葦あるいは水草などが配されているかと思われる。第五図にも泉（池）に掛けた橋などが落箔の後に残っているように見られる。第八種の下方の絵柄は、茅と春蘭のようなものだろうか。歌麿の絵にも、土手に生える草花に同じようなものが描かれている。第十一種の絵柄は萩であろうか。七、八月の歌麿筆の上方に配されている絵柄も、やはり萩ではないかと思われる。歌麿筆の萩は、季節感を表現する象徴的存在としての萩のように見えるが、第十一種の絵柄は、かなり具象的な存在として描かれているように見える。ただ、料紙の絵柄はいずれも雅の趣を添えているように思われる。浮世絵に描かれている植物とこの料紙の絵柄との間には、微妙に異なる情趣の世界とやはり深く関わる雅の世界とが、混在していると考えなければならないようである。

奈良絵本の類にも、こういう絵柄を下絵に描いた料紙が用いられているものがある。挿絵が土佐派の絵師の手に成ると指摘されている反町茂雄氏旧蔵三冊本、列帖装半紙本奈良絵本『竹取物語』「上（二）ウ」にも、「第一種」のように流水に水草を配した下絵の料紙が用いられている。そればかりか、「第一資料」の「竹とり　上」の終りの形態に見られるごとく、

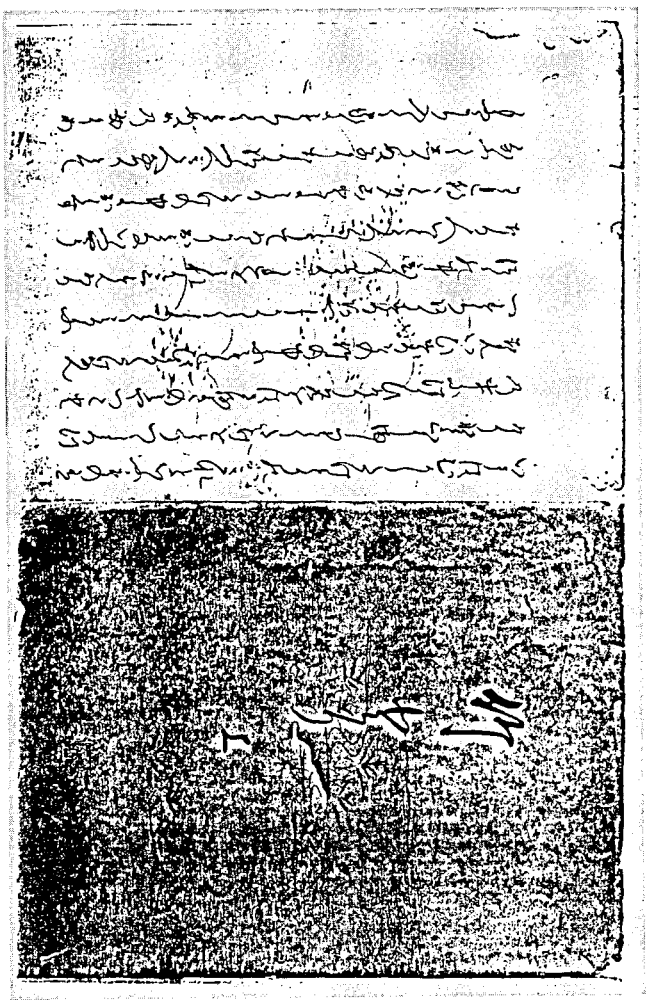
あきたなよ

竹のかくや

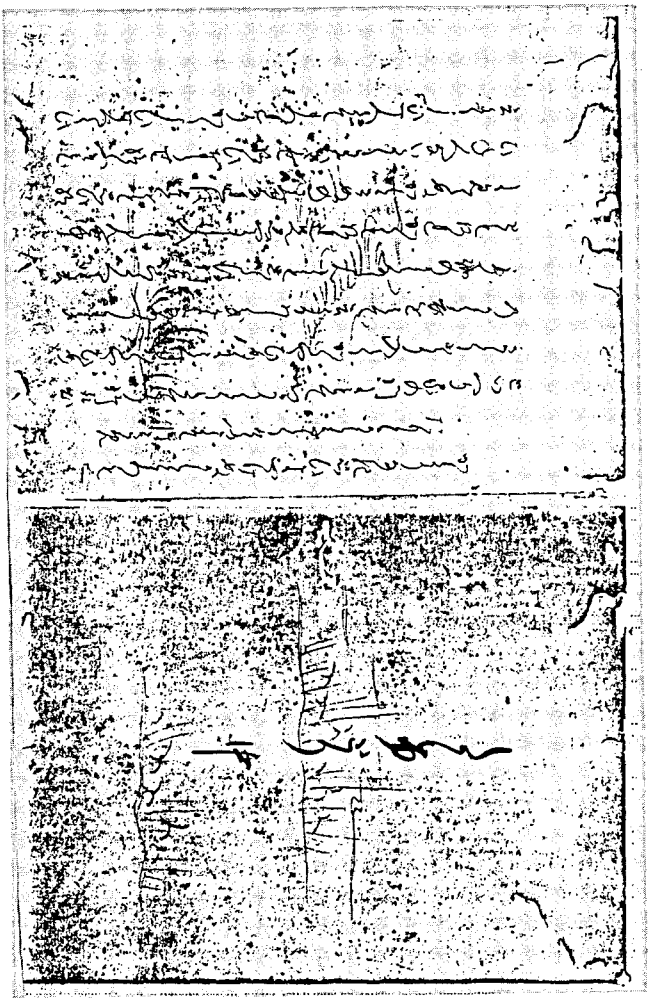
ひめと名をそ
つけはへる
なり（『奈良絵本巻集―竹取物語』早稲田大学出版部　昭62・11・20　10頁）

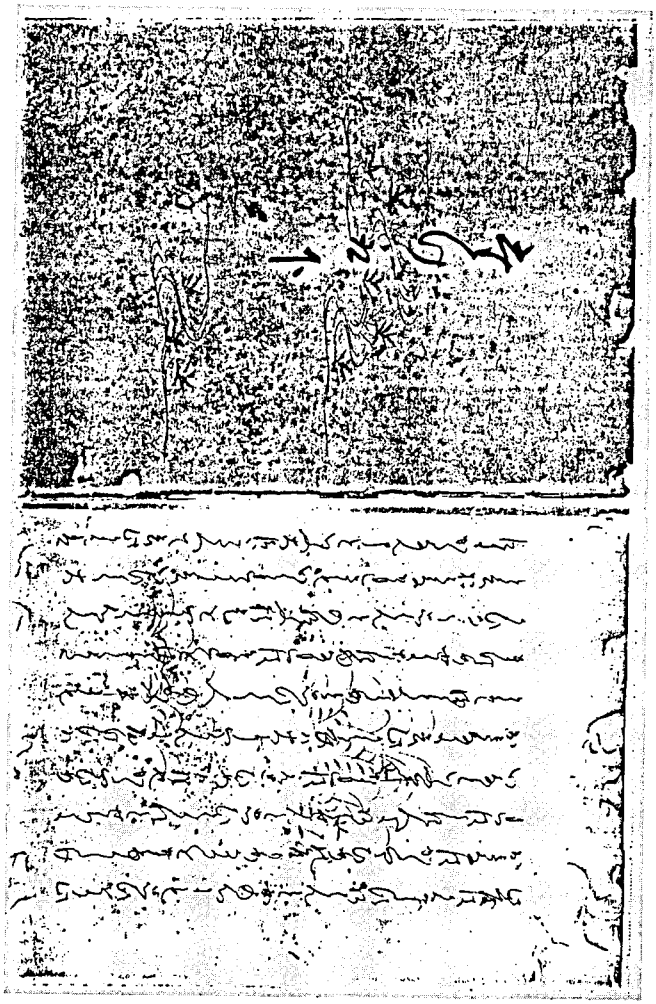
と同じように散らし書きにしているものがある。この奈良絵本は、江戸初期、ほぼ延宝頃の書写と推定されている。絵柄は似ているが、水辺に生えている葦であろうか、かなり鮮明で、「高森本」の下絵の絵柄と比較すると、写実的であり、流動感も見られる。同じようなほかの絵柄についても、写実的で、ずっしりとした趣が見られ、大和絵の流派の違いや時代の好みの違いのようなものを見せている。これらは、「高森本」の絵柄のように、文様化されたり、写生的であったりしても、そのなかに情趣や雅の世界を湛えた趣には乏しいように思われる。一般的に奈良絵本は、ほぼ室町末期から江戸初期、あるものは中期頃にかけて製作されたものであるが、これらの料紙に、こういう類の下絵や散らし書きの手法が用いられていることは、やはり注意されてよいことのように思われる。「高森本」の書写年代も、ほぼこの時代と重なるか、あるいは、さらに遡り得るかとも思われるが、それについては料紙のサイズなども考え、別に述べることにする。

初校の段階で、学恩を忝うしている某博士が、さる方に依頼されて、コピーを資料に予備的に調査してくださった結果を、博士から年賀状でいただいた。料紙の絵柄は、江戸中末期頃の連歌、奈良絵本などにその類型が見られるとのことであった。この三行を追記する。



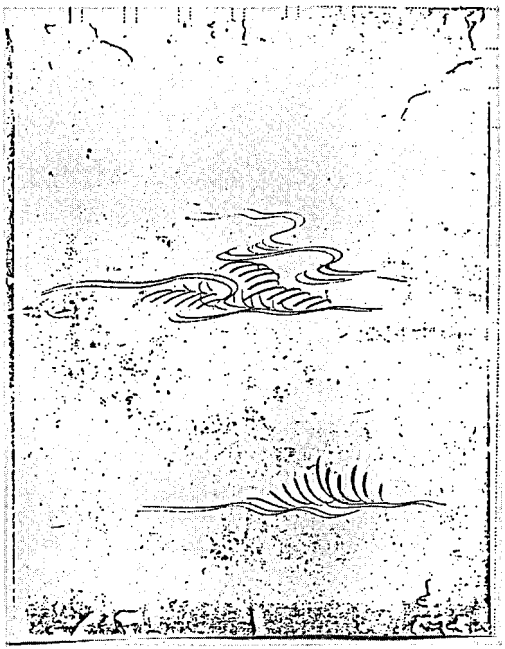
第一資料　「高森本」の形態

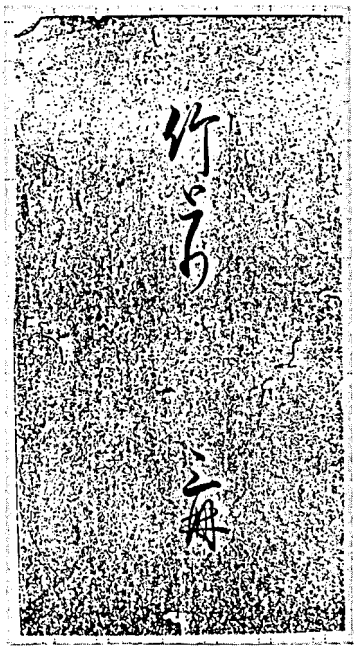




第二資料　「高森本」の料紙の下絵の絵柄

第一種

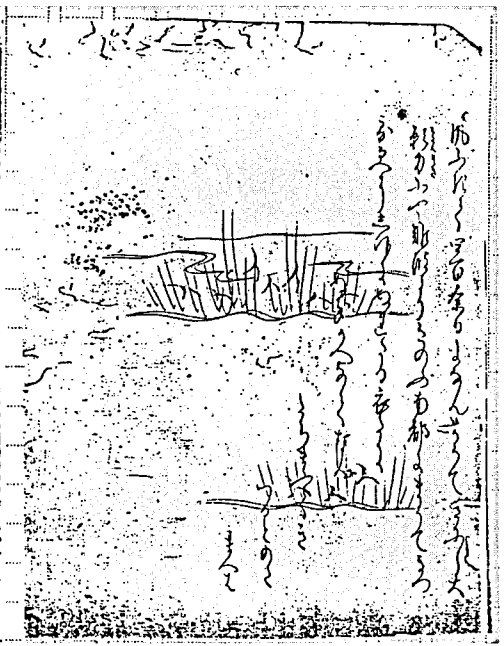




第二種

第一種

第四種



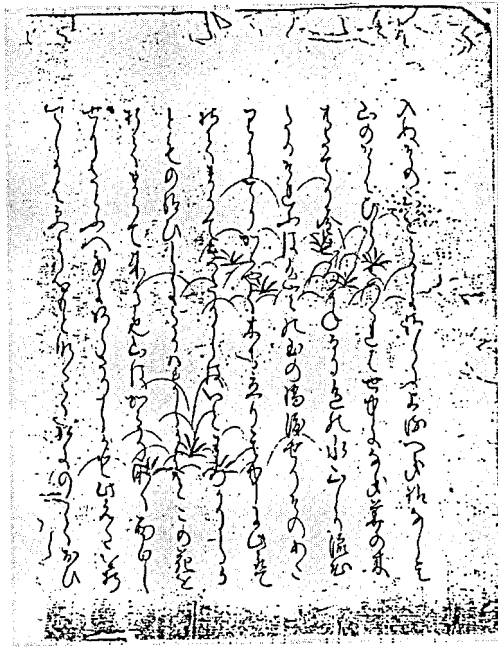
第五種

第六種

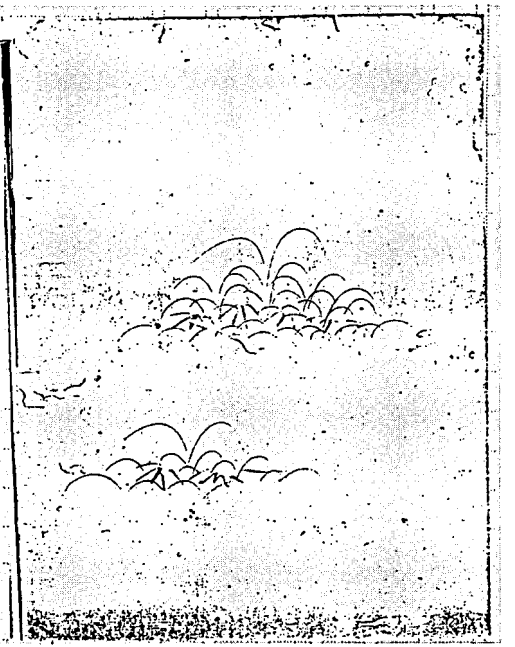
第七種

第八種

第九種



第十種



第十一種

二、文献学的研究（本文系統論　序説）

次に恣意的に寄せ集められている部分も存在するかと思量される「高森本」の、墨付き三十三丁に、現存形態のままの順序にしたがって番号をつけ、『新潮日本古典集成』本によって相当部分を示すと次のようになる。一葉、墨付き一丁分の所属不明のものは、「中」のなかに紛れていたので、仮にそれぞれ31・32頁として処理する。『新潮集成』本の頁数と行数とを示したが、〇内の数字は行数である。また、「高森本」各頁のはじめと終りの本文を『新潮集成』本の本文によってそれぞれ三字分で「高森本」の頁数の左側に示した。それらは句読点、符号などは字数に数えず、漢字、仮名の区別は示さずに、『新潮集成』本の表記によって三字で示した。既に指摘したごとく、披見し得た段階での「高森本」の体裁は、原形とは異っていて、恣意的に整理されている部分があるから、現存形態をそのまま論述することは、書誌学的にも、文献学的にもあまり意味がないように思われる。ただ、「高森本」の全体像を知るという便宜的な論点から『新潮集成』本を基準に集計すると次のようになる。

「高森本」の頁数	はじめと終わりの三字	『集成』本の頁数・行数

1	今は昔～嫗にあ	9①～9⑨
2	づけて～き養ふ	9⑨～10⑦
3	この児～つけつ	10⑦～10⑬
4	このほ～にの験	10⑬～12①
5	あるべ～々なり	12①～12⑧
6	けり世～ぬ子な	12⑧～13⑨
7	れば心～ざらむ	13⑨～14⑥
8	変化の～つのた	14⑥～15⑤
9	まふこ～ことな	15⑤～16④
10	り人の～まりと	16④～17⑤
11	申す翁～りなり	17⑤～17⑦
12	いづれ～人には	17⑦～18⑪
13	唐土に～きそと	18⑪～19⑪
14	やはの～取りて	19⑪～20⑦
16（注1）	錦の袋～めけむ	20⑦～21①
15	庫持の～ばその	22①～22⑨
53	時一の～の枝を	22⑨～23⑧
54	ば長櫃（びつ）～りける	23⑧～24⑧
40	いたづ～と言ふ	24⑨～25⑤
41	べから～一昨年	25⑤～26④
42	年の如～て殺さ	26④～26⑪
43	としき～きにて	26⑪～27⑥
44	ありそ～の中に	27⑥～28①
45	入りぬ～りて追	28①～28⑨
46	風吹き～まへば	28⑨～28⑬

47	翁聞き～申す内	28⑬～29⑪
48（注2）	匠寮の～ろとも	29⑪～30⑦
49	同じ所～せたる	30⑦～31⑤
50	物と聞～りをり	31⑤～31⑪
51	皇子は～見思は	31⑪～32⑨
52	むこと～めける	32⑨～33①
19	右大臣～てまう	34①～34⑧
20	で来な～世にも	34⑧～35⑧
21	昔の世～りけり	35⑧～35⑨
22	昔かし～る箱を	35⑨～36⑥
23	見れば～の歌は	36⑥～36⑬
17	かぎり～てこの	37①～37⑪
18（注3）	この度～の皮は	37⑪～38⑩
32	唐土に～るなり	38⑩～38⑪
24	なにの～人々阿	38⑪～39⑩
25	部の大～ことは	39⑩～41⑥
26（注4）	いとも～の便と	41⑥～42⑧
27	と名を～っ取る	42⑧～43⑦
28	あるい～り明か	43⑦～44③
29	し暮ら～言ふと	44③～44⑫
30	思して～たまふ	44⑫～45⑨
31（注5）	楫取答～申すぞ	45⑨～46③
33	国王の～よしと	60⑥～61④
34	聞こし～や姫に	61④～62①
35	かたら～言へば	62①～62③

36	37	38	39	55	56
かじや～れ昨日	今日帝～と奏す	さす帝～覚えさ	せ給ひ～かぐや	姫もと～姫ゆゑ	御返事～も見む
62③～62⑬	63①～63⑪	63⑪～64⑧	64⑧～65⑧	65⑧～66③	66④～66⑥

57	58	59	60	61	62
これを～書きて	通はせ～々竹取	の翁に～ふぞ思	すらむ～き給ふ	人目も～ければ	思し嘆～にはの
66⑦～67①	67①～68⑧	68⑧～69⑫	69⑫～70⑫	70⑫～71⑧	71⑧～72⑥

63	64	65（注6）	
またの～て竹取	が家に～まうで	来ば補～弓矢を	
72⑥～73①	73①～73⑨	73⑩～74⑤	

（注1）「高森本」は『新潮集成』本21②「とて」から21⑧「言ひける」まで脱文、落丁。ほぼ一頁分に相当する。

（注2）「高森本」は30⑦「もろともに」の「に」ナシ。

（注3）「高森本」は37⑪「この度」の「この」を重複書写。

（注4）「高森本」は42⑧「使と」の「と」を重複書写。

（注5）「高森本」は『新潮集成』本46④「青反吐を」から60⑥「いかでか帰り参らむ」まで15頁に及ぶ脱文、落丁がある。「龍の頸の珠」の後半部から「燕の子安貝」「御狩のみゆき」の冒頭部に至る部分である。それは、墨付き

八丁から十丁以上に及ぶかと思われる。

（注6）「高森本」は『新潮集成』本74⑤「帯してをり」から85①「言ひ伝へたる」まで、物語結末部分11頁に及ぶ脱文、落丁がある。本文だけで墨付き六丁から八丁以上に及ぶかと思われる。

「高森本」は『新潮集成』本で27頁に及ぶ脱文があり、全体の頁数に対して36％、丁数推定で十五丁から十九丁分、30.9％から39.4％に及ぶ本文が脱文、落丁となっているかと思量される。三割強から四割弱に及ぶ脱文率を有する零本である。また、七箇所に及ぶ乱丁が見られる。これらのことは、「高森本」が、粘葉装や列帖装のように、やはり綴じられた「書物」として伝来しなかったことと深く関わるもののように思われる。そして、このことは、また、「高森本」がある時代に享受されてきた形態と深く関わるもの――書家の手本のごとく、物語として読むのではない享受の方法――そういう時代を経過してきたのかも知れない。零本「高森本」が高森家の所蔵となった経由はあまり明確でなく、散逸部分の存在についても不明であるが、代々貴重な文書として秘蔵されてきたことは事実である。ただ、書写に用いられている料紙のサイズ、絵柄などから、あるいは書写年代を推定することも可能であろうかと思われる。このことについては、本稿の冒頭でも既に若干論述したことではあるが別に述べることにする。高森家には、別に『竹取物語絵巻』が秘蔵されている。金泥を天地に施し、色彩も鮮かで年代を感じさせない絵巻であるが、やはり紙魚がさしている。人物の描き方に特徴をもつ絵巻で、女性の表情、衣装などに、唐様、韓風を取りまぜているかと思われるような面も見られる。もとは巻子本であったと推定されるが、損傷によってであろうか、反古を用いて裏うちが施され、断簡として保存されている。このことについても、別に論述するが、現状が断簡の形態で秘蔵されていることは非常に残念で惜しまれる。この絵巻が、こういう形態で保存されていることは、損傷を補うという偶然の結果であって、このことと、物語

本文の享受とは直接にはなんら関わるものではないのかも知れない。だが、「高森本」が折本の形態で保存されている現存形態と関わるものがあったと思量すれば、あるいは、ある時代の『絵巻』の享受には、物語本文の享受と深く関わる世界があったのかも知れないと臆測することも出来る。それは、物語をたのしんで読むとか、書家が手習いを教えるために用いるとか、嫁入道具として秘蔵されたとか、そういう享受に供されていたのかも知れないということである。高森家当主が、これを額装され、鑑賞されてたのしまれていたらしい事実をさかのぼれば、あるいは、そういうことになるのかも知れない。それらについても、改めて述べなければならないが、やはり本来、物語と絵巻とは別々に存在していたと考えるのが順当のように思われる。

次に、「高森本」の本文の系統論的性格について、文献学的に調査、研究すると次のごとくである。

「高森本」の本文六十五頁のうち、次の五箇所十六頁分を物語の展開、全体像を考慮し、任意に選んで資料とした。ほぼ全体の25％に相当する部分からの推論である。

(一)、冒頭部分から求婚譚のはじめの部分。一頁から四頁までの四頁分。

(二)、仏の御石の鉢の直前の部分から脱文を隔てて蓬莱の玉の枝の冒頭部分。十四、十六、十五頁の三頁分。

(三)、火鼠の皮衣の直前の部分からそのはじめの部分。五十二、十九、二十頁の三頁分。

(四)、龍の頸の玉の直前の部分からそのはじめの部分。二十五頁から二十七頁までの三頁部分。

(五)、かぐや姫の昇天直前の部分からそのはじめの部分。五十七頁から五十九頁までの三頁分。

中田剛直氏の『竹取物語の研究　校異篇・解説篇』（塙書房　昭60・4）の底本である木活字十行甲本（横山重氏・安田文庫蔵）に、校異として採択された諸本の異文を考慮して「高森本」を比校した。さらに、久曽神昇博士の『竹取物語』（汲古書院　昭49・11）に影印されている『志香須賀文庫蔵甲本』、同『乙本』、『山岸徳平博士蔵本』『宮内庁書陵

部蔵　霊元院本』の四本とも校合した。それらは「久」「曽」「山」「霊」と略称され、既に中田氏が「校異篇」に採択されてるが、四本とも再度校合した。中田氏の「校異篇」に若干の修正、補訂を加えることができた。以下、諸本の略号は、すべて中田氏の呼称に従ったが、四角の枠内で示された複数の諸本を一括した呼称は用いなかった。奈良絵本や絵巻の本文が、多くは版本や古活字本の本文であるように、「高森本」の本文も、そのような類の物であるかも知れないし、あるいは、別系の本文であるかも知れない。「資料」は、まず「高森本」の異文をあげ、傍線の下に、それと共通する本文を有する諸本を示す。見せ消ち、異本による異文の表記、併書、補入等は、、それを示さない。

①さるきの――底本・曽・円・尊・戸・金・内・大・伊・徳・桃・東・光・神・正・中・五・裏・山・曽・

②家に――新・瀬・平・蓬・円・尊・類・滋・五・解・裏・

③はこに――太・友・京・安・前・東・光・神・正・抄・松・中・五・曽・山・

④竹とるに――前・徳・光・神・正・抄・五・裏・

⑤いつきかしつき――似・太・友・京・安・類・伊・東・光・神・正・友・抄・中・五・解・裏・

⑥やしなふほとに――前・丹・伊・東・光・神・正・友・抄・松・中・五・解・

⑦かたちのけさう（「けさ」虫損著しく明確でないが「けさ」と判読。「けさう」「けそう」を区別しない）――底・新・似・太・京・安・前・山・島・荒・蓬・吉・曽・丹・戸・金・類・大・霊・伊・徳・桃・宮・東・光・神・正・中・

⑧なくなかさみけり――似・太・友・京・高・瀬・反・

⑨ひさしくなりさかへにかり（「さ」虫損著しく明確でないが「さ」と判読）――光・神・正・抄・五・（「なりて」友）

⑩つけ侍る――友・光・神・正・抄・五・〈「侍る」東・「名付侍る」松〉

⑪夜にもここかしこより――類・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・

⑫のそきかひまみ（あなをくしり　ナシ）―類・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・

「資料（一）」には、「高森本」の独自異文は存在しない。①から⑫まで十二箇所の異文はすべて中田剛直氏の「校異篇」に採択された諸本と共通異文を形成する。それらが、如何なる諸本と共通異文を形成するかを一覧に示すと、次のごとくである。〈〉内に示したものは重要異文が共通し、一部異なる異文が存在するものであることを示す。これを0.5例として扱った。○内の算用数字は、「資料」番号である。

古本系統本	資料番号	共通異文数	共通異文率（%）
底本	①⑦	2	16.7
新	②⑦	2	16.7
似	⑤⑦⑧	3	25
太	③⑤⑦⑧	4	33.3
友	③⑤⑧⑩	4	33.3
京	③⑤⑦⑧	4	33.3
安	③⑤⑦	3	25

通行本系統本	第一類	武	平	高	加	祐	久	前	山	第二類	島	北	度	荒	第三類	蓬	瀬
			②	⑧				③④⑥⑦	①③⑦		⑦			⑦		②⑦	⑥⑧
	9	0	1	1	0	0	0	4	3	2	1	0	0	1	106.5	2	2
		0	8.3	8.3	0	0	0	33.3	25		8.3	0	0	8.3		16.7	16.7

神	光	東	宮	桃	徳	伊	霊	大	滋	内	類	金	戸	尊	丹	曽	吉
①③④⑥⑦⑨⑩⑪⑫	①③④⑥⑦⑨⑩⑪⑫	①③⑥⑦〈⑩〉⑪⑫	⑦	①⑦	①④⑦	①⑥⑦	⑦	①⑦	②	①	②⑦⑪⑫	①⑦	①⑦	①②	①②⑥⑦	①⑦	⑦
9	9	6.5	1	2	3	3	1	2	1	1	4	2	2	2	4	2	1
75	75	54.2	8.3	16.7	25	25	8.3	16.7	8.3	8.3	33.3	16.7	16.7	16.7	33.3	16.7	8.3

正	①③④⑥⑦⑨⑩⑪⑫	9	75
反	⑥⑧〈⑨〉⑪⑫	4.5	37.5
抄	③④⑥⑨⑩⑪⑫	7	58.3
松	③⑥〈⑩〉⑪⑫	4.5	37.5
中	①③⑤⑥⑦⑪⑫	7	58.3
五	①②③④⑤⑥⑨⑩⑪⑫	10	83.3
解	②⑤⑥	3	25
裏	①②④⑤	4	33.3

「高森本」の本文と最も親近関係にあるのは、通行本系統第三類の『東洋文庫蔵本』『光藤珠夫氏蔵本』『神宮文庫蔵本』『正保本』『竹取物語抄本』『中田本』『五十嵐本』の七本であり、共通異文率は83.3％から58.3％におよぶ。なかでも、『五十嵐本』とは共通異文十例、共通異文率83.3％ときわめて親近関係が深い。「高森本」が『五十嵐本』と異文を形成する資料⑦、⑧の異文において、⑦は第三類では『東洋文庫蔵本』以下に十七本と、第二類では『島原本』以下一本と、第一類では前田本以下一本と、古本系統本では底本以下五本とそれぞれ共通異文を形成する。⑧も、第三類では反町本と、第一類では高山本と、古本系統本では似閑本以下四本とそれぞれ共通異文を形成している。このようにその異文は各類の独自異文とはなっていない。このことは、「高森本」の系統論的関係を明確にする上で決定的な証跡をとどめることになると思量される。さらに久曽神博士らによって指摘されていることでもあるが、中田氏の系統論そのものへの問題を含めて、「資料（二）」以下の本文の証跡を集計し、検討を加えながら、その系統論的関係を考えなければならな

いように思う。だが、このような本文の整合性が以下の「資料」についても同じように指摘できるかは、きわめて疑問である。

「資料（一）」と同じように以下、本文の校異を示す。

資料（二）

⑬うんしてみなかへりぬるを（「なほ」ナシ）――「高森本」独自異文。

⑭ひかりをたにも――底・友・京・安・瀬・久・山・荒・丹・尊・金・類・内・滋・大・霊・伊・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・抄・中・五・裏・

⑮出給ひ――類・滋・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・中・

⑯こき給ぬ――正・抄・

資料（三）

⑰みつけ奉らす御子の――「高森本」独自異文。

⑱見え給はざりける也――友・前・島・類・宮・光・神・正・反・抄・松・中・五・裏・

⑲人にて――底・前・荒・蓬・吉・曽・丹・尊・戸・内・滋・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・

⑳彼のうらにをる――丹・類・東・光・神・正・反・抄・中・五・解・裏・

㉑はしらさせん――「高森本」独自異文。

㉒まうて来る――丹・内・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・

㉓みるに云――山・荒・蓬・丹・光・神・正・抄・松・中・

㉔もとて――底・

資料（四）

㉕かは衣を――友・京・安・前・山・光・神・正・反・抄・五・解・裏・〈「皮ころもを」松〉

㉖ある人の云――似・大・友・京・安・前・山・度・荒・蓬・丹・光・神・正・反・抄・松・中・五・

㉗みゆき大納言――加・〈「みゆき」久〉

㉘奉りたらんには――「高森本」独自異文。

㉙かたき物――底。久・度・滋・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・解・裏・

㉚使ととなを――「高森本」独自異文。

㉛へきとの給ふ――山・正・抄・松・中・五・

㉜の給はせたり――似・太・友・京・安・瀬・前・荒・光・神・正・反・抄・中・五・裏・松・

㉝承りて罷りぬ――底・度・類・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・抄・松・中・五・

㉞取得すすに（「に」か。虫損で判読困難）「高森本」独自異文。

㉟すき事し給ふ――「高森本」独自異文。

資料（五）

㊱よるべくも――蓬・吉・曽・金・内・

㊲過し給ふ――似・太・友・京・安・瀬・丹・光・神・正・反・抄・松・中・五・裏・

㊳よしなき――「高森本」独自異文。

㊴かよはさせ――友・京・安・前・山・度・金・類・内・大・霊・伊・徳・桃・宮・東・光・神・正・反・抄・

松・中・五・

㊵月かほ――底・太・高・山・吉・曽・尊・金・内・大・霊・伊・徳・桃・宮・東・光・神・正・友・松・中・

㊶いみしこく―京・安・度・宮・光・神・正・

㊷つけて云――似・太・友・京・安・山・度・蓬・光・神・正・反・抄・松・中・五・

次に「資料（二）」から「（五）」までを集計すると次のようになる。

古本系統本	資料番号	共通異文数	共通異文率（%）
底本	⑭⑲㉔㉙㉝㊵	6（8）	16.7（16.7）
新		0（2）	0（4.2）
似	㉖㉜㊲㊷	4（7）	11.1（14.6）
太	㉖㉜㊲㊵㊷	5（9）	13.9（18.8）
友	⑭⑱㉕㉖㉜㊲㊴㊷	8（12）	22.2（25.0）
京	⑭㉕㉖㉜㊲㊴㊶㊷	8（12）	22.2（25.0）
安	⑭㉕㉖㉜㊲㊴㊶㊷	8（11）	22.2（22.9）
瀬	⑭㉜㊲	3（5）	8.3（10.4）
		42（66）	

通行本系統	第一類	武	平	高	加	祐	久	前	山	第二類	島	北	度	荒	第三類	蓬	吉
				㊵	㉗		⑭〈㉗〉㉙	⑱⑲㉕㉖㉜㊴	⑭㉓㉕㉖㉛㊴㊵㊷		⑱		㉖㉙㉝㊴㊶㊷	⑭⑲㉓㉖㉜		⑲㉓㉖㊱㊷	⑲㊱㊵
18.5	0	0	0	1	1	0	2.5	6	8	12	1	0	6	5	221.5	5	3
(14)			(1)	(2)				(10)	(11)	(11)	(5)			(6)	328	(7)	(4)
				2.6	2.6		6.9	16.6	22.2		2.6		16.7	13.9		13.9	8.3
			(2.1)	(4.2)				(20.8)	(22.9)		(10.4)			(12.5)		(14.6)	(8.4)

正	神	光	東	宮	桃	徳	伊	霊	大	滋	内	類	金	戸	尊	丹	曽
14 15 16 18 19 20 22 23 25 26 29 31 32 33 37 39 40 41 42	14 15 18 19 20 22 23 25 26 29 32 33 37 39 40 41 42	14 15 18 19 20 22 23 25 26 29 32 33 37 39 40 41 42	14 15 19 20 22 29 33 39 40	14 15 18 19 29 33 39 40 41	14 15 19 29 33 39 40	14 15 19 29 33 39 40	14 39 40	14 39 40	14 39 40	14 15 19 29	14 19 22 36 39 40	14 15 18 20 33 39	14 36 39 40	19	14 19 40	14 19 20 22 23 26 37	19 36 40
19	17	17	9	9	7	7	3	3	3	4	6	6	4	1	3	7	3
(28)	(26)	(26)	(15.5)	(10)	(9)	(10)	(6)	(4)	(5)	(5)	(7)	(10)	(6)	(3)	(5)	(11)	(5)
52.8	47.2	47.2	25.0	25.0	19.4	19.4	8.3	8.3	8.3	11.1	16.7	16.7	11.1	2.6	8.3	19.4	8.3
(58.3)	(54.2)	(54.2)	(32.3)	(20.8)	(18.8)	(20.8)	(12.5)	(8.4)	(10.4)	(10.4)	(14.6)	(20.8)	(12.5)	(6.3)	(10.4)	(22)	(10.4)

反	⑭⑮⑱⑲⑳㉒㉕㉖㉙㉜㉝㊲㊴㊵㊷	15	(19.5)	41.7 (40.6)
抄	⑭⑯⑱⑲⑳㉒㉓㉕㉖㉙㉛㉜㉝㊲㊴㊷	16	(23)	44.4 (47.9)
松	⑱⑲㉒㉓〈㉕〉㉖㉙㉛㉜㉝㊲㊴㊵㊷	13.5	(18)	37.5 (37.6)
中	⑭⑮⑱⑲⑳㉒㉓㉖㉙㉛㉜㉝㊲㊴㊵㊷	16	(23)	44.4 (47.9)
五	⑭⑱⑲⑳㉒㉕㉖㉙㉛㉜㉝㊲㊴㊷	14	(24)	38.9 (50.0)
解	⑳㉕㉙	3	(6)	8.3 (12.5)
裏	⑭⑱⑳㉕㉙㉜㊲	7	(11)	19.4 (22.9)

共通異文の下に（）で示した数は、「資料（一）」を加えた数で、共通異文率のしたに（）で示した数は、同じように「資料（一）」を加えた百分率である。各系統の数の下に（）で示した数も同様である。「資料（二）」以下には、「高森本」の独自異文（明らかに誤字と思われるものを加える）は、資料番号⑬、⑰、㉑、㉘、㉚、㉟の六例である。「資料（二）」から「五」までの共通異文数は三十六例、「一」を加えた総数は四十八例である。物語冒頭の部分は、共通異文率で見ると、『五十嵐本』が83.3％で親近関係が最も高く、『光藤珠夫氏蔵本』『神宮文庫蔵本』『正保本』が75％でこれに次ぎ、『竹取物語抄本』『中田本』が58.3％、『東洋文庫蔵本』が54.2％で、この七本が50％以上の共通異文率を有する。「資料（二）」以下では、最も親近度の高い『正保本』で52.7％、以下、『光藤珠夫氏蔵本』『神宮文庫蔵本』47.2％、『竹取物語抄本』『中田本』44.4％、『反町茂雄氏旧蔵本』41.7％、『五十嵐本』38.9％の順となっている。これを一覧にまとめると、次のようになる。

上段は順位、下段は百分率。

	資料(一)	資料(二)以下	総合
五十嵐本	1 83.3	7 (6位松本本)	4 50
光藤珠夫氏蔵本	2 75	2 47.2	2 54.2
神宮文庫蔵本	2 75	2 47.2	2 54.2
正保本	2 75	1 52.7	1 58.3
竹取物語抄本	5 58.3	4 44.4	5 47.9
中田本	5 58.3	4 44.4	5 47.9

「資料（一）」で親近度の最も高い「五十嵐本」が「高森本」に対して、どのような異文を形成しているかを調べると次のごとくである。

①翁といへる―五・抄・

②かたち―五・瀬・武・平・高・加・祐・久・北・度・尊・内・滋・抄・裏・解・

③名をは―五・抄・解・裏・

①は通行本系統本の第三類、②は、古本系統本、通行本系統本の第一類・第二類・第三類、③は通行本系統本の第三類とそれぞれ共通異文を形成している。これらの異文が、第三類の諸本を共有している事実に注意する必要がある。そして、「高森本」の共通異文も「資料（一）」に関するかぎり、すべての異文が第三類の諸本を共有している。この事実は

「資料（一）」物語冒頭部分について、「高森本」は、通行本系統第三類に属する諸本であり、「五十嵐本」と共通異文率が83.3％に達し、「高森本」との異文が、①いふ――いへる・②かたちの――かたち・③名を――名をば・というきわめて些少、小異の異同にとどまることは、「高森本」が「五十嵐本」にきわめて近いテキストであると考えなければならないことを示している。

「資料（二）」以下については、「高森本」の共通異文率が50％台を割りこむなど低く、特定のテキストとの親近関係を指摘することは困難である。だが、「資料番号」㉔・㉗などを除いては、やはり、すべての異文が、通行本系統本第三類の諸本と共通異文を形成している。このことは、「高森本」が第三類に属する諸本であることを示している。中田剛直氏は、「五十嵐本」について次のように述べられている。

写本一冊。現蔵者不明である。約縦六寸一分五厘、横四寸一分の小型本である。稿者はこの現本には接したことなく、ここに記述するのは新井信之氏のものした影写本によるものである。おそらく袋綴装であったらう。表紙の左肩に「竹取ものかたり」なる題簽がある。墨付四十四丁、一面十行、一行約二十字詰。巻末に、

右竹取物語ハ五十嵐篤好筆也

〃政雄氏蔵

とある。「竹取物語裏解」の著者五十嵐政雄の父篤好の筆写本、本文は大体抄本文に近いが、古本文が一部に竄入してゐる珍しい一本であることは先にも述べたところである。ただ現本を直接調査したわけではないので断言しえぬが、新井氏の影写本によると「かくや姫を見まほしうて物もくはすおもひつゝかの家に行きてたゝすみ『ありきけれと……比世の人は男は女にあふ』事をす女は男にあふことをす」（三ウ―五オ）の『　』中の本文を欠く。ただし書写の体裁をみると、どうも影写する際に頁がはりで頁をめくる際二丁重ねてめくった結果の、頂度見開き二丁分の脱落とみら

れなくもない。同本に接することのあられる方の再調査をお願ひしておく。（『研究』260頁）

『竹取物語裏解』は、明治三十五年春に成る未刊の写本。五十嵐政雄著。京都大学図書館蔵。「五十嵐本」は、父篤好の筆写本であるが、管見では現在のところ、刊本を書写したものではなさそうである。書写年代も明治初期から江戸末期に辿り得るかどうか、というきわめて新しい写本である。中田氏も未見ということもあろうが「解説篇」の比校から除外されている。「高森本」の物語冒頭部分は、この「五十嵐本」と祖を同じくする写本であったと思量されるが、「資料（一）」の異文、「資料（二）」以下の諸本との親近度や異文から考えたり、推定される書写年代や物語の享受形態などから考えたりすると、刊本そのものや、刊本によりながら諸本を取り合わせて校合書写したものとも考えられない。おおよそ、第三類本の混成本と位置づけるべきである。古本系統本や通行本系統本第一類、第二類との混態は見られるが、それらは、いずれも第三類の別の諸本と共通異文を形成しているので、こういう視座からすれば、直接的には、混態は生じていないとも考えられる。「高森本」は現存諸本の本文形態とは異なる不整合性を有するテキストとして、かえってきわめて貴重な資料的価値をもつものであると考えられる。そしてこうした形態を有する諸本が存在していたことが注意される。

「高森本」は、折本で、しかも零本ではあるが、三冊一包み本として所蔵されている点にも注意しなければならない。既に指摘したごとく、「上」「中」「下」の三冊には、それぞれ本文と同じ料紙が用いられている。「上」「下」の絵柄は第三種、「中」の絵柄は第四種で、いずれも流水に植物を配した絵柄が用いられている。『増訂版　図書総目録　第五巻』（岩波書店　一九九〇年五月一〇日）「竹取物語」の項の伝本を分類すると、写本で三冊（巻・軸）本は七例（うち二例は三冊本もあるもの）三冊本一例。一冊本四〇例で、一冊本が群を抜いて最も多く、三冊本がこれに次いでいる。版本では一冊本九例。二冊本六例で、三冊本は存在しない。これによれば、三冊本の形態は版本には見られないものであ

り、写本の伝本形態であることが確認される。こうした点からも、「高森本」は、やはり刊本や刊本に諸本を取り合わせた校合本ではなく、もともと書き本の形態としてそのようなものであったと考えることができる。管見に入った版本に「高森本」と同一のものは存在しない。だが、三冊本となってはいるが、別に仕立てられているものが七例中二例も存在する。こうした事実は、あるいは三冊本の形態が、それ以外のものより後から仕立てられた形態であったことを示唆していると考えるべきであろうか。ほぼ年代を推定できる三冊本の写本には、『図書総目録』と中田剛直氏の『研究』とによれば、次のようなものがある。

新井信之（寛文頃写三冊）。

反町茂雄氏旧蔵絵巻三軸　元禄頃写。

江戸初期から中期以前頃には、少なくとも三冊本の形態が存在していたと考えてよさそうである。しかし、やはり一冊本が写本の中心であったことは動かし難い事実である。新井信之氏が取り上げられた写本も、一本を除いてはやはり一冊本である。中田氏は、

従来、竹取は整版本に見るごとく上下の差別はないが、この十行乙本に至って始めて二冊に分冊され、後に十一行丙本、丁本、正保整版本に踏襲されるのである。（『研究』218頁）

と指摘されているが、写本の形態的相違にも、あるいは、そういう変遷があったと考えるべきであろうか。書写年代が明らかにされていない三冊本が多いのであるが、そういう形態が写本の形態として、江戸初期まで辿り得ることも、また事実である。

このように「高森本」は能筆であり、本文系統論の上でも、その形態や享受論の上でも多くの問題をかかえる貴重な資料である。

高森正雄氏蔵『竹取物語絵巻』や料紙の問題など、古筆学の成果を踏まえて、その書写年代などをめぐる問題については、さらに別に稿を改めて考えなければならいと思う。問題を残しながらも、現時点で考え得ることがらについてそのおおよそを論述し、さらに改めて再論を加えたいと考えている。

付記（一）

「『源氏物語の世界』――公開講座　秋桜セミナー追考――」は、平成六年度公開講座として、次のような日程と内容で実施されたものの草稿をもとに後から若干手を加えなどしてまとめたものである。失礼な物言いになっているところがあって心苦しいきわみであるが、ご海容をいただきたい。

5／7～6／11　毎週土曜日　13:30～15:00　全5回（6／4はありません）

第一回（5／7）わたしのうちなる『源氏物語』(1)
　―折口・武田・三谷学との出会い。何を読もうとしたか―

第二回（5／14）『源氏物語』をどう読むか　―物語のしくみを読む―

第三回（5／21）『源氏物語』はどう読まれてきたか　―読みのなかに求められてきたもの―

第四回（5／28）わたしのうちなる『源氏物語』(2)
　―佐藤・千勝先生から疎外、藤原定家論にふれつつ。うつくしく、かなしい女人達との出会い―

第五回（6／11）『源氏物語』に「まなぶ」　―文学の「こころ」にふれつつ―

企画、実施に当って、教務委員会、事務局担当のみなさんに、大変お世話になった。厚くお礼を申しあげ、大型講座という新しい試みのご期待に、添い得なかったのではないか、と反省している。この講座を最終回まで盛り立てていただいた「伊那源氏」、「茅野源氏」、「広丘古典の会」のみなさん、教え子や知己の皆さんに心から感謝のことばを申しあげたい。ともかく、こんな形で責を果させていただいたことを付記する。（平成6・10・26・）

付記（二）

高森正雄氏蔵『竹取物語』『竹取物語絵巻』は、徳嵩富男氏が間に入られ、本学で非常勤講師をなさったことがある山田久先生に調査を依頼された。山田先生のご紹介で筆者の所に持ち込まれたという経由があった。お受けはしたものの、春には五回に亘る公開講座「秋桜セミナー」の『源氏物語』の世界」の準備などがあり、それに追われたり、手元に文献も揃っていなかったりして滞りがちであった。この二百数十枚に及ぶ、「一」、「二」の原稿を通して、図書館の浜美和子氏の手をわずらわし、国立国会図書館、長野県立図書館、信州大学附属図書館、上田女子短期大学図書館などにずいぶんとお世話になった。また、上条耿之介、田辺由太郎、野口武司、西譲二、立沢節朗諸先生には何かとお世話をいただいた。「一」、「二」、の原稿の淨書、整理は、岩波乃里栄、花岡美智子さんにお願いした。本格的な調査・研究は後日を期して再検討を加えたいと考えている。貴重な所蔵品の披見、研究を許された所蔵者高森正雄氏をはじめ、お力添えをいただいた多くの方々に感謝し、厚くお礼を申しあげて、付記とする。（平成6・5・19・）